

安芸地方における中世須恵器の研究

—西条盆地の出土資料を中心として—

永田千織・藤野次史

1. はじめに

西日本における古代の須恵器に系譜をもつ中世陶器は、兵庫県東南部の東播系須恵器（播磨）、岡山県南東部の備前焼（備前）、岡山県東南部の亀山焼（備中）、岡山県北部の勝間田焼（美作）、香川県の十瓶山焼（讃岐）など、現状では様相が十分明らかではないものがあるものの、中世初頭⁽¹⁾においてはほぼ旧国単位で生産が行われている。それらの多くは生産地周辺を中心に比較的狭い流通圏を形成しているが、中世前期⁽²⁾を通じていくつかの産地に収斂されていく。安芸地方においても、東広島市小越窯跡、旦原窯跡など、中世初頭に古代の須恵器に系譜をもつ焼物が生産され、その流通圏は現状では明らかにできないものの、一定の広がりを見せていたものと思われる。しかし、13世紀代には搬入品である東播系須恵器、亀山焼が主体となるようで、14世紀以降は備前焼が加わる様相を示している。古代の須恵器に系譜をもつ中世陶器は、酸化炎焼成系須恵器と還元炎焼成系須恵器に大きく分類されており（楢崎 1977）、本稿では後者（以下、中世須恵器とする）について、安芸地方の様相を西条盆地を中心として考察したい。

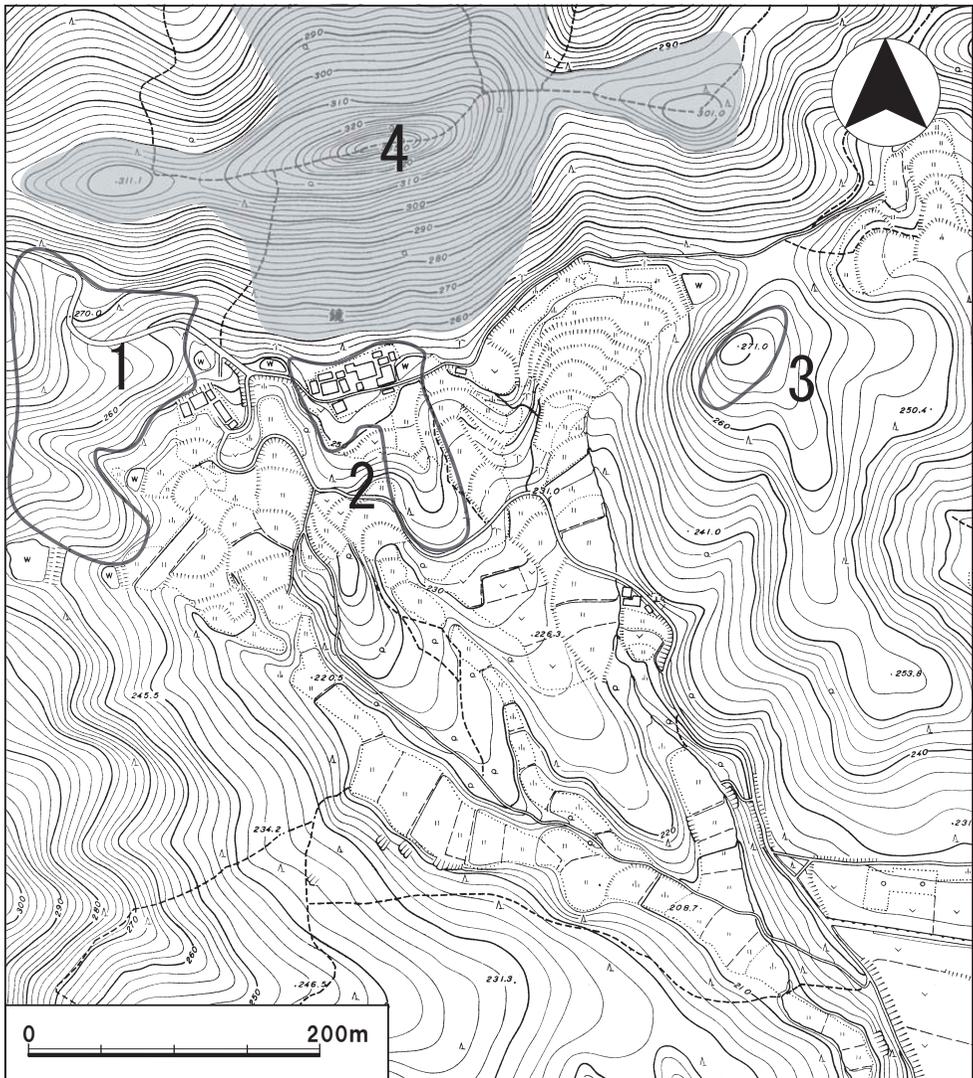
安芸地方における中世須恵器は、中世前期では陶磁器などとともに出土し、前述のごとく、現状では東播系須恵器、亀山焼が出土の主体を占めている（ただし、中世初頭の遺跡がほとんど不明であることから、13～14世紀の様相である）。亀山焼は外面の格子タタキ目を特徴とし、東播系の甕は外面に平行タタキ目が、鉢は回転ナデ調整の痕跡が残ることが特徴である。これらの生産地では壺や碗なども焼かれているが、消費地遺跡から出土するものは大半が捏鉢や甕といった日常雑器で、備前焼が広く流通するようになる14世紀以前においては、遺跡・遺構の時期を比定する重要な遺物の一つである。しかし、安芸地方（広島県西部）における中世須恵器の集成はこれまで行われておらず、わずかに亀山焼についての論考が見られるが、安芸地域を網羅したものではなく、中世須恵器の集成および研究はほとんど進んでいないのが現状

である。これまで、筆者らは安芸地方の陶磁器と瓦器について関連資料の集成と考察を行ってきたところであり、今回は東播系須恵器、亀山焼を中心とする中世須恵器についても、関連資料の集成を行いたい。中世須恵器は編年的指標や流通等の分析資料として重要であることから、資料集成と各遺跡の状況の整理が安芸地方の中世前期の諸相を考察する上で重要な基礎作業となろう。

本稿では、最初に広島大学東広島キャンパス内出土の中世須恵器について紹介する。出土資料の大半を占める鏡西谷遺跡についてはすでに報告済みである（藤野編 2002）が、整理期間等の関係から中世須恵器についてはほとんど掲載することができなかった。本遺跡では 200 点以上の中世須恵器が出土しており、鏡東谷遺跡でも一定量の中世須恵器が出土している。まずは東広島キャンパス内出土の中世須恵器について検討し、型式学的特徴や地区ごとの様相を明らかにしたい。次いで、西条盆地を中心とする安芸地方の中世須恵器の様相を検討するなかで、鏡西谷遺跡をはじめとする東広島キャンパス出土の中世須恵器の位置づけを行ってみたい。

2. 広島大学東広島キャンパスの中世須恵器と出土状況

広島大学東広島キャンパスでは、鏡西谷遺跡（藤野・増田 2003 a）と鏡東谷遺跡（藤野・増田 2003 b）、鏡千人塚遺跡（伊藤・植田・佐々木 1982）の 3 遺跡で中世須恵器が出土している。鏡地区は生物生産学部附属農場施設予定地（現在の生物圏科学研究科附属瀬戸内圏フィールド科学教育研究センター陸域生物圏部門（農場））として位置づけられ、広島大学の統合移転に伴って、広島県教育委員会が 1979 年に鏡千人塚遺跡、清水奥山遺跡の発掘調査を行った（植田編著 1982）。また、1980 年に第 1 地点～第 8 地点に分けて鏡地区の予備調査が行われた。このうち、第 7 地点の北部一帯が鏡西谷遺跡、第 4 地点が鏡東谷遺跡に該当し、中世須恵器が出土している。予備調査では鏡西谷遺跡・鏡東谷遺跡の範囲外にあたる第 1・5・6 地点でも中世須恵器が出土しており、これらの資料も含めて検討を行っていく。資料は鏡西谷遺跡 C 地区 1 号掘立柱建物 S B 01 出土品が最も多く、同遺跡 B 地区・E 地区でも一定量が出土した。以下、鏡地区における中世須恵器の出土状況と個別資料について説明する。なお、出土資料は大半が鉢および甕の体部片であり、口縁部、底部を除く小破片について実測図は掲載していない。磁器や瓦器と比べると、破片数に対しての個体数は少ないと思われる。観察表（第 4 表～第 16 表）には確認した全資料を収録した。

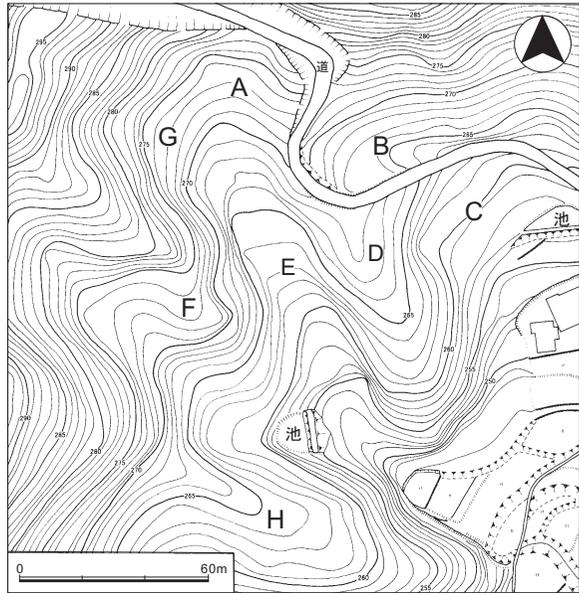


第1図 広島大学東広島キャンパス鏡地区の中世遺跡と鏡山城跡
 (1. 鏡西谷遺跡、2. 鏡東谷遺跡、3. 鏡千人塚遺跡、4. 鏡山城跡)

I. 鏡西谷遺跡

鏡西谷遺跡は広島大学東広島キャンパス東部に位置する農場地区に所在する。農場地区は、国史跡鏡山城跡南麓に広がる盆地状の地形で、鏡山城が築造された鏡山と鏡山から南側へ連なる東西の山塊（ががら山ほか）・丘陵によって周囲を囲まれている。鏡西谷遺跡は盆地状地形の北西端に位置し、低丘陵部や低丘陵部に囲まれた低地部、谷部などに立地している。地形などを単位にA～H地区の8つの調査区に区分して

発掘調査が実施され、縄文時代～江戸時代の遺構・遺物が多数検出された。B地区、C地区、D地区、F地区南部では、鎌倉時代～室町時代の遺構が検出され、明確な遺構を指摘できないが、E地区でも遺物の出土状況から同時代の人々の活動を窺い知ることができる状況である。鏡西谷遺跡では224点の中世須恵器が出土しており、C地区を中心に各地区に分布していた。



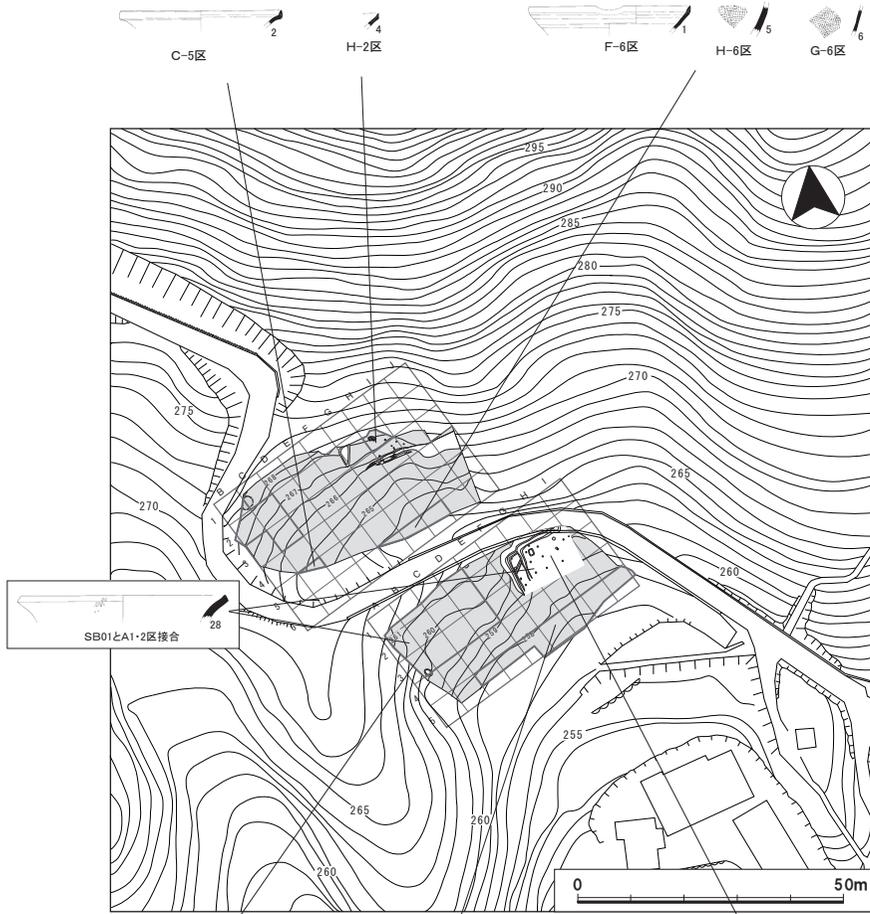
第2図 鏡西谷遺跡調査区配置図

1) B地区

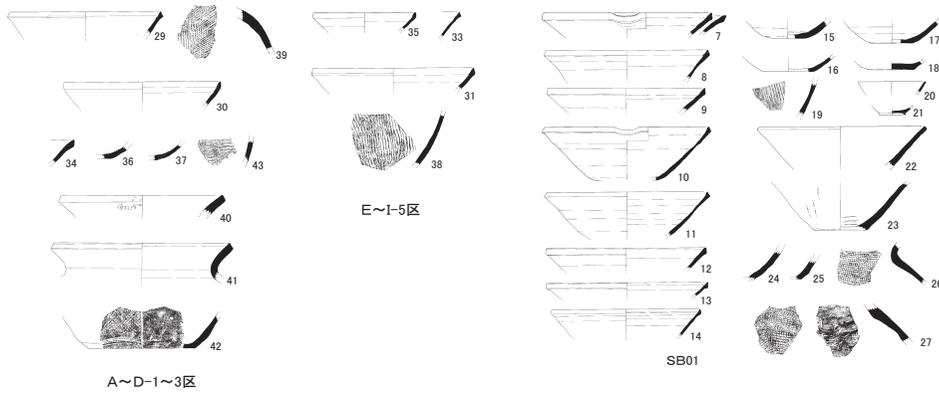
B地区は鏡西谷遺跡の東北部に位置しており、鏡山南麓裾の緩斜面に立地している。北側は鏡山南麓の急斜面が迫っており、東西を低丘陵に囲まれて、南側に開けた地形で、C地区と同一地形上にある。調査区北端部に検出遺構は集中しており、調査区北東部で、1号溝（S D 01）、1号土壌墓（S K 01）、1号土坑（S K 02）、柱穴状ピット群（S X 01）と平坦面、調査区北西端部で平坦面と土師質土器集中部（S X 02）が検出されている。溝をはじめとする調査区北東部の遺構群は14世紀後半～15世紀初頭（南北朝時代）を中心とする時期に、調査区北西端部の遺構群は13世紀前葉（鎌倉時代前期）を中心とする時期に位置づけられる（永田・藤野 2009）。

B地区出土の中世須恵器には、東播系と亀山焼が認められる。計20点確認しており、おもに調査区西北部と東南部端に分布している（第3図）。20点中14点はB地区西半部で出土しており、確実に遺構に伴う資料はないものの、S X 02付近から亀山焼の甕片5点と東播系捏鉢片1点の合計6点が出土している。S X 02および周辺では同安窯系青磁や13世紀代に位置づけられる土師質土器坏・皿などが出土しており、中世須恵器もこれら一群の遺物と組成するものと思われる。調査区南西端部では第4図2を含めた4点の東播系捏鉢が出土している。このほかに、詳細な位置は不明ながら西半部から出土しているものとして、亀山焼捏鉢2点（第4図3ほか）、産地不明須恵器1点がある。

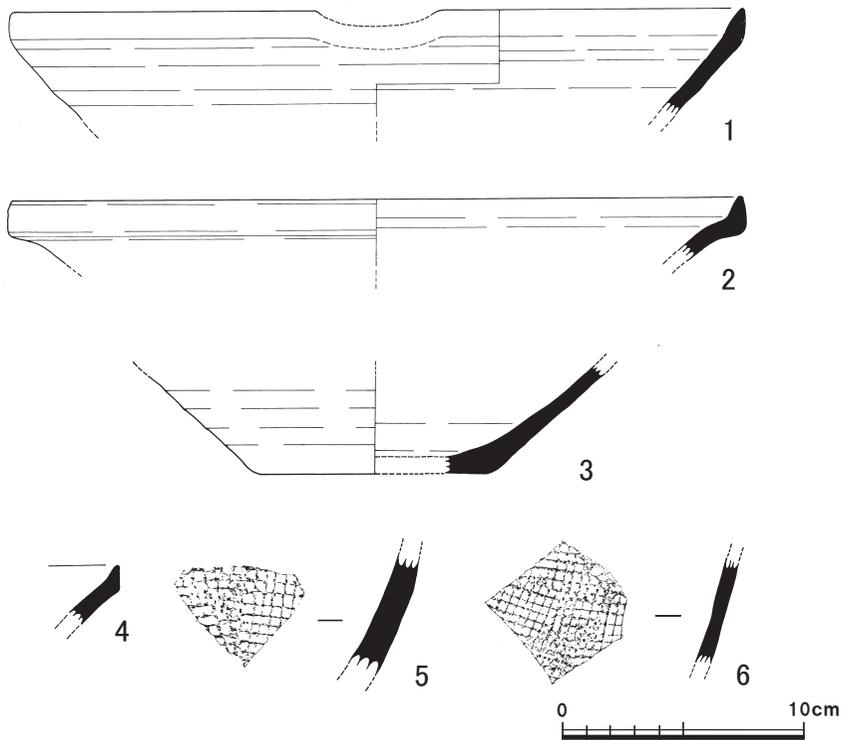
B 地区



C 地区



第3図 鏡西谷遺跡B地区・C地区中世須恵器出土状況



第4図 鏡西谷遺跡B地区出土中世須恵器実測図

東半部では、東播系捏鉢が北東部のH2区1点(第4図4ほか)、南東部のF6区1点(第4図1)、亀山焼甕がH6区2点(第4図5・6)が出土している。また、B地区中央部で広島県教育委員会による1979年度の予備調査(以下、鏡地区試掘とする)で亀山焼甕が1点出土している。

出土中世須恵器の内訳は、東播系捏鉢9点、亀山焼甕8点、亀山焼捏鉢2点、産地不明須恵器壺1点で、20点のうち6点を図化した(第4図)。

東播系須恵器(第4図1~4) 捏鉢のみである。1は片口の鉢の口縁部で、口縁部を上方に拡張し、体部は直線的である。復元口径は30cmである。2は口縁端部を上方へ拡張し、屈曲して体部へとつづく。復元口径は30cmである。3は底部である。底部から体部へは直線的につづき、内面は使用によって摩滅している。4は口縁端部内面に粘土を継ぎ足し上方にわずかに拡張している。口縁端面は平坦に仕上げている。

亀山焼(第4図5・6) 甕(5・6)と捏鉢が認められる。図示した2点は、ともに外面には格子タタキ目がみられ、内面の当て具痕はナデ消されている。5に比べ6は薄手である。捏鉢はいずれも体部の小片である。このほかに産地不明の須恵器が出土

している。壺の体部と思われるもので、硬質で東播系須恵器、亀山焼などとは胎土などが異なっている。

2) C 地区

C 地区は鏡西谷遺跡の東部に位置しており、B 地区の南側隣接地である。南側へ向かって緩やかに傾斜する地形で、調査区南半はほぼ平坦である。調査区の南側は比較的傾斜の急な谷地形へ移行しているが、平坦面が数面形成されていた。調査区の西側はD 地区が立地する低丘陵で、南側へ向かって平坦面が延び、東側も同様な低丘陵が南側に延びていた。調査区北西部はD 地区の丘陵から派生するようにやや高まった地形で、その東端部を掘り込んで1号掘立柱建物（S B 01）が構築されていた。S B 01 は東西3間、南北2間の総柱建物で、北側及び東側を溝（S D 01・02）がめぐっている。S B 01 の北部には1号土坑（S K 01）が構築されていた。S B 01 からは青磁、東播系須恵器、土師質土器、石鍋、鉄製鎌などの遺物が良好な形で出土しており、13世紀前葉（鎌倉時代前期）を中心とする時期に位置づけられる（永田・藤野 2009）。また、調査区東半部では中世に位置づけられる遺構は検出されていないが、青磁、備前焼、土師質土器など、13世紀～15世紀代の遺物が一定量分布していた（永田・藤野 2009）。

C 地区出土の中世須恵器は145点を確認しており、そのうち80点がS B 01 からの出土である。S B 01 以外では、調査区西北部で45点、S B 01 南側にあたる東南部で13点が出土しており、西南部とC 地区中央付近にもわずかに出土が認められる。調査区北西部とS B 01 を含め、C 地区ではほとんどの須恵器が北半部から出土していることになる。S B 01 では東播系捏鉢・甕、亀山焼捏鉢・甕などC 地区で出土した中世須恵器のすべての種類・器種が含まれている。SB01 南側にあたる東南部では、東播系甕（8点）を主体に、東播系捏鉢（2点）、亀山焼甕（1点）、東播系捏鉢の可能性のある須恵器（1点）、産地不明壺（1点）が分布している。大半はG 5区に分布し、基本的にS B 01 から流出したものと想定されるが、付近ではS B 01 とは異なる時期の陶磁器が出土していることから異なる時期の資料が含まれている可能性はある。西北部出土須恵器は亀山焼甕（33点）を主体としており、ほぼ全域に分布している。東播系捏鉢（8点）はB区、C区北半部を中心に分布している。そのほかは少量で、東播系甕（1点）、亀山焼捏鉢（1点）、産地不明須恵器（1点）、産地不明須恵器（1点）があり、各所で散発的に出土している。西南部では東播系捏鉢1点（第9図35）が出土しているのみであり、中央部付近では、正確な位置は不明であるが、東播系捏鉢

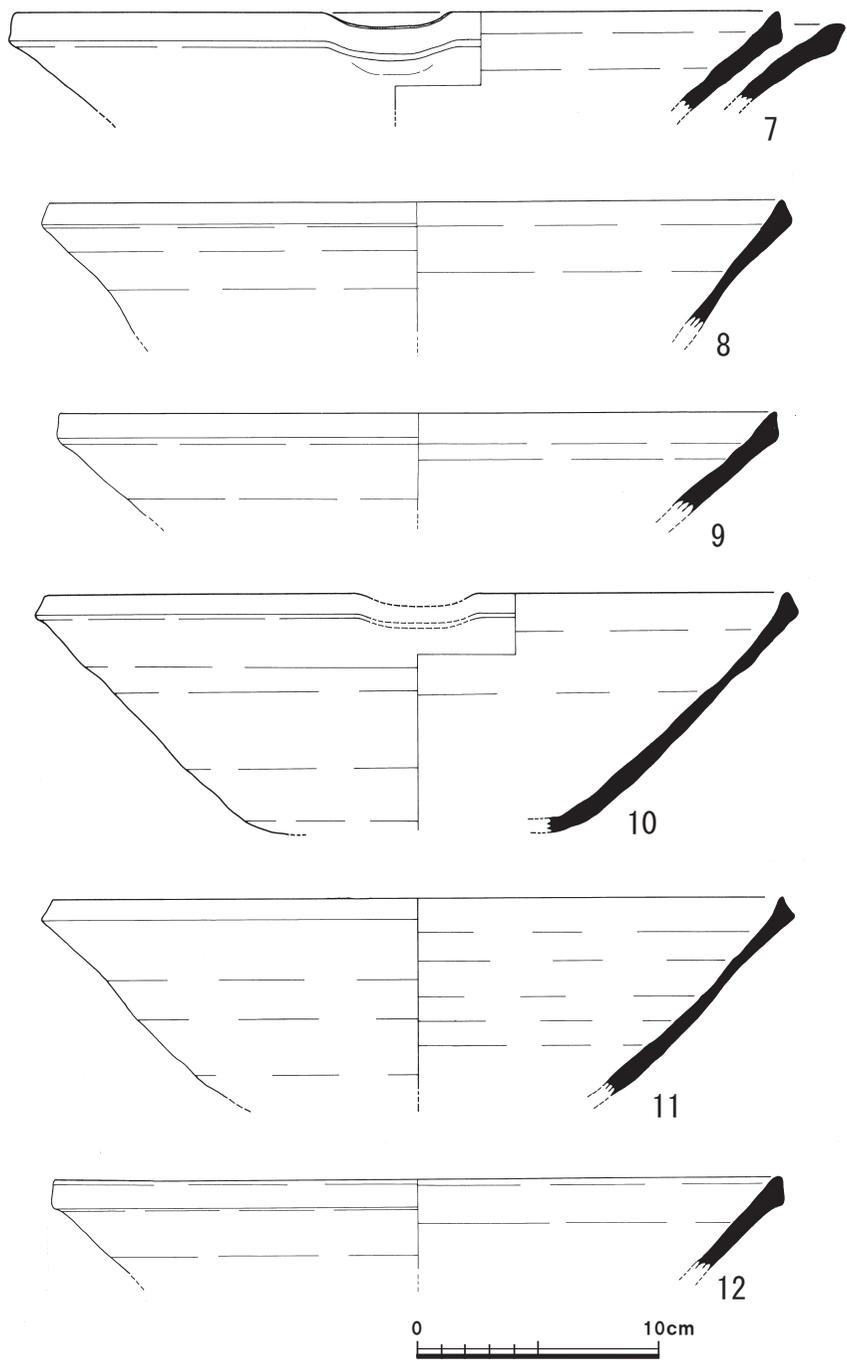
1点、亀山焼甕1点が出土している。

C地区出土中世須恵器145点の内訳は、東播系捏鉢48点、同甕19点、亀山焼捏鉢8点、同甕55点、瓦質で産地不明須恵器甕8点、そのほかの産地不明須恵器碗・杯・壺7点である。出土資料145点中、36点を図化した。東播系捏鉢には口縁部にいくつかのバリエーションが見られた。東播系須恵器甕はほとんどが軟質のものであるが、焼成が良く、外面の平行タタキ目が交差しているものも見られた。また、亀山焼の甕には灰褐色で薄手のものと、暗灰色で厚めの2種類が存在している。

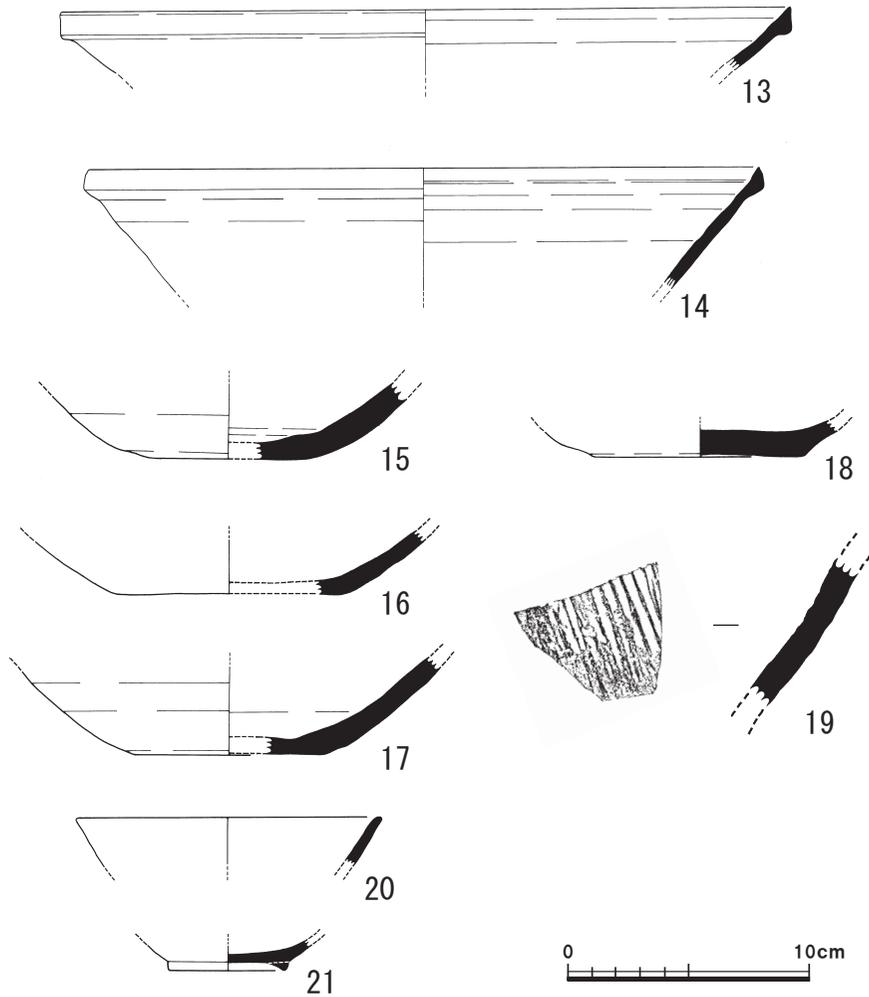
C地区出土の中世須恵器は、前述のとおり、SB01出土資料（第6図～第8図）が大半を占める。その内訳は、東播系捏鉢33点、東播系甕9点、亀山焼捏鉢7点、亀山焼甕20点および瓦質で風化の著しいもの7点、産地不明須恵器碗3点、同坏1点を識別した。瓦質で風化の著しい須恵器は、断定はできないが、東播系の甕の可能性はある。

東播系須恵器（第5図、第6図13～19）捏鉢（7～18）と甕（19）がある。捏鉢は口径30cm前後のものが主体のようであるが、口径20cm程度の一回り小型の資料も含まれている。粘土紐の継ぎ足しによって口縁端部を少し上方に拡張する形態を基本としている。体部は直線的に開いているが、わずかに内湾しているものが多い。また、体部上半でわずかに外方に屈曲するもの（8・11）がある。

7は片口鉢で、口縁端部を上方に少し拡張し、下端も強いヨコナデ調整で下方にわずかに拡張している。片口部では口縁端部内面をやや肥厚させている。復元口径は31.2cmである。8・9も口縁端部を上方に肥厚気味に拡張しており、8は口縁部が内湾しながら体部へと続いている。どちらも口縁端部下端は拡張せず、丸くおさめている。8は復元口径30.0cm、9は29.4cmである。10は片口鉢で、口縁部から底部までの形状を推定できるものである。口縁端部を上方に少し拡張するとともに、下方にもヨコナデ調整によってわずかに拡張している。体部は直線的に開いており、わずかに内湾気味である。11も口縁部～体部の形状が推定できる個体である。口縁端部を上方に少し拡張している。口唇部直下の内面は強いヨコナデ調整で窪んでいる。体部上部で器壁が薄くなり、わずかに屈曲している。12は口縁端部をわずかに上方に拡張しているが、口縁部内面は直線的で、あまり顕著ではない。しかし、下方への拡張は比較的明瞭で、境界は段状を呈している。10～12の復元口径はいずれも30cmである。13は口縁部の破片で、12と同様の形態を呈しているが、下方への拡張が一層明瞭である。口縁端部外面の断面は三角形を呈し、境界部が「く」の字状に屈曲しな



第5図 鏡西谷遺跡C地区S B 01 出土中世須恵器実測図(1)



第6図 鏡西谷遺跡C地区S B 01 出土中世須恵器実測図(2)

がら口縁部下半へと移行している。復元口径は 30.0cm である。14 は口縁部～体部上半であり、体部は薄手で、直線的に開いている。口縁端部を上方に少し拡張しており、口唇部内面直下は強いヨコナデ調整で窪んでいる。口縁端部は直立気味である。口縁端部下端は丸くおさめているが、境界直下に強いヨコナデ調整を行っているため屈曲しながら口縁部下半へ移行している。復元口径は 27.6cm である。15～18 は底部で、15 以外は底面に回転糸切り痕が残る。いずれも平底であるが、18 はわずかに底面が窪んでいる。15 は底面及び底面に接する底部外面も丁寧にナデ調整されている。復元底径は 6.0cm である。16・17 は底面及び底面に接する底部外面を粗くナデ調整を

している。復元底径は16が9.6cm、17が7.8cmである。18は瓦質で、底面はナデ調整されているが、糸切り痕が残っている。復元底径は8.8cmである。

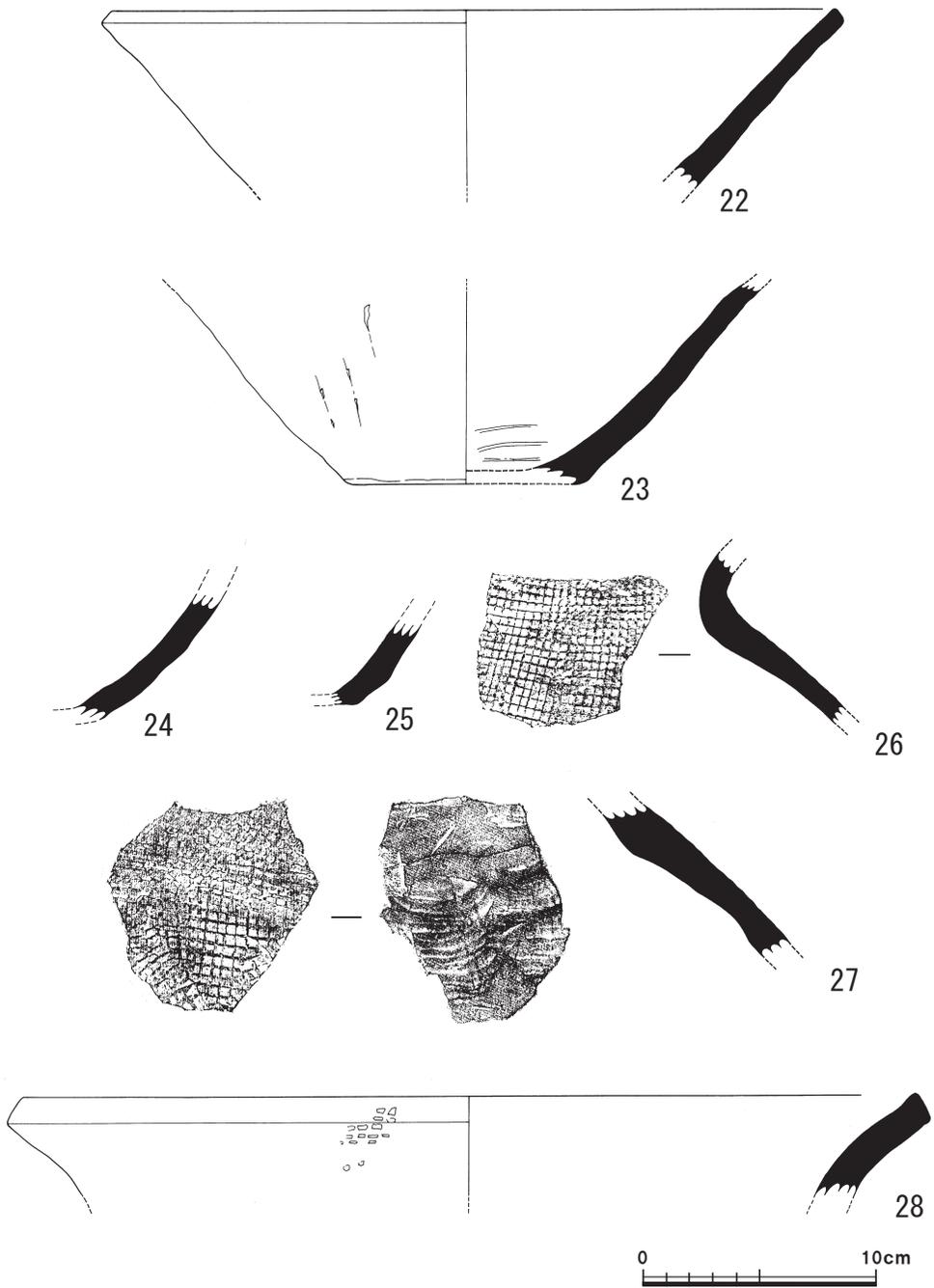
甕は口縁部と思われる資料が1点あるほかは、いずれも体部破片(19)である。一定の形状を窺えるものはない。19は非常に軟質である。外面には平行タタキ目がみられる。

亀山焼(第7図22～28) 捏鉢(22～25)と甕(26～28)が認められるが、大半は甕体部の破片で、捏鉢、甕とも1～2個体である。捏鉢は体部から口縁部にかけて直線的に開き、側面観は逆台形状を呈する。断面口径は30cm程度、底径10cm程度で、底径の比率が小さい。口縁部はやや先細り気味で、端部を平らにおさめている。22は口縁部～体部で、直線的に開く上半部の形状を良く窺うことができる。23は底部で、内面は使用のため摩滅している。22・23はともに瓦質で、外面には縦横にヘラ削りのような調整がみられる。24・25は底部で、24は底面が剥落している。25は23と同一個体の可能性があるもので、底部との境はヘラ削り調整によって面取り状となっている。

甕は口頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁部はやや外反気味に大きく開いている。口縁端部は平坦におさめ、端部の拡張は認められない。26は頸部～肩部の破片である。外面に格子タタキ目を施し、内面の当て具痕は丁寧にナデ消されている。27は外面に格子タタキ目、内面に青海波文が施されている。内面はナデ調整が施されているが、青海波文がかなり明瞭に残っている。28はわずかに外反気味に開く口縁部で、頸部～口縁部は比較的短い。口縁端部は肥厚しない。口唇部直下の内面は少し強くヨコナデ調整されており、わずかに窪んでいる。外面はナデ調整されているが、わずかに格子タタキ目が残されている。復元口径は37.8cmである。

産地不明須恵器(第6図20・21) 産地不明の須恵器壺(20・21)・杯が少量出土している。20は口縁部で、先端は先細り気味に丸くおさめている。体部は直線的に開くが、わずかに内反気味である。内外面に回転ナデ調整が施されている。復元口径は12.2cmである。21は底部で、底面には回転糸切り痕がみられる。貼付高台で、断面三角形状を呈する。復元底径は4.8cmである。

次に、S B 01以外のC地区出土中世須恵器について見てみたい。先の分布状況の中で説明したように、S B 01以外では、調査区西北部に約2/3が集中しており、調査区東南部に一定量があるほかは、1～2点である。調査区東南部出土資料はS B 01と基本的に共通する様相であることから、ここではまとめて説明をする。

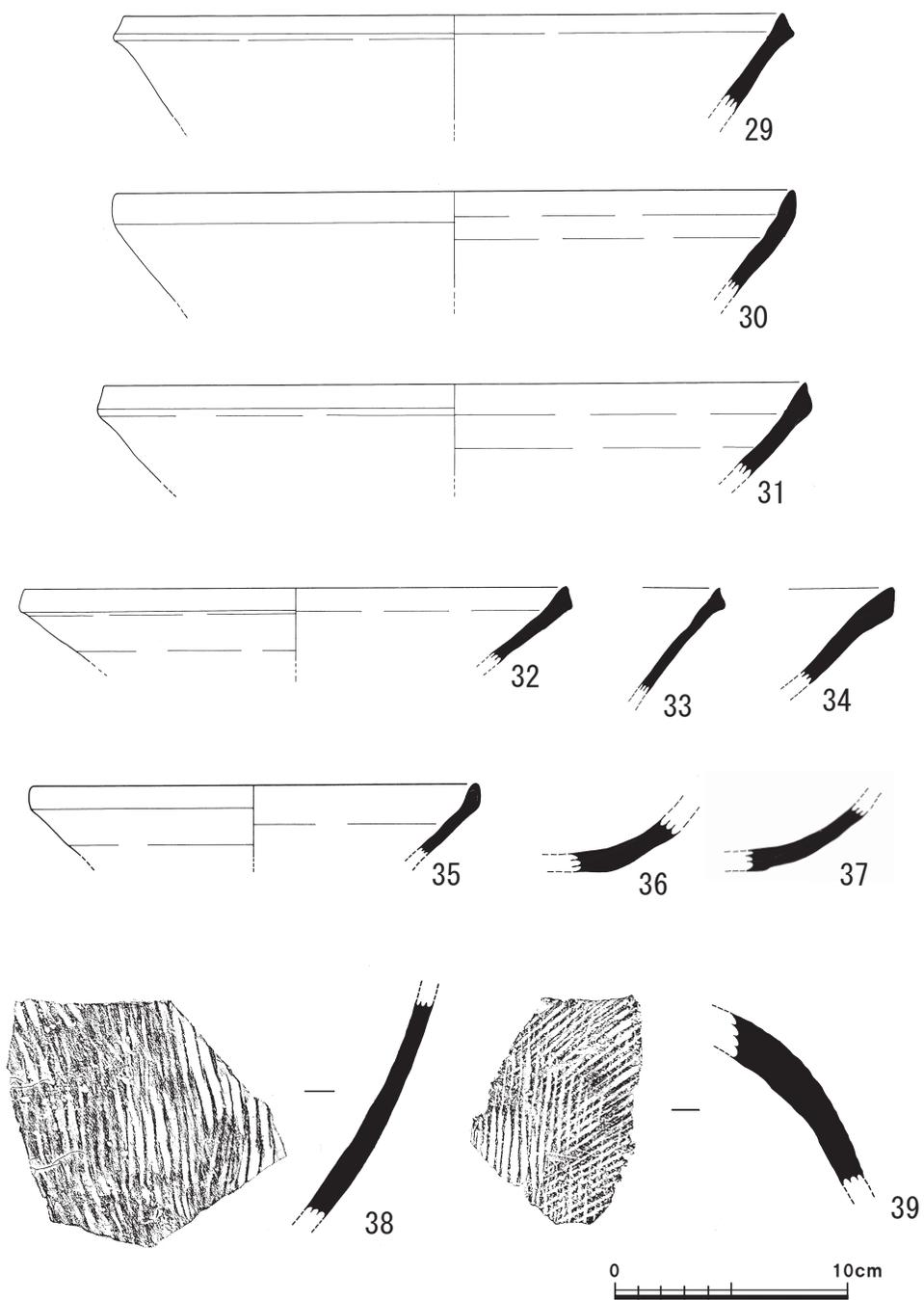


第7図 鏡西谷遺跡C地区S B 01 出土中世須恵器実測図(3)

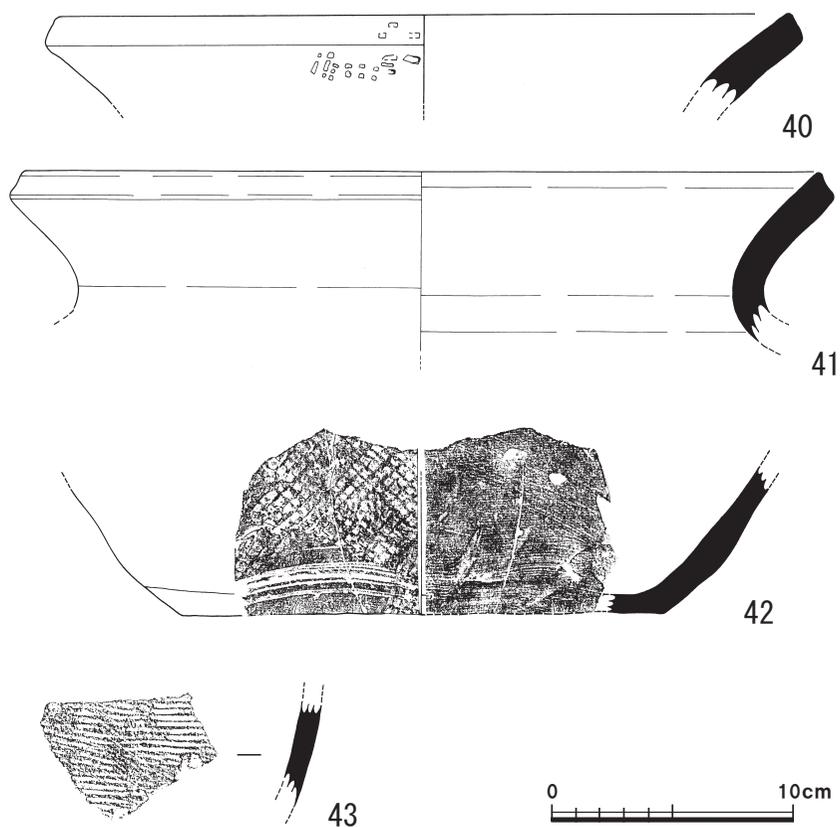
東播系須恵器（第8図） 捏鉢（29～37）と甕（38・39）がある。破片数は捏鉢4：甕1で、個体数比ではさらに捏鉢の割合が高いものと思われる。捏鉢は基本的にはS B 01と同様の様相であるが、口縁端部が先細り気味のもの（30）や口縁端部が屈曲して直立するもの（35）などがある。29～35は口縁部～体部上部の破片である。29は口縁部を上方に拡張させ、口縁端は強いヨコナデ調整で緩やかに窪んでいる。復元口径は28.0cmである。30は口唇部が丸みをもち、口縁端部と口縁部下半に明瞭な境界を形成せず、丸みを帯びて体部へなだらかに移行している。内面はヨコナデ調整による凹凸が見られるが、全体としては内反気味である。復元口径は29.0cmである。31は口縁端部を上方に拡張しており、上端はつまむようにナデてやや尖り気味に仕上げている。復元口径は30.0cmである。32はやや小型の鉢である。口縁端部を上方に少し拡張しており、下方にもわずかに拡張している。復元口径は23.2cmである。33も小型品と思われ、薄手である。口縁端部を外方に屈曲させ、口縁部上方に拡張している。34は口縁端部に向かって厚みを増しており、口縁端部は外方にわずかに屈曲している。上方に肥厚した口縁部で、先端は尖り気味である。35は小型品で、やや薄手であり、体部～口縁端部までほぼ同じ厚さである。36・37は底部で、底面との境界は不明瞭である。36は底面に接する底部外面を丁寧にナデ調整し、内面は使用のため摩滅している。37は内湾しながら体部へとつづき、底部外面の調整は粗い。

甕はいずれも体部破片であり、一定の形状を窺うことができない個体はない。38は体部下半、39は肩部から体部上部と思われる。両者ともに内面はナデ調整されており、外面には平行タタキ目が施されているが、39は平行タタキ目が交差して格子状となっている。

亀山焼（第9図40～42） いずれも甕の破片（40～42）である。体部の破片が多いが、口縁部や底部の破片もあり、ほぼ全体の形状を窺うことができる。口頸部の特徴はS B 01出土資料と一致しており、「く」の字状に大きく外反し、口縁端部は肥厚せず、平らにおさめている。底部は平底で、体部外面には格子タタキ目が広く残されている。40は口縁部で、口縁端部を平らにおさめ、口縁端部は肥厚しない。口縁部外面に格子タタキ目が一部残存している。復元口径は30.0cmである。41は口頸部で、「く」の字状に屈曲するが、屈曲部は丸味を帯びている。口頸部はほぼ同じ厚さで、口縁端部は強いヨコナデ調整でわずかに窪んでいる。復元口径は32.6cmである。42は底部で、平底である。底面に接する底部外面にはヘラ削り調整が認められ、内面の当て具痕はナデ消されている。復元底径は19.8cmと大きく、安定感がある。



第8図 鏡西谷遺跡C地区出土中世須恵器実測図(1)



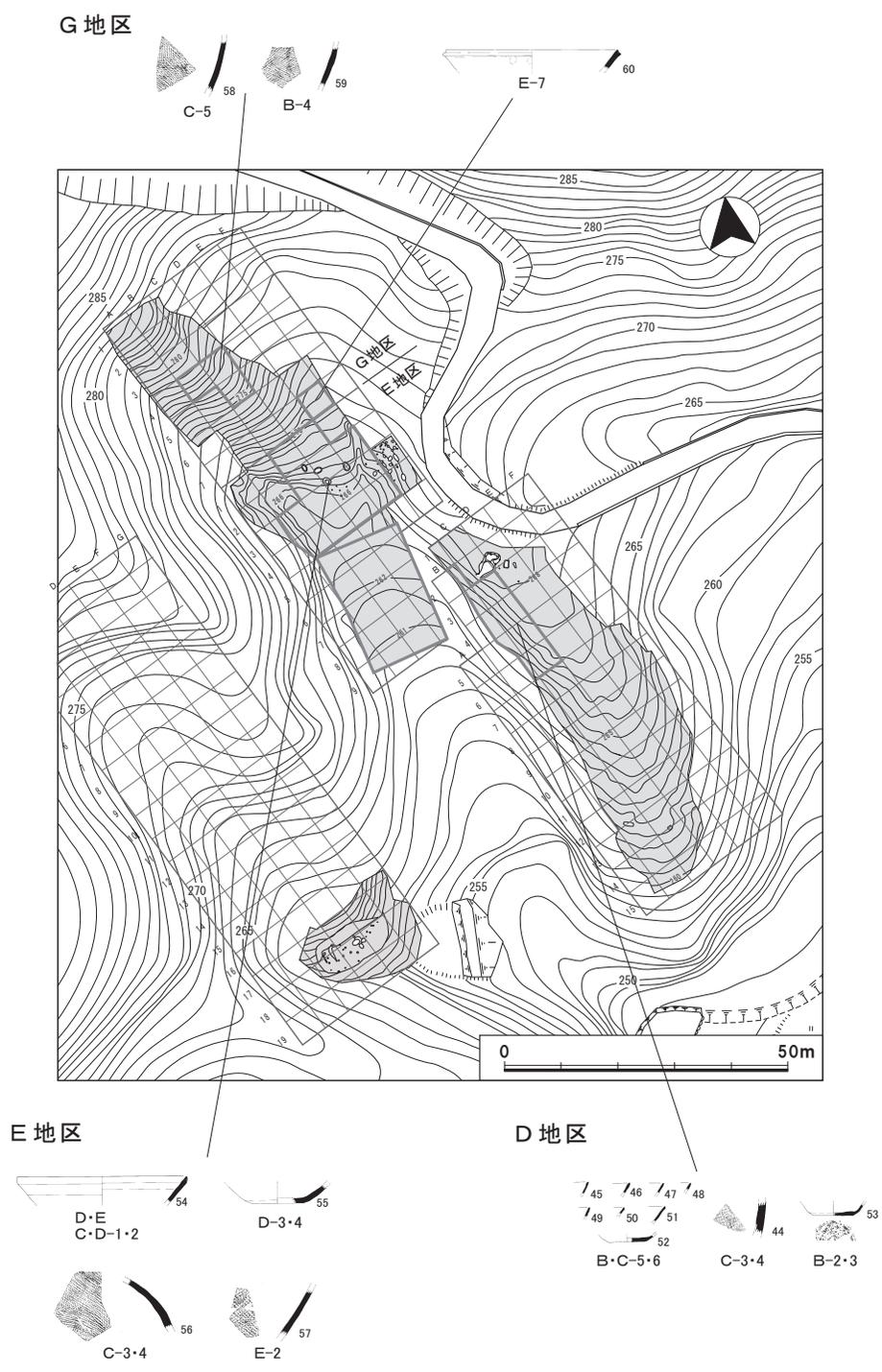
第9図 鏡西谷遺跡C地区出土中世須恵器実測図(2)

産地不明須恵器(第9図43) 調査区北西部出土で、甕もしくは壺の体部と思われる。外面には平行タタキ目が施されている。平行線内に櫛描状の線が入っており、木目と思われる。胎土などから中世に属する可能性があるが、焼成が良好で、東播系とはやや異なっているように思われる。

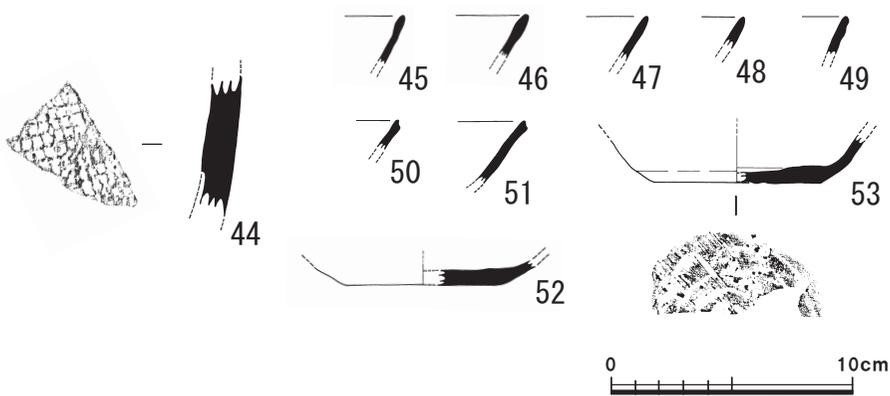
3) D地区

D地区は鏡西谷遺跡のほぼ中央に位置し、C地区の西側隣接地である。南に延びる低丘陵で、丘陵頂上部には幅15m前後の細長い平坦面が広がっている。D地区ではC地区に先行すると思われる鎌倉時代前期の遺構が調査区北端部と調査区南端部に集中して構築されており、北端部には1号土壙墓(S K 05)、4号土坑(S K 06)、竪穴遺構(S B 04)が、南端部には2号・3号土壙墓(S K 07・08)が近接して位置している。

須恵器は15点出土しているが、大半が小片である。いずれも調査区北西部のS B



第 10 図 鏡西谷遺跡 D 地区・E 地区・G 地区中世須恵器出土状況



第 11 図 鏡西谷遺跡D地区出土中世須恵器実測図

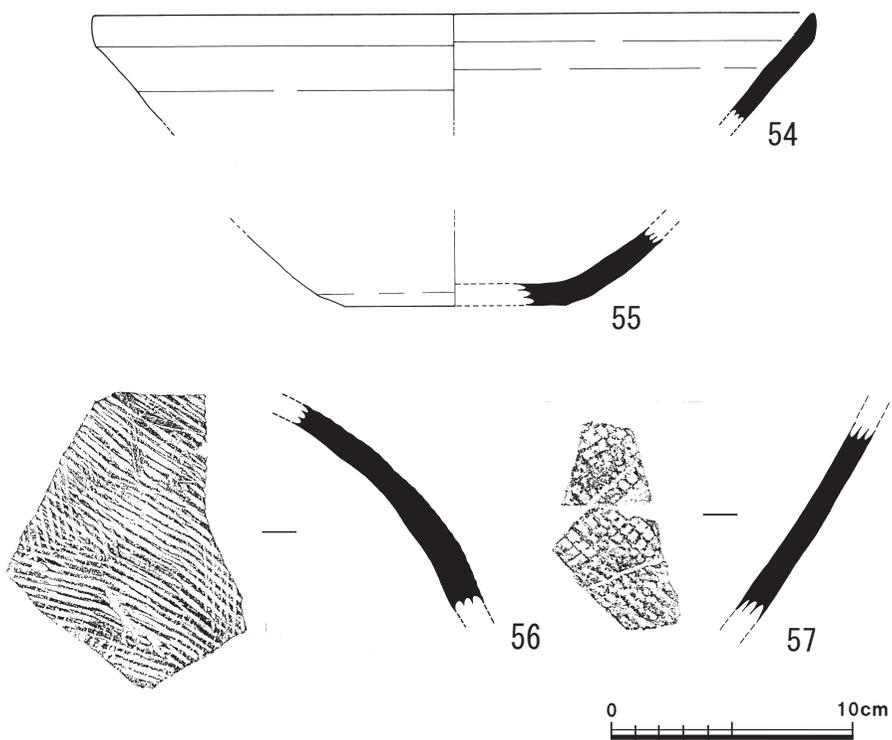
04 南西側およびS B 04 で出土した（第 10 図）。坏または埴が主体で、亀山焼が 1 点のみ認められる。

亀山焼（第 11 図 44） 甕の破片である。外面は長さ 4～6mm 程度の格子タタキ目が施されている。

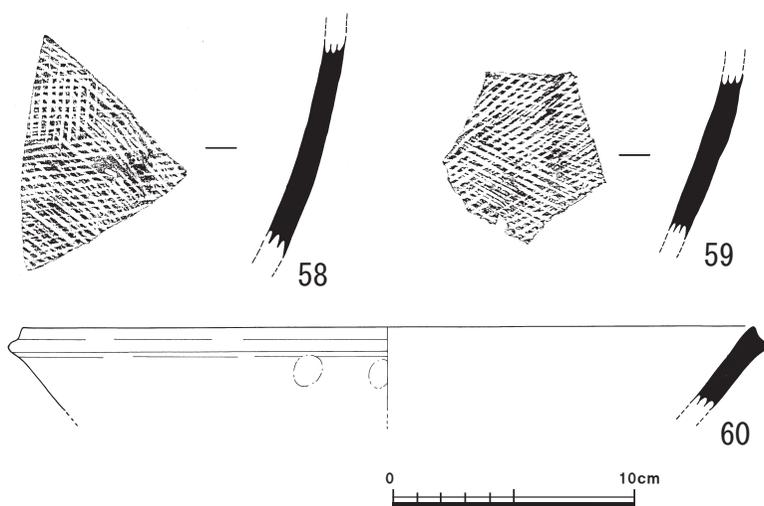
産地不明須恵器（第 11 図 45～53） 45～51 は口縁部の小片であるため、器種を確定できないが、坏もしくは埴と思われる。いずれも薄手である。45～49 は口縁端部を丸くおさめており、45・46 は膨らみ気味で、48 は先細り気味である。49 は外面にナデ調整が 2 段にわたって施されている。50・51 は口縁端部を平らにおさめており、ヨコナデ調整で凹線気味にわずかに窪んでいる。52・53 は坏の底部で、いずれもヘラ切り底である。52 は底面および底面に接する底部外面を丁寧にナデ調整している。復元底径は 6.4cm である。53 は S B 04 出土である。底部～体部下部の破片で、底部には粘土紐を巻いた痕やヘラ切りの痕が残る。底面と比較して底面に接する底部外面は丁寧に調整されている。復元底径は 6.7cm である。このほかにも、埴もしくは坏の破片が 5 点出土している。これらの埴、坏の詳細な時期は現状では不明であるが、底部がヘラ切りであること、薄手で口径 15cm 以下の比較的小型品である可能性が高いことなどから、当面の間、古代末～中世初頭に位置づけておきたい。遺構に伴っているものはないが、鎌倉時代以前に何らかの活動が行われていたことが窺える。

4) G・E 地区

G・E 地区は鏡西谷遺跡北西部に位置する。東側の A・D 地区と西側の F 地区に挟まれた丘陵斜面および谷部であり、連続した地形面である。調査の都合で便宜的に北半の南東向きの急斜面・裾などを G 地区、南半の谷部を E 地区とした。G・E 地区境



第 12 図 鏡西谷遺跡 E 地区出土中世須恵器実測図



第 13 図 鏡西谷遺跡 G 地区出土中世須恵器実測図

界付近の丘陵裾部で時期不明の土坑数基、A 地区丘陵部の西裾にあたる E 地区東北部で柱穴群、土坑などの遺構が検出されており、E 区北半部を中心に中世（前期）の遺物が広く分布することから、これらの遺構が中世に属する可能性がある（ただし、E 地区北東部で検出された柱穴群などについては遺跡保存区に含まれることから、遺構検出を行ったのみで、遺構の調査は実施していない）。

E 地区では 39 点の中世須恵器が出土した。E 地区は東側に D 地区の丘陵、西側に F 地区の丘陵が位置しており、幅約 20 m の南北に細長い谷地形である。須恵器は調査区の北半部、とくに北東部を中心に分布しており、南半部にもわずかに認められた（第 10 図）。

E 地区出土の須恵器は小片が多く、凶化したものは 4 点である。東播系須恵器、亀山焼が認められ、産地不明のものが若干ある。E 地区出土の須恵器は、東播系捏鉢 6 点、東播系甕 12 点、亀山焼甕 11 点と、表面の剥落が著しいなどの理由から産地が特定できないものが 10 点出土している（亀山焼の可能性のあるものを含んでいる）。東播系の甕は、いずれも焼成が良好で、平行タタキ目が交差しているものがほとんどであり、同一個体の可能性もある。亀山焼の甕は厚手で、表面の磨滅が著しいものが多い。

東播系須恵器（第 12 図 54～56） 捏鉢（54・55）と甕（56）がある。捏鉢は C 地区出土資料に共通した特徴を持つ。54 は体部から口縁端までほぼ厚さが変化せず、口縁端部やや丸みを帯びて平坦に仕上げている。復元口径は 29.4cm である。55 は底部で、丁寧に調整が施され、切り離しの痕跡などは残っていない。復元底径は 9.0cm である。甕はいずれも体部の破片である。56 は外面に平行タタキ目を施しており、一部平行タタキ目が交差している。内面はナデ調整である。

亀山焼（第 13 図 57） 甕のみであり、いずれも体部破片である。57 は外面に幅 5mm ほどの細かな格子タタキ目が施されている。

G 地区では 5 点の須恵器が出土した。G 地区中央部の B・C - 4・5 区で 4 点、E 地区との境界付近である E7 区で 1 点の須恵器が出土している（第 10 図）。E7 区出土資料が亀山焼捏鉢であるほかは、いずれも東播系須恵器甕である。

東播系須恵器（第 13 図 58・59） いずれも甕体部の破片である。58・59 は外面に平行タタキ目が施され、平行タタキ目は交差して格子状を呈している。内面はナデ調整されて、当て具痕はナデ消されている。

亀山焼（第 13 図 60） 捏鉢である。瓦質で、口縁端面はナデ調整によって窪んでいる。復元口径は 30.0cm である。

II. 鏡東谷遺跡

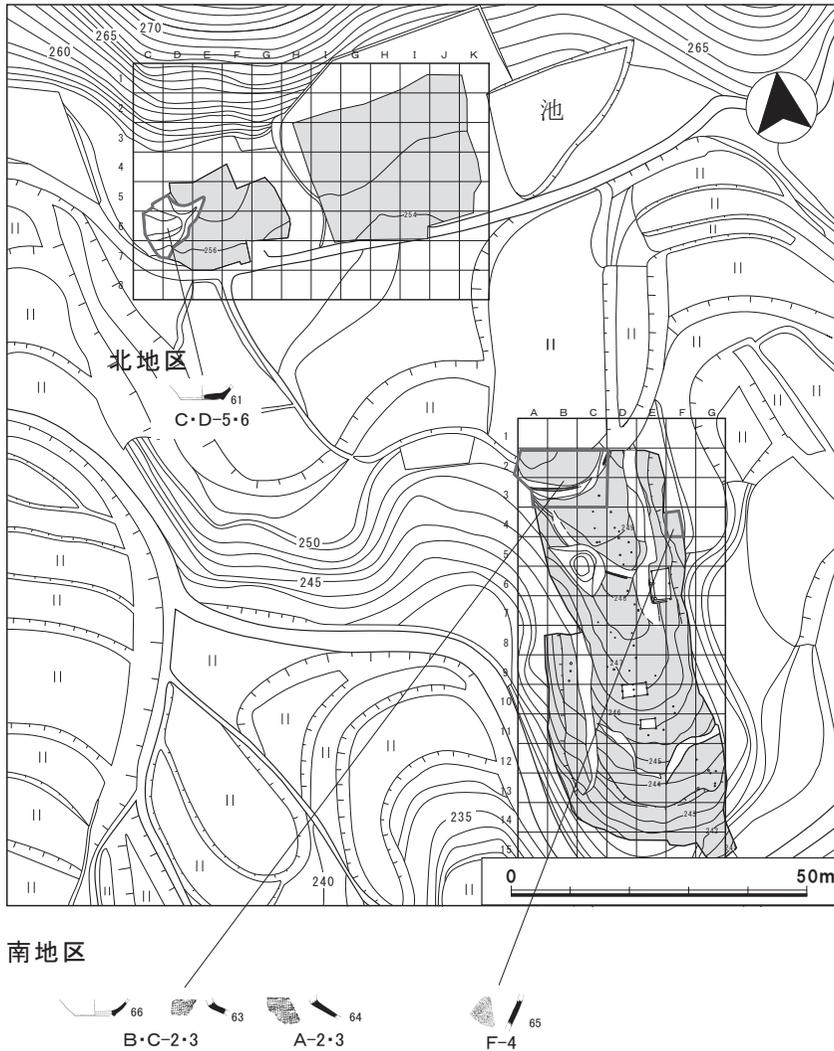
鏡東谷遺跡は鏡西谷遺跡の東に隣接し、鏡西谷遺跡とは幅約 80 m の小規模な谷によって隔てられている。鏡山城跡の中心的遺構のほぼ南に位置しており、鏡西谷遺跡と同様、鏡山南麓の低丘陵地に立地する。鏡東谷遺跡は遺跡の東西を画するように小規模な谷が認められ、2本の低丘陵（以下、西側の丘陵を西丘陵、東側の丘陵を東丘陵として説明する）が南へと延びている。西丘陵は東丘陵に比較して南北に短く、広島県教育委員会の行った試掘調査では明確な遺構は発見されていなかったが、尾根筋は平坦な地形が南側へ連続して広がっており、本来何らかの施設が存在していた可能性が高い。東丘陵は南北に長い平坦面を有し、全体では南に向かって緩やかに傾斜している。調査区は、西丘陵とその東側に隣接する東丘陵北端部を合わせて北地区、東丘陵南半部を南地区としている。当初は広島県教育委員会の試掘調査結果をもとに、北地区のみを発掘調査する予定であったが、調査範囲確定のため補足的な試掘調査（以下、調査室試掘区と略す）を行ったところ、両丘陵全域で遺構・遺物が検出されたことから、南地区でも発掘調査を実施した。北地区では近世の遺構が主体で、明確な中世の遺構は検出されていないが、南地区では中世後期の遺構が多数検出された。以下、地区ごとの様相について述べていきたい。

1) 北地区

調査区には調査以前に民家があり、調査区西部と東部は約 2m の比高差をもって段状に造成されていた。調査区西部では近世以降と推定される土坑 10 基などが検出されたが、明確な中世の遺構は確認されていない。調査区西端部の埋没谷を中心に近世の陶磁器と混在して中世の陶磁器、土師質土器が出土した。中世の陶磁器は大半が備前焼で、少量の青磁を含んでいる。青磁は 14 世紀後半～16 世紀初頭でやや古い時期のものを含んでいるが、備前焼はおおよそ 15 世紀後半～16 世紀初頭に位置づけられる（永田・藤野 2009）。

北地区からは産地不明の須恵器 2 点が出土している。1 点は発掘調査（埋没谷部）で、1 点は調査室試掘区で出土したものである。

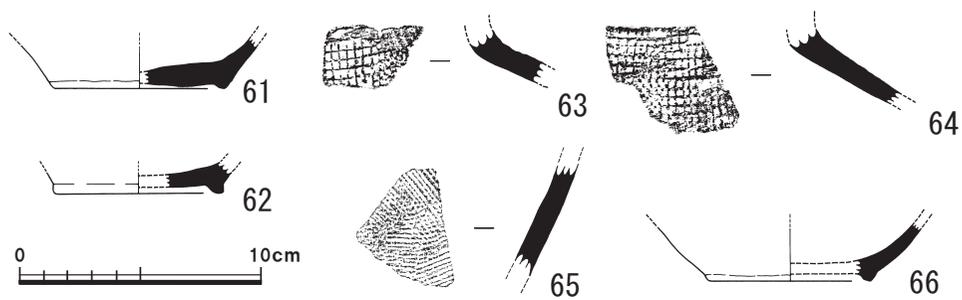
壺（第 15 図 61） 底部である。底面はナデ調整されている。復元底径は 7.0cm である。埋没谷部からの出土であり、陶磁器より先行する時期に位置づけられるものと思われる。62 も壺の底部と思われる。断面方形形状の貼付高台をもち、高台はわずかに外方へと開いている。復元底径は 6.8cm である。



第 14 図 鏡東谷遺跡中世須恵器出土状況

2) 南地区

南地区は南に延びる低丘陵部で、幅 15 ～ 20 m ほどの細長い丘陵平坦面を中心に弥生時代～近世にわたる多数の遺構・遺物が検出された。中世の遺構は調査区全体に広がっており、2 ～ 4 号掘立柱建物跡 3 棟（S B 03 ～ 05）、1 ～ 6 号郭状遺構（S X 01 ～ 06）、池状遺構（S X 07）などが検出されている。陶磁器は備前焼が主体で、わずかに青磁が伴っていた。時期は 15 世紀後半～ 16 世紀初頭を中心とする時期に位置づけられる（永田・藤野 2009）。陶磁器を含む中世遺物はほぼ全域から出土しているが、



第 15 図 鏡東谷遺跡出土中世須恵器実測図

(61・62. 北地区、63～65. 南地区)

調査区北半部が中心である。

出土した須恵器は 6 点で、亀山焼 2 点、産地不明須恵器 4 点（うち 1 点は東播系と思われる）である。3 点（亀山焼甕、産地不明須恵器碗）は調査区北西部の A・B - 2・3 区および C・D - 2・3 区から出土している。そのほかは、調査区北東部の F4 区（東播系須恵器甕もしくは壺か）、調査区南部の E・F - 14・15 区（産地不明須恵器壺？）で各 1 点が出土している。また、D 区北側の調査室試掘区で産地不明須恵器甕もしくは壺の破片が 1 点出土している。出土須恵器 6 点のうち 4 点を図化した。

亀山焼（第 15 図 63・64） 亀山焼の甕である。ともに頸部～肩部付近と思われる。非常に瓦質で焼成も良くない。

産地不明須恵器（第 15 図 65・66） 65 は甕もしくは壺の体部である。外面には幅 1mm ほどの細い平行タタキ目が多方向に施されており、相互に重複している。胎土はやや軟質である。東播系の範疇に含まれる可能性がある。66 は碗である。高台は貼付高台で、断面は三角形に近い。復元底径は 6.4cm である。このほかに、E・F - 14・15 区で産地不明須恵器壺の底部が出土している。

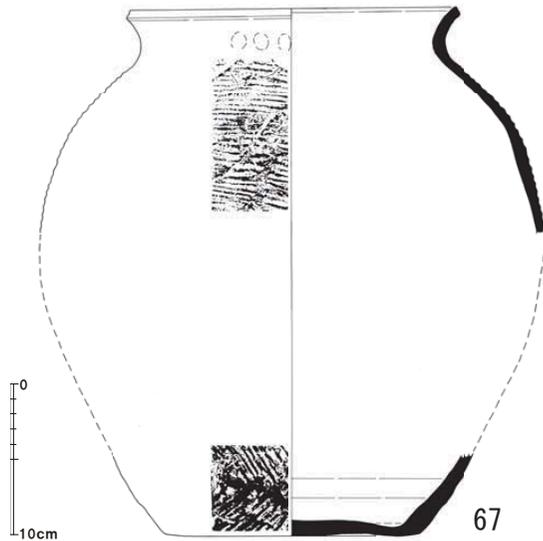
また、鏡地区試掘調査で 6 点の須恵器が出土している。出土地点は北地区と南地区の間の平端部である。東播系捏鉢 4 点、亀山焼甕 1 点のほか、産地不明須恵器 2 点が認められる。

出土の亀山焼は詳細な時期を検討することが困難な小片であるが、おおむね周辺で出土している陶磁器と同時期と思われる、15 世紀～16 世紀に位置づけられるものであろう。東播系捏鉢は鏡西谷遺跡とほぼ同時期の 13 世紀代を中心としている。

Ⅲ. 鏡千人塚遺跡

鏡東谷遺跡の東側約 200 m に位置し、鏡山から南へ延びる丘陵頂部に立地してい

る。鏡山との間には鞍部を形成しており、独立丘陵状を呈している。1980年に広島県教育委員会によって調査が行われ、中世の1号掘立柱建物跡⁽³⁾、1～23号土壙墓（SK 01～23）、1号積石塚（SS 01）、溝（SD 01）が検出された（伊藤・植田・佐々木 1982）。その後、遺跡が南側に広がることが判明し、1981年に広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会が追加調査を行い、弥生時代～中世の遺構・遺物が検出された（藤野・増田 2001）。中世の遺構としては、2～4号積石塚（SS 02～04）、2号溝（SD 02）が検出された。

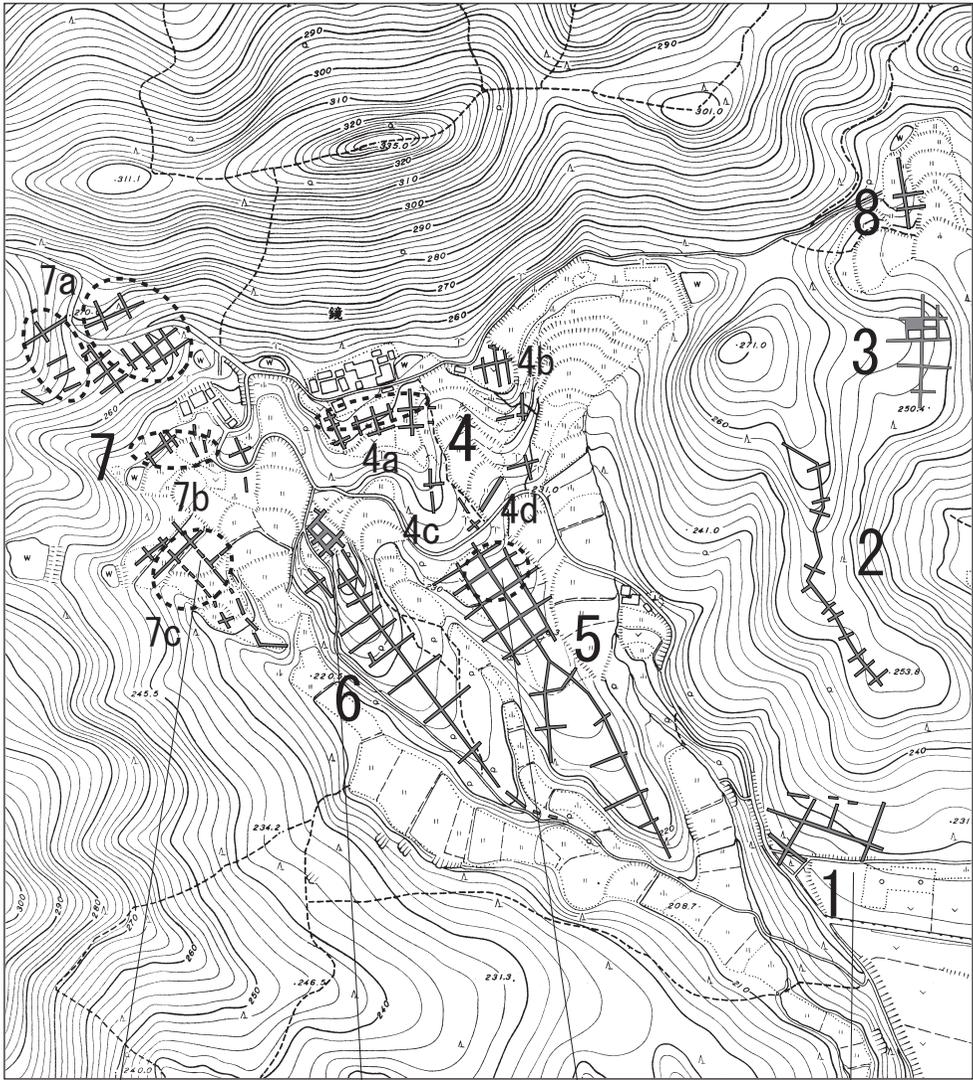


第16図 鏡千人塚遺跡出土中世須恵器実測図
（伊藤・植田・佐々木 1982 を改変）

中世須恵器は、1号積石塚SS 01から出土した甕がある（第16図67）。口頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部を平坦におさめている。端部の拡張は認められず、口頸部の器壁はほぼ同じ厚さである。口縁端部は強いヨコナデ調整によって凹線文状に窪んでいる。頸部は短く、体部外面にはやや粗い平行タタキ目を施している。焼成はあまく、瓦質であり、亀山焼と思われる。蔵骨器として利用された可能性があるが、そうであれば遺構の年代を示すものではなかろう。

IV. 試掘調査に伴う鏡地区出土須恵器

広島大学の統合移転に伴って、広島県教育委員会が調査し作成した図面および記録資料が2010年3月に広島大学に移管された。広島県教育委員会による予備調査（試掘調査）の成果については既に報告されている（植田編著 1982）が、詳細な遺物出土状況は明らかではなかった。広島県教育委員会による予備調査は鏡山南麓一帯にわたって行われていることから、今回の分析を行うにあたって、改めて整理を行ったところ、発掘調査が実施された鏡西谷遺跡・鏡東谷遺跡・鏡千人塚遺跡以外にも広い範囲から中世の遺物が出土し、それらの中には中世須恵器が多く含まれていることが明らかとなった。ここでは、中世須恵器の主要な資料について地点ごとに紹介してみたい⁽⁴⁾。



第7地点
 第17図 鏡地区の試掘調査区（広島県教育委員会）と中世須恵器の出土状況
 （数字は調査地区番号である。破線は中世遺物の出土範囲を示す。）

広島県教育委員会による予備調査は第1～8地点の合計8地区に分けて実施されている(第17図)。第7地点7aが鏡西谷遺跡、第4地点4aが鏡東谷遺跡である。予備調査に伴う両遺跡出土の中世須恵器についてはすでに述べたので、第4地点、第7地点出土須恵器については、両遺跡外から出土した資料について紹介する。

第1地点(第17図1) 鏡千人塚遺跡が立地する丘陵の南裾に位置する平坦部である。東播系須恵器、亀山焼が少量出土している。

東播系須恵器(第18図72・73) 甕(72)・捏鉢(73)が出土している。72は甕底部に近い胴部破片である。焼成が良好で、外面は平行タタキ目が交差している部分が見られる。73は捏鉢の口縁部である。口縁端部に向かってわずかに厚さを増しているが、端部は基本的に拡張していない。復元口径は約30cmである。

このほかに、東播系捏鉢および亀山焼甕の口縁部と思われる小片が出土している。

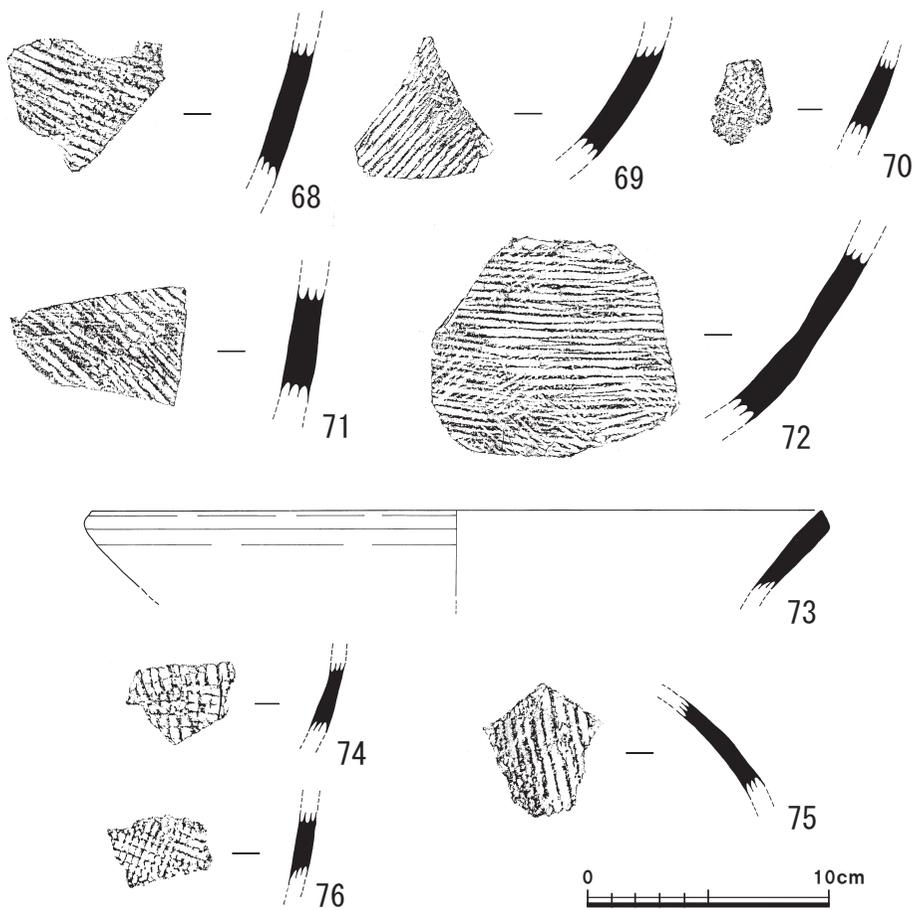
第5地点(第17図5) 鏡東谷遺跡南地区の南側隣接地で、同一地形面上に立地している。鏡東谷遺跡南地区南端でいったん急傾斜面を形成した後、ふたたび平坦な丘陵平坦面が南南東に延びており、調査区は丘陵平坦面を主体としている。調査区北端部で中世の遺物が出土し、亀山焼、産地不明須恵器が出土している。

亀山焼(第18図74) 甕の小破片である。外面には幅5mmほどの格子タタキ目が見られる。

産地不明須恵器(第18図75) 甕と思われる小破片で、外面に格子タタキ目を施している。格子タタキ目の長軸線は深い、短軸は浅い。非常に焼成が良好で、外面には透明の自然釉が見られる。胎土の雰囲気が亀山焼とは異なっており、また外面の特徴から、十瓶山焼の可能性があると考えている。十瓶山焼は、亀山焼とほぼ同時期に壺・甕・鉢などを生産しており、甕は外面に平行もしくは格子タタキ目を施し、亀山焼よりも長胴を呈する。本資料は器形は不明であるが、焼成状態などの点で亀山焼と異なっており、焼成が良好で外面に透明釉がかかっているなど、佐藤竜馬が挙げた十瓶山焼の特徴(佐藤1998)の一部と共通している。しかし、現状では出土須恵器の中に同種の資料が見当たらず、今後さらに検討したい。

第6地点(第17図6) 第5地点の西側に平行して南南東に延びる丘陵平坦部である。鏡東谷遺跡北地区の丘陵へと続く地形面上にあり、鏡東谷遺跡とは急傾斜の斜面で隔てられている。第5地点との間には小規模な谷が並行して走っている。調査区北部で中世の遺物が出土しており、亀山焼が出土している。

亀山焼(第18図76) 甕で、外面には幅3mmほどの細かな格子タタキ目が施され



第18図 鏡遺跡群試掘調査地区（広島県教育委員会）出土中世須恵器実測図

ている。

第7地点（第17図7c） 鏡西谷遺跡H地区の西側に位置する丘陵裾部平坦地で、第5地点、第6地点と同様の極めて平坦な、南南東に延びる低丘陵である。調査区北半部で中世の遺物が出土し、東播系須恵器、亀山焼ほか認められる。

東播系須恵器（第18図69） 甕1点（69）、捏鉢2点を確認した。69は外面に平行タタキ目が施されている。

亀山焼（第18図70） 甕3点を確認した。70は甕と思われる小破片である。瓦質で、外面には格子タタキ目が施されているが、不明瞭である。

産地不明須恵器（第18図68・71） 68は甕と思われる小破片である。外面に平行タタキ目を施しており、部分的に木目のため格子状を呈している。硬質で胎土の雰囲

気などは亀山焼、東播系とはやや異なっている。71 も外面に平行・格子タタキ目を施しているが、タタキ目は浅い。木目のためか部分的に格子状を呈している。タタキ目調整の後にヘラ削りが施されている。

3. 鏡遺跡群出土中世須恵器の特徴

1) 出土須恵器の分類

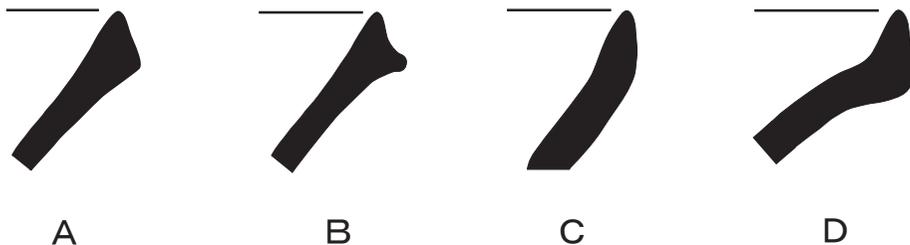
これまで、鏡西谷遺跡、鏡東谷遺跡をはじめとする鏡遺跡群出土中世須恵器について紹介してきたが、ここで出土中世須恵器の型式学的特徴についてまとめておきたい。鏡遺跡群出土の中世須恵器は、東播系須恵器、亀山焼、産地不明須恵器が認められた⁽⁶⁾。

1-1. 東播系須恵器

東播系須恵器は、兵庫県明石市や神戸市など播磨地方東部の広範な地域で焼かれていた古代須恵器に系譜をもつ還元炎焼成の焼物を総称しており、神出古窯跡群（神戸市）、魚住古窯跡群（明石市）、三木窯跡（三木市）などの複数の生産地が知られている。小地域（窯跡群）によって時期差がある。小皿・甕・鉢・瓦などが生産されており、西日本一帯の中世遺跡から広く出土することが知られている。鏡遺跡群では、捏鉢、甕の出土が認められる。

a) 捏鉢

口径 30cm 前後の大きさが基本であるが、口径 20cm 程度の小型品も少量認められる。片口を示す口縁部が 5 点確認できる。片口鉢が全体のどの程度を占めるのかは現状では明らかではないが、半数程度を占める可能性がある。器形全体が検討できる個体はほとんどないが、体部はおおむね直線的に外方へ大きく開き、わずかに内湾気味のものが多い。また、体部上部で外側にわずかに屈曲するものが散見される。底部の出土数は少なく、形状を窺えるものは少ないが、平底で、底面との境界はやや丸みを



第 19 図 鏡遺跡群出土の東播系捏鉢口縁部形態分類模式図

帯びるものが多い。口径 30cm 程度の個体では底径 12～15cm 程度、小型品では底径 8cm 程度と思われる。

口縁部の形態は 4 種類に分類される（第 19 図）。形態 A・B は口唇部外面直下に丸みを帯びた稜線を形成するもので、口縁端部が突帯状に肥厚している。口唇部外面直下の稜線部までは帯状の平坦面を形成している（以下、外部口唇帯と仮称する）。形態 A は口縁端部断面が方形状を呈するものもあるが、口縁部内面から外部口唇帯へ鋭角的に屈曲し、口縁部断面が断面三角形状を呈するものが多い。口縁端部に粘土を継ぎ足して口縁端部を肥厚させているものと思われるが、明瞭な接合が観察できるものは必ずしも多くない。粘土の継ぎ足し痕跡の確認できるものでは、口縁部内面側に継ぎ足し、口縁端部を上方に拡張するものが多いようであるが、外側に継ぎ足しているものもある。口縁端部は内外ともヨコナデ調整を施しており、内面は口唇直下の内面は内湾気味のものが多い。また、外部口唇帯に強いヨコナデ調整を施してわずかに窪むものがある。口縁端部を上方へ拡張する意識の強い形態である。

形態 B は基本的な形状は形態 A と共通する部分が多いが、外部口唇帯下端の稜線部がやや突出し、稜線部が明瞭なものである。口縁端部下方の拡張へとつながる萌芽的なものと言えるかもしれない。外部口唇帯下端の稜線から体部へ移行する部分は、形態 A では丁寧なヨコナデ調整が施されており、平坦な面を形成している。これに対して、形態 B では強いヨコナデ調整によって窪んだり稜線直下で段状になっている。外部口唇帯にも強いヨコナデ調整が施される場合が多く、稜線に近い部分では粘土が外側へ押しらやれ、稜線部が飛び出すような形状になっている。

形態 C は形態 A と共通する部分も多いが、口縁端部が先細りで丸く収めており、口縁部外面に明瞭な稜線を形成しない。外部口唇帯も丸みを帯びており、弧を描きながら体部へと移行している。口縁部内面は顕著に内湾しており、口縁端部が屈曲気味のものもある。粘土の接合線が明瞭に観察できるものはないが、外部口唇帯付近から粘土を接合し、口縁端部を上方に拡張している可能性が想定される。

形態 D は口縁端部が「く」の字状に屈曲し、口縁端部が直立する形態である。口縁端部に粘土帯を接合し、上方に口縁部を拡張しているものと思われる。口縁部内面の粘土接合部分を強くナデており、明瞭に窪んでいる。

図化していない資料をあわせて、形態 A 11 点（第 4 図 4、第 5 図 8・9、第 6 図 14、第 8 図 31・33・34、第 17 図 72）、形態 B 11 点（第 5 図 7・10・11・12、第 6 図 13、第 8 図 29・32・33・35）、形態 C 5 点（第 4 図 1、第 8 図 30、第 13 図 57）、形態 D 3 点（第

4 図 2)、不明 1 点である。形態 A、形態 B が大半を占めており、口縁端部を肥厚させる形態が主体である。また、粘土の継ぎ足し方から見ると、必ずしも口縁端の内面に粘土を接合して口縁端部を拡張しているわけではないが、形態 C、形態 D を含めて、口縁端部の上方への拡張が意識されている。また、形態 B ではヨコナデ調整によって結果的に口縁端部が下方にわずかに拡張される場合もあるが、鏡遺跡群では粘土の接合などによる下方への意図的な口縁端部拡張を行う個体は認められない。

なお、ここでは、第 6 図 14 は形態 A として分類したが、形態 A の中では特異な形態をしている。外部口唇帯下端の稜線がきわめて明瞭であり、体部と口縁部の境界も明瞭に屈曲して口縁端部が文字通り、断面三角形の突帯状を呈している。内面は口縁端部が「く」の字状に屈曲し、屈曲部は明瞭な稜線を形成している。粘土の継ぎ目は明確には観察されないが、内面の屈曲点付近、外面の体部との境界付近に粘土の接合面があるものと思われる。

b) 甕

体部破片がほとんどで、口縁部小片は 1 点あるのみである。体部（肩部および胴部）も器形が窺えるようなものはなく、小破片が多い。東播系須恵器甕体部外面にはタタキ目が残されており、平行条線文（本稿の平行タタキ目）、樹枝状文、長格子文（本稿の格子タタキ目）が知られているが、鏡遺跡群出土資料で認められるタタキ目は、もっとも一般的な平行条線文のみである。東播系須恵器甕のタタキ目の組み合わせは窯跡群によって異なることが指摘されており（荻野 1993）、三木窯跡群で 4 種類、神出窯跡群で 1 種類、魚住窯跡群で 7 種類が識別されている。平行条線文のみで構成されるタタキ目は各窯跡群で認められるが、施文がそれぞれ異なっている。神出窯跡群では太目の平行条線文が右下りに施される場合が多いが、三木窯跡群では右上りに施される場合が多い。いずれの窯跡群の場合も、タタキ目単位相互の重複はあまり大きくない。魚住窯跡群では細目と太目の平行条線文の両者が認められ、それぞれが単独で施される場合と両者が組み合わせられる場合の 3 種類がある。太目の平行条線文はタタキ目単位相互の重複はおおむね小さく整然と施されているが、細目の平行条線文はタタキ目単位相互に大きく重複している場合が多々認められる。鏡遺跡群出土資料は太目あるいは細目のいずれかで構成される平行条線文タタキ目を基本としており、太目の平行条線文の施文方向の詳細は現状では不明であるが、神出窯跡群および魚住窯跡群の製品を中心に搬入されている可能性がある。

焼成は、軟質の個体（第 6 図 19、第 8 図 38）と焼成が良好な個体（第 8 図 39、第

13 図 55) が認められる。後者では細目の平行条線文が交差しているものが多い。

1 - 2. 亀山焼

亀山焼は現在の岡山県倉敷市にあたる地域で焼かれていた古代須恵器に系譜をもつ還元炎焼成の焼物で、成立期より硬質な製品よりやや軟質の瓦質製品を主体に生産されている。甕、鉢、鍋といった日用雑器を中心に、壺や瓦などを生産している。瀬戸内地域の多くの中世遺跡から出土している。鏡遺跡群では、捏鉢と甕が出土している。

a) 捏鉢

10 点の出土が確認できるが、東播系に比してかなり少ない。いずれも瓦質で、外面には指頭調整が認められ、底部ではヘラ削り調整が施されている。出土資料の大半は体部や底部の小破片であるが、口縁部～体部（第 7 図 22）と体部～底部（第 7 図 23）があり（両者は同一個体かもしれない）、ほぼ全形を窺うことができる。底部～口縁部に向かってほぼ直線的に外側へ開く形態で、口縁端部を平らに収めている。口縁部破片は 3 点あり、体部～口縁端部までほとんど厚さが変化しないもの（第 7 図 22）と口縁端部がわずかに肥厚し、口縁端が強いヨコナデ調整で窪むもの（第 12 図 56）がある。底部は平底で、底径 10cm 程度と小さく、側面観は逆台形状である。

b) 甕

大半は胴部破片であるが、合計 83 点を確認することができ、点数的には東播系捏鉢を上回っている。全形を窺うことができるのは鏡千人塚遺跡出土資料（第 16 図 67）のみである。口頸部は「く」の字状に緩やかに屈曲し、口縁部は直立気味で、あまり大きく開いてはいない。口頸部は全体に薄作りで、口縁端部は肥厚しない。胴部上半に最大径があり、やや長胴である。底部は平底で、安定感がある。頸部直下から底部にかけて太目の平行タタキ目を施しており、上半部は横方向、下半部は縦方向に施されている。このほかに口縁部 4 点（第 7 図 28、第 9 図 40・41）、底部 1 点（第 9 図 42）が確認される。口縁部は、いずれも口頸部が「く」の字状に緩やかに屈曲し、頸部から口縁端部まで器壁の厚さは基本的に変化しておらず、口縁端を平らにおさめている。鏡千人塚遺跡に比べて口縁部の外方への開きが大きい。口縁端部に強いヨコナデ調整を施して窪むもの（41）、口唇部直下の口縁部内面に強いヨコナデ調整を施してわずかに窪むもの（28）があるが、ほぼ同様の形態的特徴を有している。底部は平底で、安定的である。体部は形状の推定できるものではなく、小破片が主体である。鏡千人塚遺跡出土資料を除くと、すべて外面に格子タタキ目を残している。格子目は正方形を基本としており、大きさは一辺 2～7mm まで見られるが、総じて細かなも

のが多い。大きさは、2～3mm程度の非常に細かなもの、4mm程度の細かなもの、5～6mmのやや大きなものの3種類程度に区分でき、後2者が主体である。なお、格子の細かなものは基本的に薄手である。

1-3. 産地不明須恵器

鏡西谷遺跡C地区、同D地区および鏡東谷遺跡を中心に産地不明須恵器が少量出土している。器種は、壺、甕、坏、埴があり、鏡西谷遺跡B地区では壺、鏡西谷遺跡C地区では、埴、坏、鏡西谷遺跡D地区では埴、坏、鏡東谷遺跡では、壺、埴、鏡地区第5地点では甕が出土した。

須恵器の埴・坏は全体形がわかる資料が出土していないが、鏡西谷遺跡D地区を中心に、鏡西谷遺跡C地区SB01、鏡東谷遺跡などで一定量(19点)確認できる。坏底部は平底であり、ヘラ切りで粘土紐を巻いた痕跡が明瞭に残るもの(第11図53)とナデ調整で平滑に仕上げるもの(第11図52)がある。底部下端の底面との境界は丸みを帯びており、滑らかに底面に移行している。底径はいずれも7～8cm程度で、比較的小型の形態である。焼成はやや甘く、軟質である。明らかな埴は鏡西谷遺跡SB01で出土している底部1点のみである。断面三角形の貼付高台で、高台は低い。器壁は薄手で、焼成は良好である。底径約5cmと小型の埴である。明らかに埴と判断できる口縁部はないが、同じ区画から出土した口縁部片が埴だとすると、比較的急傾斜で体部が立ち上がるものと思われる。この口縁部も焼成は良好である。

埴または坏の口縁部と思われる破片が10点認められ、4種類に分類できる(第20図)。形態Aは体部から口縁端まで器壁の厚さが基本的に変化せず、口縁端を丸くおさめるものである。3点認められる(第11図47・48など)。形態Bも体部から口縁端まで厚さが基本的に変化しないが、外面口縁直下を面取り状にヨコナデ調整しているものである。強いヨコナデ調整で面取り状の外面口唇部はわずかに窪んでいる。2点認められる(第11図50・51)。形態Cもほぼ同じ器壁を口縁端部まで保っているが、



第20図 鏡遺跡群出土の産地不明須恵器埴・杯口縁部形態分類模式図

口唇部内面がヨコナデ調整等により面取り状に平坦に仕上げ、口唇部は先細りの形態である。また、体部上部はわずかに内湾するが口縁端部はわずかに外反する。鏡西谷遺跡C地区SB01出土の1点のみである(第6図20)。形態Dは口縁端部が肥厚するもので、口唇部は丸く仕上げている。外面口唇部は平坦に仕上げられており、平坦部のやや広いものと狭いものがある。4点が確認される(第11図45・46ほか)。焼成はやや軟質のものと硬質のものがあるが、形態との関係は現状では認められない。

口縁部は鏡西谷遺跡D地区以外では同遺跡SB01で1点出土しているのみである。鏡西谷遺跡SB01出土の形態CはD地区では出土しておらず、同じ調査区から壺が出土していること、壺と焼成や胎土が類似することなどからすると、本例は壺の口縁部である可能性がある。一方、形態A・B・Dが出土したD地区では、壺と判断できる資料はなく、現状では坏のみであることからすると、出土した口縁部も坏を主体としている可能性がある。いずれにせよ、口縁部は明らかに同一個体と判断できる資料はほとんどなく、少なくとも3種類の形態が複数個ずつ存在するものと想定される。

壺と思われる破片は鏡西谷遺跡B地区で1点、鏡東谷遺跡で3点出土している。いずれも小破片で、全体の形状を窺えるものはない。鏡西谷遺跡B地区の資料は胴部小片であるが、比較的小型品と思われる。焼成が良好で、硬質である。鏡東谷遺跡の3点はいずれも底部であり、やや軟質のものが多い。底径6~7cmの小型品で、きわめて低い高台が認められる。小型の長頸壺かもしれない。

このほかに、鏡西谷遺跡C地区、同E地区などで焼成の良好で硬質な壺または甕の破片がわずかに出土しているが、いずれも小片であるため形状を窺うことができない。また、鏡地区第5地点で長軸線は深い短軸は浅い格子タタキ目を持ち、非常に焼成良好で外面に透明の自然釉が認められる甕が出土している。

2) 各遺跡・各地区の中世須恵器の出土状況と組成

次に、前節で説明した器種別の形態分類も加味しながら、各遺跡における中世須恵器の出土状況と組成をまとめておきたい。まず、個別の出土状況であるが、東播系須恵器は、鏡西谷遺跡B地区、同C地区、同E地区、同G地区、鏡東谷遺跡北地区、同南地区、鏡地区第7地点で出土が確認できる。出土点数の上では、鏡西谷遺跡C地区が大多数を占め、同遺跡E地区を加えると、8割以上が両地点の出土資料である。出土遺跡・出土地区を見ると、鏡西谷遺跡B地区、同C地区、鏡東谷遺跡南地区のように、集中的に中世遺構が検出されたものと鏡西谷遺跡E地区、同G地区、鏡東谷遺跡北地区、鏡地区第7地点のように、中世遺構が不明、あるいはほとんど検出されてい

ないものに分かれる。前者では鏡西谷遺跡C地区SB01を除くと、遺構に伴う形で出土したものはほとんどなく、近接する中世遺構から流出したもの、廃棄されたもの、あるいは明確な遺構伴わない活動により残されたものなどである。一方、後者については、かならずしも遺構が存在しない、あるいは遺構に伴わなかった判断できものばかりではない。鏡西谷遺跡E地区は大半が小規模な谷部に位置し、明確な中世遺構を指摘することができないことから、隣接地区の中世遺構からの流出や廃棄に伴うものと判断されるが、鏡東谷遺跡北地区では後世の削平を大規模に受けていることから本来関連遺構が存在した可能性が高い。鏡地区第7地点は、鏡西谷遺跡H地区南側の低丘陵に位置する。試掘調査のみで、発掘調査は行われていない。試掘調査時点では遺構は検出されていない。しかし、出土遺物は少ないが、東播系須恵器のみならず、亀山焼なども出土している。鏡東谷遺跡南地区の調査成果から見ると、試掘調査時点における出土遺物量・検出遺構の有無は必ずしも比例関係になく、これまでの鏡地区の成果に照らして、立地の点からも関連遺構が存在した可能性が高い。これらのことからすると、東播系須恵器出土地点はいずれも中世遺構の集中地点やその近縁部から出土しているものと思われる。一方、中世遺構が集中的に検出されている鏡西谷遺跡D地区や同F地区では全く出土がなく、別の意味で注意しておく必要がある。

東播系須恵器は、すでに何度か述べたように、確認できる器種は捏鉢と甕である。両器種の出土状況について見ると若干の分布に違いが認められる。捏鉢は、鏡西谷遺跡C地区を主体に、鏡西谷遺跡B地区、鏡西谷遺跡E地区、鏡東谷遺跡北地区、鏡地区第7地点で出土しており、鏡東谷遺跡南地区では出土していない。一方、甕は、鏡西谷遺跡C地区を主体に、鏡西谷遺跡E地区、鏡東谷遺跡北地区、鏡地区第7地点で出土しており、鏡西谷遺跡B地区、鏡東谷遺跡北地区では出土していない。鏡西谷遺跡C地区SB01以外では、両器種が厳密な意味で同一時期かどうか現状では検証が困難であり、出土量も多くないことから、分布の違いに意味を見出すのが困難である。鏡西谷遺跡C地区、鏡西谷遺跡E地区、鏡地区第7地点では両器種が出土しているが、その他の地区ではいずれか一方であることが確認できる。

各地区における分布状況を確認して見ると、B地区では調査区西半部を中心に出土している。西半部は完形土師質土器杯・皿がまとまって出土したSX02の南側隣接地のC2区とその斜面下方のC5区に集中する。おおむねSX02が位置する平坦面からの流出あるいは廃棄に伴う分布を示すものと思われる。調査区東半部は各所から散漫に出土している。調査区北東部の遺構群で1点、そのほかは調査区南端部である。

鏡西谷遺跡C地区ではS B 01 からの出土が主体であり、S B 01 以外では西北部と東南部で一定量が出土している（第1表）。S B 01 では建物跡北部から建物跡北側の1号溝S D 01 にかけて遺物が集中して出土しており、G 2区北半中央部とH 2区北西部の大きく2つのまとまりが見られる。捏鉢はG 2区、G 3区、H 2区を主体として、甕はH 2区、H 3区を主体として出土しており、捏鉢は両方の集中部に、甕は東側の集中部（H 2区北西部）に主として分布していると言える。

捏鉢の口縁形態について見ると、口縁部が出土しているのは捏鉢が集中して出土しているG 2区、G 3区、H 2区のみである。口縁形態は形態Aと形態Bのみであり、形態A 5例、形態B 8例と形態Bがやや多い。形態Aは満遍なく分布しており、形態Bは東側集中部のH 2区に半数が分布する。

調査区西北部では調査区北部に分布しており、A 2区で甕1点が出土しているものの、そのほかはすべて捏鉢である。口縁部は4点あり、A・B・Cの各形態が認められる。調査区東南部はG 5区に集中している。同一個体を含んでいるものと思われる、S B 01の遺物集中部の南に位置している。しかし、S B 01で一定量出土している亀山焼がまったく出土していないことからすると、一概にS B 01からの流出とはいえない状況である。口縁部は2点あり、いずれも形態Aである。

鏡西谷遺跡E地区では、調査区北半部に集中し、調査区南部にわずかに分布する状況であるが、北半部の各調査区とも出土点数が少なく、分布は散漫である。調査区北東端から南西に延びる谷の中央部を中心に分布しているが、関連遺構は不明である。隣接するG地区の谷部分では出土が認められないことから、程遠くない場所に関連遺構が存在するものと思われる。甕は調査区東半を中心に調査区西半にも若干分布するが、捏鉢は調査区中央部のC・D区に集中している。また、調査区南部にも捏鉢が1

第1表 鏡西谷遺跡C地区出土東播系須恵器捏鉢・甕調査区別出土状況一覧表

	A	B	C	D	E	E・F	F	F・G	G	G・H	H	H・I	I	G~L	計
1・2		3/0	4/0	1/0				2/0							10/0
2	1/1							1/0	10/0	4/2	9/5			2/0	27/8
3						1/0	1/0		17/1		0/2				19/3
3・4								1/0				1/0			2/0
4・5					1/0										1/0
5				1/0					1/9						2/9
計	1/1	3/0	4/0	2/0	1/0	1/0	1/0	4/0	28/10	4/2	9/7	1/0		2/0	61/20

各欄の数字は、捏鉢出土点数／甕出土点数で、破片数を示す。灰色部分はS B 01の範囲を示す。

点分布するが、甕は調査北半部のみである。捏鉢口縁部は1点のみで、形態Cである。

このほかでは、G地区で甕が調査区中央部に少量分布する。鏡東谷遺跡北地区では調査区西部にわずかに分布が認められる。いずれも捏鉢である。口縁部が2点あり、形態Aと形態Cである。鏡東谷遺跡南地区は甕1点のみである。鏡地区第7地点もわずか4点であるが、近接した調査区から捏鉢、甕が出土している。いずれも胴部破片で、形状は不明である。

亀山焼は、鏡西谷遺跡B地区、同C地区、同D地区、同E地区、同G地区、鏡東谷遺跡北地区、同南地区、鏡千人塚遺跡、鏡地区第5地点、同第6地点、同第7地点で出土が確認できる。東播系須恵器に比べると、さらに広い地域に分布しており、調査範囲のほぼ全域に広がっていると言えるが、出土点数の上では鏡西谷遺跡C地区が大多数を占め、一定量出土した同遺跡B地区、E地区を加えると、ほとんどがこの3地区の出土資料である。出土遺跡・出土地区別では、遺構が不明の鏡地区第5～7地点を除くと、鏡西谷遺跡B地区、同C地区、同D地区、鏡東谷遺跡南地区、鏡千人塚遺跡のように集中的に中世遺構が検出されたものと鏡西谷遺跡E地区、同G地区、鏡東谷遺跡北地区のように中世遺構が不明、あるいはほとんど検出されていないものに分かれる。基本的には、東播系須恵器と同様の状況である。

現状で確認できる器種は、捏鉢と甕である。甕はいずれの地区でも出土しているが、捏鉢は、鏡西谷遺跡B地区、同C地区で確認できるのみである。鏡西谷遺跡B地区、同C地区北西部では2点のみであり、同C地区S B 01で集中的に出土している。

各地区における分布状況を確認して見ると、鏡西谷遺跡B地区では調査区西半部を中心に出土しており、西半部は完形土師質土器坏・皿がまとまって出土したS X 02の位置する平坦面およびその南側隣接地に集中する。このほかに、調査区東半部でも若干出土しているが、いずれもC地区に隣接する調査区南端である。出土の捏鉢、甕はいずれも体部および胴部の破片である。甕は外面に格子タタキ目が認められ、格子は3～4mm程度の細かなものと5～6mm程度のやや大きめのものがあり、前者はおおむね器壁が5mm程度と薄手である。分布の上では特徴は指摘できない。

鏡西谷遺跡C地区では、西北部に最も集中して分布(34点)しており、S B 01からもほぼ同じ程度出土(27点)している(第2表)。北西部は捏鉢1点のほかはすべて甕である。B列北半に集中しており、東半部にも一定量が分布する。甕は口縁部(口頸部)が3点、底部が1点で、そのほかはすべて胴部である。口縁部(口頸部)、底部とも分布の中心から出土しており、調査区西北部の東半部は胴部のみであ

第2表 鏡西谷遺跡C地区出土亀山焼捏鉢・甕調査区別出土状況一覧表

	A	B	B・C	C	C・D	D	F	F・G	G	G・H	G・H・I	H	H・I	I	計
1・2		0/7			1/3				0/4	0/1		0/8			1/23
2	0/1	0/1							1/1	3/0		3/0			7/3
3		0/5		0/3		0/3	1/1		0/1						1/13
3・4		0/4			0/3			0/1			0/2		0/1		0/11
4		0/1													0/1
4・5			0/2												0/2
5									0/1						0/1
2～5	0/3														0/3
計	0/4	0/18	0/2	0/3	1/6	0/3	1/1	0/1	1/7	3/1	0/2	3/8	0/1		9/57

各欄の数字は、捏鉢出土点数/甕出土点数で、破片数を示す。灰色部分はS B 01の範囲を示す。

る。S B 01では2ヶ所の遺物集中部からの出土が主体で、西端部にも若干の分布が認められる。甕を主体とするが、捏鉢が一定量出土している。両者の分布状況は基本的に同様であり、2ヶ所の遺物集中部を中心に分布する。C地区では西北部、S B 01以外では、調査区東南部で甕1点が出土している程度である。

C地区では、S B 01で体部から口縁部に向かって直線的に外方に開き、口縁部がやや先細りで端部を平坦におさめる捏鉢が認められる。捏鉢はわずか8点の出土であるが、ほぼ同形態と思われる。甕は胴部が主体であるが、西北部、S B 01で出土している口頸部は「く」の字状に屈曲する、口縁部は比較的開きが小さく、ほとんど肥厚しない、口縁端部を平らにおさめるなどほぼ共通した特徴を有する。胴部外面に格子タタキ目を施しており、2～7mmの大きさがあるが、3～4mm程度と5～6mm程度が最も多い。器壁の厚さとはとくに相関はない。分布の上でも特定のまとまりを指摘できる状況ではなく、甕の分布と基本的に一致している。

鏡西谷遺跡E地区では甕が出土しているのみで、北半部中央部から散漫に出土している。いずれも胴部破片である。外面に格子タタキ目を施しており、いずれも5～6mm程度で、器壁は1～1.2cm程度のやや厚手の個体である。

鏡千人塚遺跡では1号積石塚S S 01から1個体分の甕が出土している。そのほかの調査区は1～数点で、分布の上での特徴を指摘できない。

産地不明須恵器は、鏡西谷遺跡D地区で一定量が出土しており、鏡西谷遺跡B地区、同C地区、同E地区、鏡東谷遺跡北地区、同南地区、鏡地区第5地点、同第7地点で1～数点確認できる（鏡西谷遺跡E地区出土資料の大半は器壁が剥落するなど状態が悪く、東播系須恵器や亀山焼がかなり含まれている可能性がある）。器種は、壺、坏、

壺、甕（胴部小破片で壺、甕の判別ができないものが多い）が認められ、埴、坏は鏡西谷遺跡D地区を中心に、同C地区、鏡東谷遺跡南地区で出土が確認できる。壺、甕は、鏡西谷遺跡B地区、同C地区、同E地区、鏡東谷遺跡北地区、同南地区、鏡地区第7地点で出土しており、いずれも小破片で少量であり、全体の形状を窺えるものはない。鏡東谷遺跡北地区、同南地区出土の壺は底径7cm前後の小型品で、やや軟質であるが、その他の地区出土の壺、甕は焼成が良好で硬質のものが多い。

壺、甕はまとまった出土がなく、分布上の特徴は言及できないが、埴、坏は鏡西谷遺跡D地区北部で集中的に出土している。口縁部破片が大半であり、全体の形状を窺うことのできる個体が出土していないため、埴、坏の判別が困難である。また、少量ながら、鏡西谷遺跡C地区SB01で埴、坏、鏡西谷遺跡南地区で埴が出土している。両地区出土の埴、坏関連の口縁部は、前節では器種確定が困難であるため、一括して分類した。鏡西谷遺跡D地区では、形態A、形態B、形態Cが、同C地区SB01では形態Dが出土しており、排他的な分布を示す。C地区の埴、坏はSB01の遺物集中部から出土しており、形態Dは焼成が良好で、同じ地区から同質の埴が出土している。D地区では明確に埴と判断できる資料は出土していない。出土口縁部は焼成が良好なものやや軟質のものがあり、出土坏と同質の焼成、胎土を示すものもある。形態A～Cは分布の上での特徴はとくには指摘できない。

以上、東播系須恵器、亀山焼、産地不明須恵器の分布について個別に見てきたが、東播系須恵器と亀山焼の分布は、後者がより広い分布を示すが、ほぼ重複していると言える。産地不明須恵器は、量の多少を別にすると、亀山焼の分布と重複するが、坏、埴は、鏡西谷遺跡D地区を主体に、同C地区（SB01）、鏡東谷遺跡南地区で確認でき、特徴的な分布を示す。とくに、鏡西谷遺跡D地区は東播系須恵器の分布が認められず、亀山焼も甕破片が1点出土しているのみである。同地区の墳墓を主体とする遺構群とほぼ重複して分布しており（竪穴遺構埋土からの出土はあるが、明確に遺構に伴う例はない）、日常的な生活と関連する遺構は検出されていない。坏、埴の所属時期、遺跡の性格などに帰される可能性があるが、現状ではこれ以上考察を進めることは困難である。

最後に、各遺跡、各地区の中世須恵器の器種と組合せを概観して、この節をまとめとしよう。鏡西谷遺跡B地区では、調査区西半部を主体に中世須恵器が分布する。とくに、北部のSX01の位置する平坦面およびその南側隣接地に多くが分布し、東播系須恵器捏鉢、亀山焼捏鉢・甕が認められ、ほかの出土遺物の分布状況も勘案して、

同一組成として捉えることができると思われる。東播系須恵器捏鉢、亀山焼甕を主体とする組成である。西半部南端部の東播系須恵器捏鉢もこの一群に関連するものであろう。調査区東半部では東播系須恵器捏鉢、亀山焼甕がきわめて散漫に分布しているが、組成と捉えられる分布状況は指摘できない。

鏡西谷遺跡C地区では、SB01と調査区西北部に集中的な分布が認められる。SB01は一括遺物と捉えることができる状況であり、東播系須恵器捏鉢・甕、亀山焼捏鉢・甕、産地不明須恵器碗・坏を組成とする。調査区東南部（SB01南側隣接地）にも一定量の分布が認められ、東播系須恵器捏鉢・甕、亀山焼捏鉢・甕、産地不明須恵器甕または壺が出土している。これらもSB01の組成に加えてよいものであろう。調査区西北部では、東播系須恵器捏鉢・甕、亀山焼捏鉢・甕、産地不明須恵器甕または壺が出土している。次節で触れるが、本地区は複数時期の遺物が確認できることから、すべてを同一組成と捉えることができるかどうかはさらに検討が必要である。しかし、分布状況からすれば、東播系須恵器捏鉢・甕、亀山焼捏鉢・甕が同一組成となる可能性がある。東播系須恵器甕、亀山焼捏鉢の出土はわずかで、東播系須恵器捏鉢、亀山焼甕を主体とする組成と思われ、B地区西半部の組成に共通する。

鏡西谷遺跡D地区は、すでに述べたように、産地不明須恵器碗・坏を主体とする組成である。鏡西谷遺跡E地区では、東播系須恵器捏鉢・甕、亀山焼甕、産地不明須恵器甕または壺が出土している。分布の大半は谷内であり、基本的には隣接部関連遺構からの流れ込みと判断され、その他の遺物は複数時期のものあることから、同一組成とするにはさらに検討が必要な状況である。しかし、中世遺物は中世前半期を中心に3時期程度にまとまることから、東播系須恵器、亀山焼が同一組成に含まれる可能性は高い。遺物産地不明須恵器は大半が東播系須恵器、亀山焼の可能性があり、基本的に東播系須恵器捏鉢・甕、亀山焼甕の組成と思われる。鏡西谷遺跡G地区では、調査区中央部に東播系須恵器甕が少量分布している。ほかの遺物も散漫に分布が認められるが、関連遺構は検出されておらず、性格は不明である。

鏡東谷遺跡北地区では、東播系須恵器捏鉢、亀山焼甕、産地不明須恵器壺などが調査区西半部の各所から散発的に出土しているが、いずれも小片であり、組み合わせを検討できる状況ではない。同南地区では、調査区北部を中心に、東播系須恵器甕、亀山焼甕、産地不明須恵器碗、壺などが出土している。本地区の遺構、遺物は、次節で述べるように、15世紀～16世紀初頭を中心としており、これらの中世須恵器の年代とはかなり隔たりのあるものが大半であると思われる。関連遺構が発掘調査では検出

されておらず、削平等に伴う遊離遺物が大半であると想定される。共伴関係についてはさらに検討が必要であるが、東播系甕、産地不明須恵器は同一組成となる可能性がある。鏡千人塚遺跡では、1号積石塚から亀山焼甕1個体分が出土しており、蔵骨器として利用されたものと思われる。

このほか、鏡地区第1地点で東播系須恵器捏鉢・甕、同第5地点で亀山焼甕、産地不明須恵器甕、同第6地点で亀山焼甕、同7地点で東播系須恵器捏鉢・甕、亀山焼甕、産地不明須恵器甕が調査区各所から少量散漫に出土している。組成を検討できる状況ではないが、東播系須恵器、亀山焼が出土している地点については同一組成に含まれる可能性がある。

3) 鏡遺跡群における中世須恵器の時期と組成

前節まで鏡西谷遺跡を中心とする鏡遺跡群出土中世須恵器の種類とその分布状況について検討し、分布の面から組成の可能性について探ってきたが、本節では出土中世須恵器の型式学的な特徴から編年的な検討を加え、各遺跡、各地区の組成や時期についてまとめてみたい。

出土中世須恵器は、東播系須恵器、亀山焼、産地不明須恵器があり、順に時期的な検討をすすめる。まず、東播系須恵器であるが、これまでの編年研究を概観すると、まず水口富夫の研究があげられる（水口1983）。水口は兵庫県魚住古窯跡群の報告を行う中で、出土した小皿、碗、捏鉢、甕の形態分類を行っている。本遺跡で出土している捏鉢と甕について注目して見ると、捏鉢はA～D類の4形態に分類している。鉢A類は底部から体部へはやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁部から体部にかけては直線的で、体部にヨコナデ調整による凹凸が顕著に残るものである。内面の仕上げナデは丁寧に施される。底部は回転もしくは静止糸切りで、底部周縁はほとんど未調整である。口縁部は断面方形状に近く、外側に突出するが上方には拡張しない。鉢B類は口縁端面の上下への拡張が特徴である。端部を強いヨコナデ調整で窪ませ、上下に端部を拡張しているものが多い。全体として見ると、上方への拡張を特徴としており、下方（外側）へ拡張は認められないものもある。体部にはヨコナデ調整による凹凸がみられるが、内面の仕上げナデは比較的丁寧である。底部は回転糸切りが圧倒的に多く、底部周縁はナデもしくはヘラ削りされている。鉢C類は口縁端部が丸くなり、上下への拡張をほとんどしないものである。底部から内湾気味に立ち上がり、体部の凹凸はあまり目立たない。底部内面から体部にかけては、指頭調整が特徴的である。底部は回転糸切りが圧倒的に多く、ナデ調整もしくはヘラ削り調整によって丁寧に仕

上げられている。鉢D類は内湾した体部と水平に近い口縁部をもつもので、底部形態や外面のタタキ目の有無などから3つに細分されているが、出土量は少ないようである。甕もA～C類に分類されている。甕はいずれも丸底で、外面はほぼ平行タタキ目が施されるが、一部に長方形の格子タタキ目がみられるものもある。内面調整はナデ調整とハケメ調整があるが、大半は横位のナデ調整である。ハケメを全体に施すものは稀であり、部分的な場合が多い。甕A類は口縁端部を上方に拡張するもので、頸部にはタタキ目が明瞭に残る。外面のタタキ目は幅3～4mmほどである。甕B類は口縁端部を上下ともわずかに拡張するもので、頸部のタタキ目は丁寧にナデ消されている。タタキ目は幅3mmほどである。体部は球形のものが多い。甕C類は口縁部が外傾気味で、口縁端部を下方（外側）に拡張し下端が垂下するものである。頸部のナデ調整は丁寧であるが、わずかにタタキ目が残る。タタキ目の幅は2mm以下と細かい。これら捏鉢、甕はA類→B類→C類の順に形態が変化し、時期的には前後関係を持ちながら一部は共存していたようである。

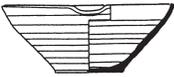
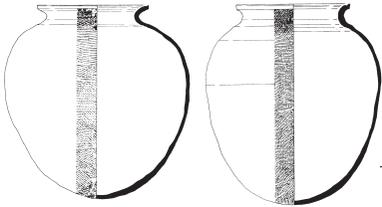
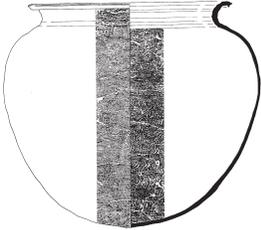
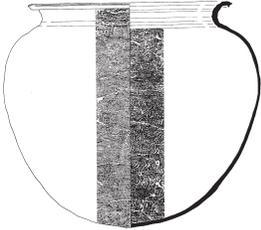
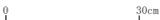
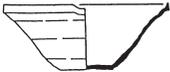
鋤柄俊夫は水口の研究成果を踏まえた上で、明石市調査の魚住古窯跡群の報告において出土資料の分類を行った（鋤柄1985）。甕、鉢ともにA～C類に分類している。甕A類は強く外反する口縁を持つもので、口縁端面は平坦である。口縁部外面の平行タタキ目はよく残っている。甕B類は比較的緩やかに外反する口縁を持つもので、上端部には明瞭な縁帯が形成され上方へ突出する。甕C類は頸部が胴部から直立するものである。鋤柄分類の甕A・B類は水口の甕A類の要素を含むものである。鋤柄分類甕C類は水口分類甕B・C類の一部が該当するが、やや時期が下ったものも含まれているようである。

鉢A類は口縁端部を丸く仕上げ、体部外面に平行タタキ目を施し、内面に不定方向のナデが認められるものである。鉢B類は器壁が厚く、体部が比較的直線的なものである。口縁部形態から3つに細分され、B-1型式は口縁部が断面方形状を呈するもので、端面は内傾し窪み気味である。端部を内側へ突出させるもの（B-1-a）と、内外へ突出させるもの（B-1-b）に分けられる。B-2型式は口縁部を肥厚させ、端部を上下につまみだすものである。端面は明瞭に窪んでいる。B-3型式は口縁端部の上下方向へのつまみだしは顕著で、口縁部が体部から緩やかに肥厚するものと、全体的に均一なものがある。鉢C類は、B類と系譜を異にすると考えられるもので、器壁は全体的に薄手で、口縁部は肥厚する。口縁部の形態と体部下半の内湾の様相などから3つに細分されている。口縁端部外面の屈曲部を丸く仕上げるC-1

型式、口縁端部外面の屈曲部に稜を形成し、口縁端部直下の内外面には回転ナデ調整による凹線が認められるC-2型式、口縁端部外面が縁帯状に外側へ突出したC-3型式に細分されている。鉢B類は水口分類鉢A・B類の一部が該当し、鉢C類は水口分類鉢C類の一部が該当する。

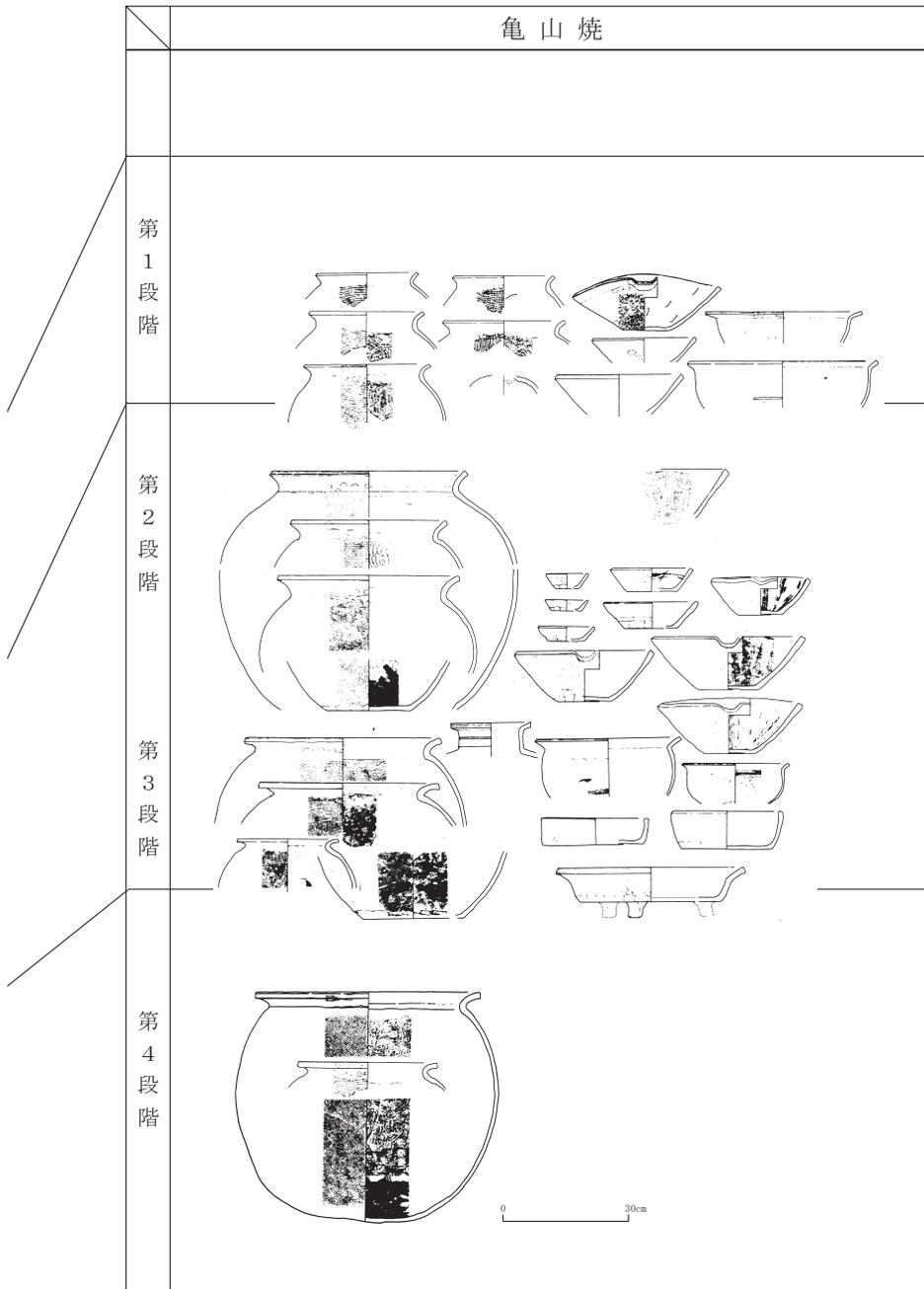
編年については、予察であるが、甕を中心に行っている。調査では全体の器形がわかる甕は出土していないことから、口縁部および頸部の属性を①上方への端部の突出、②下方への端部の突出、③頸部の有無、④口縁部外面にみられる平坦面の形態、⑤端面の形態の5属性を設定して各属性を数量化、視覚化して変化を検討した。その結果、水口と同様の形態変化を追認し、各型式の有する年代幅は極めて短いものと指摘している。また、鉢B類とC類にみられる変化は、甕・埴との組み合わせから時期差の可能性が高いとし、鉢B類が甕A・B類に、鉢C類が甕C類に併行するとしている。なお、調査した窯は12世紀末～13世紀中頃の年代測定結果が出ている。

次に、亀山焼であるが、岡田博は岡山県亀山遺跡の発掘調査報告の中で、窯跡関連の出土資料を中心としながら、第1段階～第4段階に編年した(岡田1988)。第1段階は灰原1や土器溜り3を中心とし、共伴する土師質土器などから、12世紀末～13世紀前半に比定している。鉢は全て捏鉢で、器壁が薄く口縁端部の肥厚が目立たない時期とされている。甕は平行タタキ目と格子タタキ目がほぼ半数あり、口縁部は外方への屈曲が弱く立ち上がる傾向にある。端部はわずかに肥厚し、端面はやや窪んでいる。外面の格子タタキ目は3～5mm方格のものが多く、やや不揃いである点が特徴とされている。第2段階は2号窯の資料を中心とするものである。この時期の鉢は捏鉢が1点あるのみで、はっきりとしない。甕は体部外面に格子タタキ目のみが用いられ、体部外面の格子タタキ目は浅く、3～4mm前後の方格を示すものが多い。内面の当て具痕はナデ調整やハケ目調整によって消されるものが多い。口縁部は第1段階の形態を継承しており、屈曲は弱く上方に立ち上がり、わずかに肥厚する。第2段階は土師質土器が共伴していないが、2号窯の考古地磁気年代測定によって概ね13世紀中頃と考えられている。第3段階は1号窯体内の一括資料に代表されるもので、鉢は捏鉢よりも播鉢の比率が高まる時期である。甕は外面に3mm方格の細かな格子タタキ目を施すものが多く、内面は同心円状の当て具痕のあとにナデ・ハケ目調整を行う比率が減少する。口縁端部はわずかに肥厚して窪み、上方につまみ上げられたように端面が垂直に近いものもある。第3段階は龍泉窯系青磁や備前焼播鉢を伴っており、13世紀後半～14世紀初頭に比定されている。第4段階は埋甕2を指標とするもので

		東播系捏鉢	東播系甕
11世紀後半	第1期第1段階		
11世紀末～12世紀前半	第1期第2段階		  
	第2期第1段階		
12世紀中～後半	第2期第2段階		 
12世紀末～13世紀初頭	第3期第1段階		
13世紀前～後半	第3期第2段階	 	
14世紀前半	第3期第2段階		

第21図 東播系須恵器

(森田1995、水口1983、



および亀山焼編年図
 岡田 1988 を元に作成)

あるが、鉢が相伴しておらず、鉢の詳細な形態は不明である。

伊藤晃は、亀山焼の全期間を対象として第1群～第4群の4時期に分け、編年を行っている(伊藤 1987)。第1群は外面に平行タタキ目をもつものを指標としている。壺、甕、鉢、瓦などを焼成しており、壺は内面ナデ調整、甕は内面に同心円状の当て具痕を残している。甕は比較的長胴で、口縁部は直立気味であり、口縁端部はほとんど肥厚しない。胴部最大径は肩部付近にあり、底部も比較的小さい。しかし、この時期の後半にはすでに寸胴化が始まっている。第2群は岡田編年の第2段階および第3段階を含むもので、格子タタキ目をもつ典型的な亀山焼と判断されるものである。第3群は岡田編年第4段階を含み、年代的には14世紀後半頃までの資料を含んでいるようである。全体的に土師質に近い胎土・色調を呈するものが主流となる段階である。また、亀山地区での生産はこの段階で終了したと考えられている。第4群は亀山焼に類似する形態や胎土・色調をもつ土器群で、甕・播鉢・壺などのほかに、鍋、釜、焙烙、火舎など様々な器種が生産されていたようである。亀山地区で生産されていないことから、亀山系土器群と呼称されている。おおむね15世紀代の時期である。

鏡遺跡群出土の東播系須恵器、亀山焼を上述の編年研究成果に照らし合わせて見ると、東播系須恵器捏鉢については形状を復元できる個体が一定量あり、編年の指標となる口縁部などもかなりの量出土していることから、対比が可能な状態である。出土捏鉢の口縁部形状については、形態A～Dの4種類が認められた。形態A、形態B、形態Cは相互に類似した形態であり、口縁端部を上方への拡張する点で共通している。上方への拡張の度合はあまり大きくなく、形態Aは口縁端部断面形状が方形に近いものを若干含んでいる。形態Bは下方への拡張が認められるが、顕著ではなく、ヨコナデ調整に伴う粘土のはみ出し程度である。形態Cは形態A、形態Bに比べると、口縁端部の稜線がきわめて不鮮明で、より上方への拡張が意識されているように思われる。形態A、形態Bは底部から口縁部の側面観が直線的であり、わずかに内湾しており、体部と口縁部の境界付近でわずかに屈曲するものがある。底径は口径の約1/3程度と小さく、底面との境界は丸みを帯びている。形態Cは量的に少なく、全体の形状を窺えるものがないが、形態A、形態Bとほぼ同じ特徴をもつものと推定される。これらの特徴から見て、森田編年第Ⅱ期第1段階、第Ⅱ期第2段階に対比されると考えられ、とくに第Ⅱ期第2段階を主体としているものと思われる。これに対して、形態Dは口縁端部が「く」の字状に屈曲し、上方への拡張が明瞭である。全体の形状を窺うことはできないが、体部上部から口縁部にかけて大きく外反するよう

ある。形態的特徴から見れば、森田編年第Ⅲ期第1段階の様相と思われる。年代は第Ⅱ期第1段階が12世紀中葉～後半、第Ⅱ期第2段階は12世紀末～13世紀初頭、第Ⅲ期第1段階が13世紀前半～後半である。

東播系須恵器甕については、全形を窺える資料がなく、編年の指標となる口縁部は1点のみの出土である。その資料も風化が著しく形状が不明瞭なため時期は明らかでない。出土資料のほとんどが胴部小破片であり、詳細な時期の検討は困難な状況であるが、比較的良好な焼成を示すものが多く、捏鉢と同時期のものが搬入されていると見て大過あるまい。なお、鏡東谷遺跡出土の胴部破片（第15図65）、外面に幅1mmほどの細い平行タタキ目が見られ、ほかの東播系須恵器甕と雰囲気は異なっているが、水口分類甕C類のタタキ目が幅2mm以下であることからすれば、甕C類の破片と考えてもよいのかもしれない。その場合、第Ⅱ期第2段階（12世紀末葉～13世紀初頭）に該当する。

次に、亀山焼であるが、捏鉢、甕ともに全体の形状を窺うことができる資料が少量ではあるが、出土しており、編年の指標となる口縁部などもある程度出土している。捏鉢の形態がわかるものはSB01を主としており、口縁部が確認できるのは、SB01のほかはG地区で1点出土するのみである。口縁部は全く肥厚せず、器壁も薄手である。平底で、底径は口径の1/3程度と小さく、体部は直線的に開いている。岡田編年第1段階（12世紀末～13世紀前半）の特徴に一致している。G地区出土捏鉢（第13図60）は口縁端部をやや肥厚させている点から、SB01出土資料よりやや時期が下るものかもしれない。しかし、岡田編年第1段階に属する亀山遺跡土器溜り3出土資料に同形態が含まれていることから、第1段階の時期の中におさまるものと捉えておきたい。

甕は全体の形状が窺えるのは鏡千人塚遺跡の一個体分の資料のみであるが、鏡西谷遺跡C地区で口縁部、胴部、底部の破片が出土しており、同C地区SB01で口頸部、頸部～胴部の破片が出土している。口縁部は、いずれも立ち上がり気味で、口頸部の厚さはほぼ一定で、口縁端を平坦におさめている。口縁端部は基本的に肥厚していないが、わずかに内側に肥厚するもの（第7図28）がある。口縁端はヨコナデ調整を行っており、強いナデ調整によりはわずかに窪むものもある（第9図41、第16図67）。鏡千人塚遺跡を除くと、いずれも口頸部外面は格子タタキ目をナデ消しており、痕跡的に確認できる。このほかに、鏡地区第1地点でも亀山焼の甕の口縁部と思われる小片が出土しており、口縁部端面は平坦であるが形状は不明である。肩部は丸みを帯び

おり、スムーズに胴部へ移行している。胴部最大径がどのあたりにあるかは小破片を主体とするため不明であるが、千人塚遺跡例は肩部寄りの胴部約1/3付近にあると想定される。底部は平底で大きく安定的である。肩部～底部外面には全面にタタキ目が残されており、内面はあて具痕をナデ消しているが、痕跡が残っているものも多い。中型の甕を主体とするようであり、大型の甕の存在は明確ではない。鏡千人塚遺跡は薄手の中型品であり、前述の特徴から見て、第1段階に属するとみてよからう。SB01は一括資料であること、捏鉢に第1段階以外の資料が見当たらないこと、伴出遺物の年代観とも祖語はないことなどから第1段階の資料と判断できる。そのほかのC地区出土資料についても、捏鉢に第1段階以外の資料が見当たらないことを重視すれば、おおむね第1段階と見てよいだろう。

その他の地区についてもおおむね第1段階に属するもので、遅くとも第2段階までの時期に収まる可能性が高い。しかし、鏡東谷遺跡南地区出土の甕（第15図63・64）は焼成が不良で黒褐色を呈するもので、亀山遺跡埋甕2の甕と外見が酷似している。口縁部が残存していないため断定はできないが、同時期（岡田編年4段階、14世紀前半～中葉）の可能性が高い。

鏡遺跡群では、東播系須恵器、亀山焼のほかにも、産地不明の中世須恵器が各所で出土している。器種としては、埴、坏、甕、壺を確認することができるが、甕および甕または壺はいずれも小破片で、形状復元困難な状況である。壺も小破片が大半であり、おおむね形状は不明であるが、鏡東谷遺跡南地区では底径7cm程度の小型品が出土している。長頸壺の類と思われる。特色ある分布を示すのは埴、坏であり、鏡西谷遺跡C地区、同D地区、鏡東谷遺跡の3地区で出土している。鏡西谷遺跡D地区を中心とするが、口縁部破片が大半であり、それらについては現状では坏、埴を明確にするのは困難である。底部および底部～体部の破片が少量あり、埴および坏の形状をある程度推定できる。埴は底径5～6cm程度で、坏は底径8cm程度、口径は13～15cm程度と推定される。薄手であり、比較的小型と思われる。埴は断面三角形の貼り付け高台で、高台は低い。底部は緩やかに外方へ開いている。底面は回転糸切りである。坏は底面との境界は丸みを帯びており、比較的緩やかに外方へ開いている。底面はヘラ切りが認められる。焼成はおおむね良好であるが、軟質の個体が半数以上である。口縁部は形態A～Dの4種類が認められ、形態Cは埴に、そのほかは主として杯の可能性があり、埴、坏の割合については、先に述べたように、現状では詳細は不明であるが、鏡西谷遺跡D地区では明確に埴に分類できるものはなく、形態C

の口縁部は認められないことなどから坏を主体とする可能性がある。

鏡西谷遺跡 C 地区の埴、坏は S B 01 の一括資料に含まれるものであり、その他の遺物は基本的に一時期の様相を示している。鏡西谷遺跡 D 地区の坏、埴は厳密な意味で共伴する遺物はないが、分布域内および隣接部の遺構（D 地区北部遺構群）は C 地区 S B 01 にやや先行する編年的位置づけが想定でき（藤野・増田 2003、永田・藤野 2009）、北部遺構群と同時期もしくは隣接時期に位置づけられる可能性が高い。鏡西谷遺跡 C 地区 SB01 は 13 世紀前葉（初頭）を前後する時期と想定しているが、同時期および隣接時期では中・四国地方やその周辺において高台を有する須恵器の生産はほとんど行われていない。本遺跡が位置する西条盆地における中世初頭の様相はほとんど不明の状況であるが、C 地区 S B 01 に最も近い年代で、貼付高台で底部回転糸切りの須恵器埴の類例を求めると、小越窯跡（青山 1983）や旦原窯跡（伊藤 1983）を挙げることができる。小越窯跡は東広島市志和町大字冠にある中世初頭（平安時代後期か）に位置づけられる小規模な窯で、須恵器の埴・皿が生産されている。埴は回転糸徹底に、貼付高台を持つものが大半を占め、高台をもたないものや皿は少量である。旦原窯跡は東広島市八本松町大字宗吉字旦原に所在する中世初頭に位置づけられる窯跡で、須恵器の埴・皿・鉢が生産されている。埴・皿はいずれも回転糸徹底で、埴は貼付高台を持つ。S B 01 出土資料は、貼付高台、底部回転糸切という点で両遺跡と技術的共通点があるが、鏡西谷遺跡 C 地区 S B 01 例、鏡東谷遺跡例とも、小越・旦原遺跡に比較して口径・底径ともかなり小ぶりである。特に底径は、2 遺跡とも 7cm 前後のものが多いのに対し、本遺跡の資料は 5～6cm と小型である。器壁は薄作りで、体部から口縁部はかなり開き気味であり、高台が低いなど後出的特徴が顕著である。

高台のない平底の坏の類例はいくつかあるが、安芸地方及び隣接地域で見ると、安芸国分寺跡や三原市の熊ヶ迫第 1～3 号窯跡（今村・岡野 1996）などで坏 A と呼ばれている形態に近い。それらの中でも底径が小さめであることから、時期的にはどの程度の開きがあるかまったく不明であるが、熊ヶ迫第 3 号窯跡（10 世紀初頭）に後続する時期と想定される。

現状においては、埴、坏とも対比資料を欠くが、C 地区 S B 01 以外の資料も含めて 12 世紀～13 世紀前葉（初頭）頃の年代を想定しておきたい。

最後に、これまでの各遺跡における中世須恵器の分布状況と所属時期の分析に加えてその他の出土遺物の状況との関係から、各遺跡における中世須恵器の組成と所属時

期についてまとめたい。鏡遺跡群においてもっとも良好な組成を示すのは鏡西谷遺跡 C 地区 S B 01 出土の遺物群である。中世須恵器は、東播系須恵器捏鉢・甕、亀山焼捏鉢・甕、産地不明須恵器碗・坏が組成されている。東播系須恵器、亀山焼はほぼ同様の分布状況を示し、S B 01 北部から S D 01 にかけて位置する 2ヶ所の遺物集中域からそれぞれ出土している。器種ごとでも多少の分布のずれはあるものの、大きな変化は認められない。産地不明須恵器碗・杯は西側の集中部南半からのみ出土しており、若干の分布の違いが見られる。東播系須恵器は森田編年第Ⅱ期第 2 段階に、亀山焼は岡田編年第 1 段階に位置づけられるもので、東播系須恵器は 12 世紀後半～13 世紀初頭、亀山焼は 12 世紀末～13 世紀前半に比定され、同時期の所産として齟齬はない状況である。S B 01 の遺物群のうち、東播系須恵器、亀山焼以外の年代的指標となる遺物は、中国産青磁碗（同安窯系 I - 1 b 類・Ⅱ類、龍泉窯系 I - 1 b（横田・森田 1978））・皿（同安窯系 I - 2 b 類（横田・森田 1978））、瓦器碗・皿（和泉型Ⅲ - 2 期（尾上・森嶋・近江 1995））、石鍋（Ⅲ - a - 2（木戸 1995））などがあり、13 世紀初頭を前後する時期の中に位置づけられ、総合に調和的な組成を示している。鏡西谷遺跡 C 地区では S B 01 のほかにも、調査区西北部や調査区東南部にも中世須恵器が一定量分布している。調査区東南部は、東播系須恵器捏鉢・甕、亀山焼甕が分布している。S B 01 の南側隣接域であり、S B 01 と関連をもつ分布域と想定され、中世須恵器の内容も齟齬はない。調査区西北部は、東播系須恵器捏鉢・甕、亀山焼捏鉢・甕が分布する。東播系須恵器は捏鉢、亀山焼は甕が主体とすることや東播系須恵器捏鉢は口縁部形態 C が含まれていることなど、若干様相の違いもあるが、基本的には S B 01 とほぼ同様の内容であり、内容的には S B 01 とほぼ同時期と見て大過ないと思われる。しかし、調査区西北部では、中国産青磁碗（同安窯系、龍泉窯系 C - Ⅱ類（上田 1982））、雷文を有する白磁碗、備前焼播鉢（Ⅲ期前半（間壁 1991））などが出土しており、少なくとも 13 世紀初頭を前後する時期、13 世紀末～14 世紀前半、15 世紀（前半）の 3 時期が認められる（永田・藤野 2009）。中世須恵器は 13 世紀初頭を前後する時期に位置づけられるものであるが、一定の時間幅を見ておく必要もあろう。

鏡西谷遺跡 C 地区以外では遺構に直接関連する状況で出土しているものはないが、同 B 地区では S X 01 が位置する平坦面およびその南側を中心に出土しており、東播系須恵器捏鉢、亀山焼捏鉢・甕で構成されている。東播系須恵器捏鉢を除くと、いずれも亀山焼は体部や胴部破片で、詳細な時期は検討できる状況ではない。東播系須恵器捏鉢は森田編年第Ⅱ期第 2 段階に属すると見られる。この分布域からは中国産青

磁碗（龍泉窯系Ⅰ－２類）・皿（同安窯系）、白磁碗などが出土しており、C地区SB01とほぼ同時期の遺物群と判断でき、東播系須恵器の年代と調和的である。亀山焼についてもほぼ同時期の所産と見ても大過あるまい。調査区西南部でも東播系須恵器捏鉢が集中的に出土しているが、明らかに同一個体と思われる破片はほとんどない。口縁部を含んでおり、形態Dである。付近では、中国産青磁碗（龍泉窯系）、朝鮮産青灰釉陶器、瀬戸美濃系灰釉碗、備前焼播鉢などが散漫に出土しており、15世紀前後の陶磁器が出土しており、複数時期の遺物が混在していると思われる。いずれにしても、東播系須恵器捏鉢はこれらの陶磁器に先行するものと思われ、森田編年第Ⅱ期第2段階を中心に前後の時期のものを含んでいる可能性がある。

D地区は調査区北部で産地不明須恵器坏・碗が集中的に出土している。亀山焼甕の小破片が1点出土しており、やや軟質であるが、焼成は比較的良い。鏡遺跡群出土の亀山焼の所属時期や焼質、胎土などからすれば、岡田編年第1～2段階に位置づけられる可能性があるが、詳細は不明である。また、産地不明須恵器との共伴関係も明らかにできる状況ではない。産地不明須恵器坏・碗の位置づけについてはすでに詳述したので、改めて述べることはしないが、C地区SB01に先行する12世紀代に借定しておきたい。大半の資料は1号土壙墓SK05や竪穴遺構SB04の位置する丘陵平坦面の西側斜面を中心に出土しており、遺構との関連は不明である。

E地区では調査区北部中央付近を中心に、東播系須恵器捏鉢・甕、亀山焼甕が出土した。谷の堆積土を中心としており、隣接部からの廃棄もしくは流入と思われる。ほとんどが胴部および体部の小破片であり、口縁部、底部それぞれ1点が含まれている。東播系須恵器は森田編年第Ⅱ期第2段階、亀山焼は岡田編年第1段階を中心にしていられると思われるが、詳細な検討は困難である。E地区の北部中央～北部にかけては、中国産青磁碗（同安窯系、龍泉窯系Ⅰ－２・３・４類、B－Ⅰ'類）・皿（同安窯系）、備前焼播鉢（Ⅳ期初頭）などが出土しており、13世紀前葉（初頭）を前後する時期、14世紀後半～15世紀初頭を前後する時期の少なくとも2時期の遺物が混在している。東播系須恵器、亀山焼は前者の遺物群に含まれるものであろう。

鏡東谷遺跡では、北地区、南地区において、東播系須恵器捏鉢・甕、亀山焼甕、産地不明須恵器碗・壺などが調査区の広範囲から散漫に出土している。分布や時期の特徴を指摘できる状況にはないが、同遺跡で検出された遺構は15～16世紀前葉を主体とする時期であることからすると、これらの遺構に先行して13～14世紀にも何らかの活動が行われていたことを推測させる。また、鏡地区第7地点をはじめとする、鏡

地区第1地点、同第5地点、同第6地点（広島県教育委員会予備調査区）においても少量ながら東播系須恵器、亀山焼、産地不明須恵器が出土している。時期の検討できる資料は多くはないが、山麓裾の丘陵平坦部や鏡西谷遺跡、鏡東谷遺跡に連続する丘陵平坦部からの出土があり、何らかの遺構が存在した可能性が高い。また、鏡千人塚遺跡では1号積石塚から岡田編年第1段階に位置づけられる亀山焼甕が出土している。こうした状況を重視すれば、鏡西谷遺跡を中心としながら、鏡山南麓の広範囲にわたって13世紀以降の活動が展開されたことを予想させる。

4. 安芸地方における中世須恵器と遺跡の様相

これまで広島大学東広島キャンパスの鏡遺跡群における中世須恵器の様相について縷々述べてきたが、ここで視点を安芸地方に広げて中世前期における中世須恵器の様相について概観してみたい。

1) 安芸地方における中世須恵器研究抄史

安芸地方（広島県西部）では、中世遺跡の発掘調査は1970年前後から少しずつ進められてきており、現在では相当量の資料が蓄積されている。しかし、中世前期に位置づけられる良好な遺跡が少なく、研究の基礎となる土師質土器の編年研究も確立していないのが現状である。しかし、そうした中でも、1980年代以前から大規模な開発が進行している広島湾沿岸地域⁽⁷⁾や1980年以降、急速かつ大規模な開発が進行中の西条盆地地域⁽⁸⁾などでは、中世前期を中心とする、あるいは中世前期を含む遺跡の発掘調査は一定量行われており、資料蓄積もある程度進んできた。広島湾岸地域では旧国府域の遺跡や山陽道沿いの公的性格の強い遺跡、寺院関連遺跡を中心として、太田川放水路遺跡など流通拠点と思われる遺跡を一部に含んでいる。西条盆地では安芸国分寺やその周辺地域の遺跡を主体としており、溝口4号遺跡など荘園と関連する可能性のある遺跡を含んでいる。

今回分析対象とした中世須恵器のうち、亀山焼は山陽自動車道建設に伴って1985年に発掘調査が実施されたが、それ以前から存在が知られていた（伊藤1987）。格子タタキ目という特徴ある調整痕であることから安芸地域でも比較的古い時期から認識されていたようである。東播系須恵器は1979年に神出・魚住窯跡が発掘調査され、刊行された各報告書（大村・水口1983、寺島編1985、池田編1985）によって東播系須恵器の詳細が知られるようになった。福山市草戸千軒町遺跡などでは1980年代前半から東播系須恵器が認識されており、その後東播系須恵器が西日本一帯に広く流通

しているものであることが明らかとなっていった。しかし、安芸地方の調査研究では東播系須恵器に対する認識は必ずしも深まらず、1990年代に入ってようやく東播系（須恵器）という記載が散見し始め、次第に認識が広まっていった。それを反映するように、2000年以降になると報告書における東播系須恵器の出土記載や資料掲載が行われる遺跡数も増加し、広範囲に分布していることが知られるようになった。こうした状況から、中世須恵器に関する研究はきわめて少なく、篠原芳秀と花本哲志の論攷を挙げることができるにすぎない。篠原は草戸千軒町遺跡の遺構から出土した亀山焼甕を、遺構の時期を検討した上で、器形・成形などの変化を明らかにし、編年を提示した（篠原1987）。亀山焼甕は草戸Ⅱ期後半（14世紀中～後半）に外面にタテハケ目、内面にヨコハケ目が施されるようになり、時期が下るほど格子タタキ目とハケ目は大きく粗いものになっていくとしている。花本は、まず亀山焼の編年研究をまとめ、その上で広島県内出土の亀山焼（論文では亀山焼系と呼称している）を、草戸千軒町遺跡の編年に沿う形で位置づけた（花本2000）。

一方、東播系須恵器に関しては、広島県、あるいは安芸地方を対象とした論攷は見出すことができない。広範囲の資料を対象とする論攷の中に、本地方の個別的に出土遺跡を取り上げているものが散見される程度である。安芸地方を主眼としたものではないが、森田稔の論攷が最も関連するものと言える。森田は1986年までの報告書掲載の東播系須恵器および西日本各地の東播系須恵器が出土した遺跡を集成し、編年を行った（森田1987）。広島県については、草戸千軒町遺跡、尾道遺跡など備後の港湾遺跡のほか、東広島市鏡西谷遺跡、道照遺跡など安芸地方の遺跡も掲載されている。編年では、3期6段階に区分した（森田1995では、これに第Ⅲ期第3段階・第4段階を加え、年代を訂正している）。森田によれば、第Ⅰ・Ⅱ期では遺跡数も多くなく、量も少ない（平安京・大宰府などでは多数出土している）。また、九州では経筒外容器など特殊な用途として遠隔地で出土している例がある（吉岡1994）。第Ⅲ期になると出土遺跡数・出土量ともに増加し、中・四国地方でも瀬戸内地域だけではなく日本海・太平洋側での出土が見られるようになる。九州も北部九州のみならず、鹿児島県にまで分布するなど西日本一帯に広範囲にみられるようになる。このように出土遺跡・出土量が急増するのは第Ⅱ期第2段階（12世紀末葉～13世紀初頭）としている。供給された製品は片口鉢が圧倒的に多く、これは片口鉢を使用する「京風」の調理形態が、「源平内乱」という広範囲の人々の移動とともに各地に定着したと想定している。また、広範囲への供給は問丸・土倉などの商業資本や運輸体制の整備も不可欠な条件

であり、これらが確立された段階とも考えられている。草戸千軒町遺跡、尾道遺跡は主に第Ⅲ期第2段階に位置づけられているが、鏡西谷遺跡、道照遺跡についてはとくに時期は触れていない。

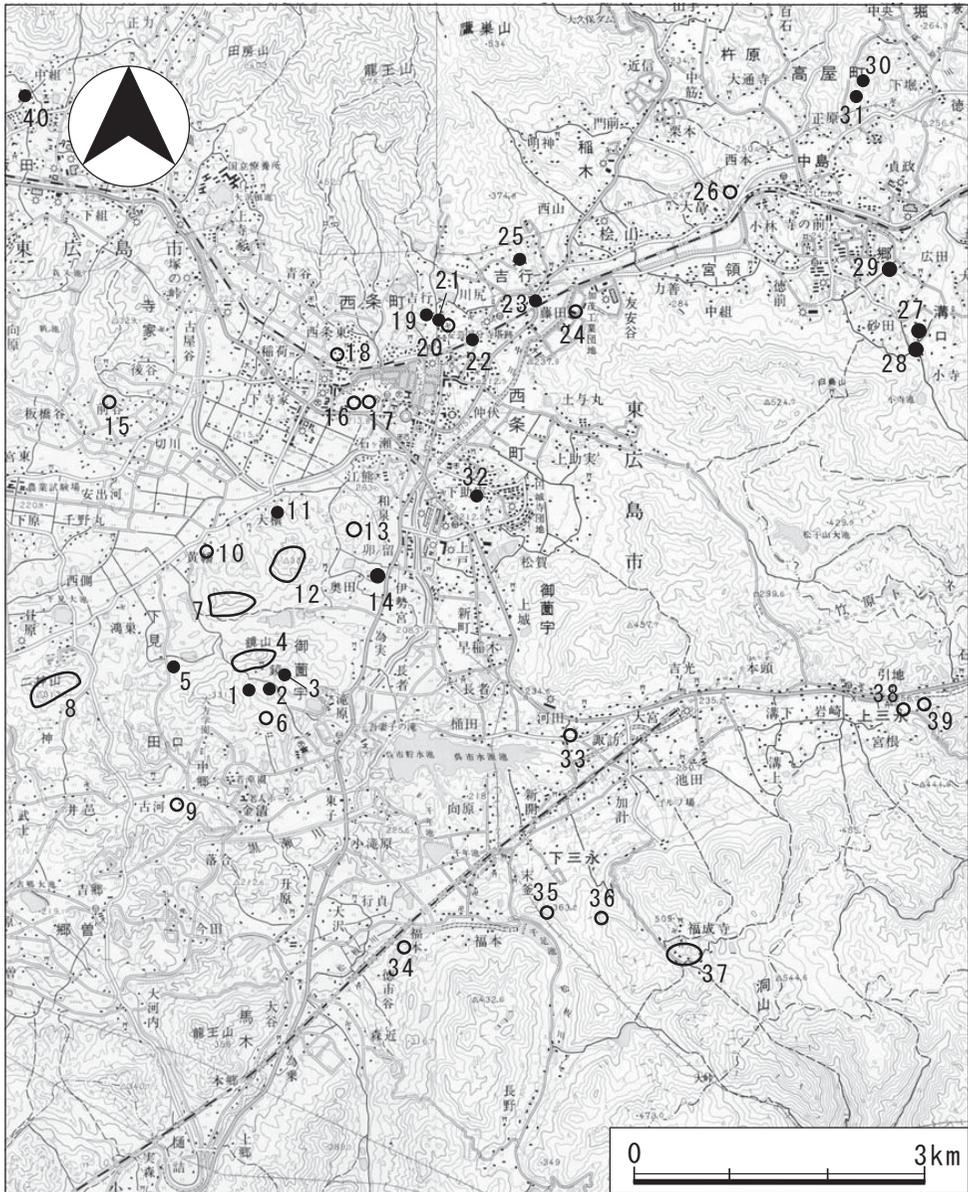
2) 西条盆地の中世須恵器

今回、安芸地域の中世須恵器を収集するにあたって、新たに多くの遺跡で東播系須恵器を確認した。また、亀山焼についても近年資料数の増加を見ている。ここでは、中世須恵器出土遺跡の様相を鏡遺跡群が所在する西条盆地について遺跡単位に検討してみたい。

現在、安芸地方では中世須恵器出土遺跡として46遺跡を確認することができる(第3・4表)。そのうち、中世前期に位置づけられる遺跡は多くなく、ほとんどが中世後期(室町時代)の遺跡である。中世須恵器を出土する遺跡は、西条盆地と太田川下流域を中心とした広島湾岸地域、安芸と備後の境界に位置する沼田川下流域・竹原地域、安芸の北東部に位置する芸北地域に分布している。

さて、本題の西条盆地であるが、現在29遺跡を確認することができる(第3表)。鏡西谷遺跡以外では、道照遺跡で東播系須恵器および亀山焼ともに100点以上が出土しているが、大半の遺跡では10点以下の出土である⁽⁹⁾。

道照遺跡(東広島市西条町大字御菌宇) 標高337mの八幡山から東に延びる丘陵先端に立地し、集落跡と西側に接して存在する館跡からなる。道照館跡は1981年に調査が行われている(松村編1981)。館跡は平面台形状を呈し、東辺約75m、西辺約25m、南辺約105m、北辺約125mの規模で、土塁と平坦地が残る。出土遺物から室町中期以前には成立していたと考えられるが、詳細は不明である。集落跡については、1982年に広島県教育委員会(鍛冶編1982)、1993年に東広島市教育委員会(藤岡1993)が調査を行っている。広島県調査区では、掘立柱建物跡12棟、鍛冶場跡2棟、井戸5基、堀、多数のピットが検出された。出土遺物は、青磁碗・皿、白磁碗、瓦器碗・皿、土師質土器坏・皿、備前焼甕・播鉢とともに、東播系捏鉢・甕、亀山焼甕が出土している。陶磁器は青磁碗Ⅰ-Ⅴ類(横田・森田1978、以下同様)が主体である。東広島市調査区では溝状遺構3条、土坑6基が検出された。白磁碗、瓦器碗・皿、土師質土器坏・皿、東播系須恵器などが出土しており、主体は白磁碗Ⅳ-Ⅵ類(横田・森田1978、以下同様)である。出土陶磁器の様相から、両調査区では遺構形成時期に差があるようである。広島県調査区からは東播系須恵器捏鉢126点、東播系須恵器甕9点、亀山焼甕107点、産地不明須恵器碗・皿が出土している。遺構に伴うものは、



第22図 西条盆地の中世遺跡と中世須恵器出土遺跡分布図

(●は中世須恵器出土遺跡、○はその他の中世遺跡である。国土地理院 1:50,000 地形図「海田」(1984年発行)、「竹原」(1985年発行)の一部を利用した。)

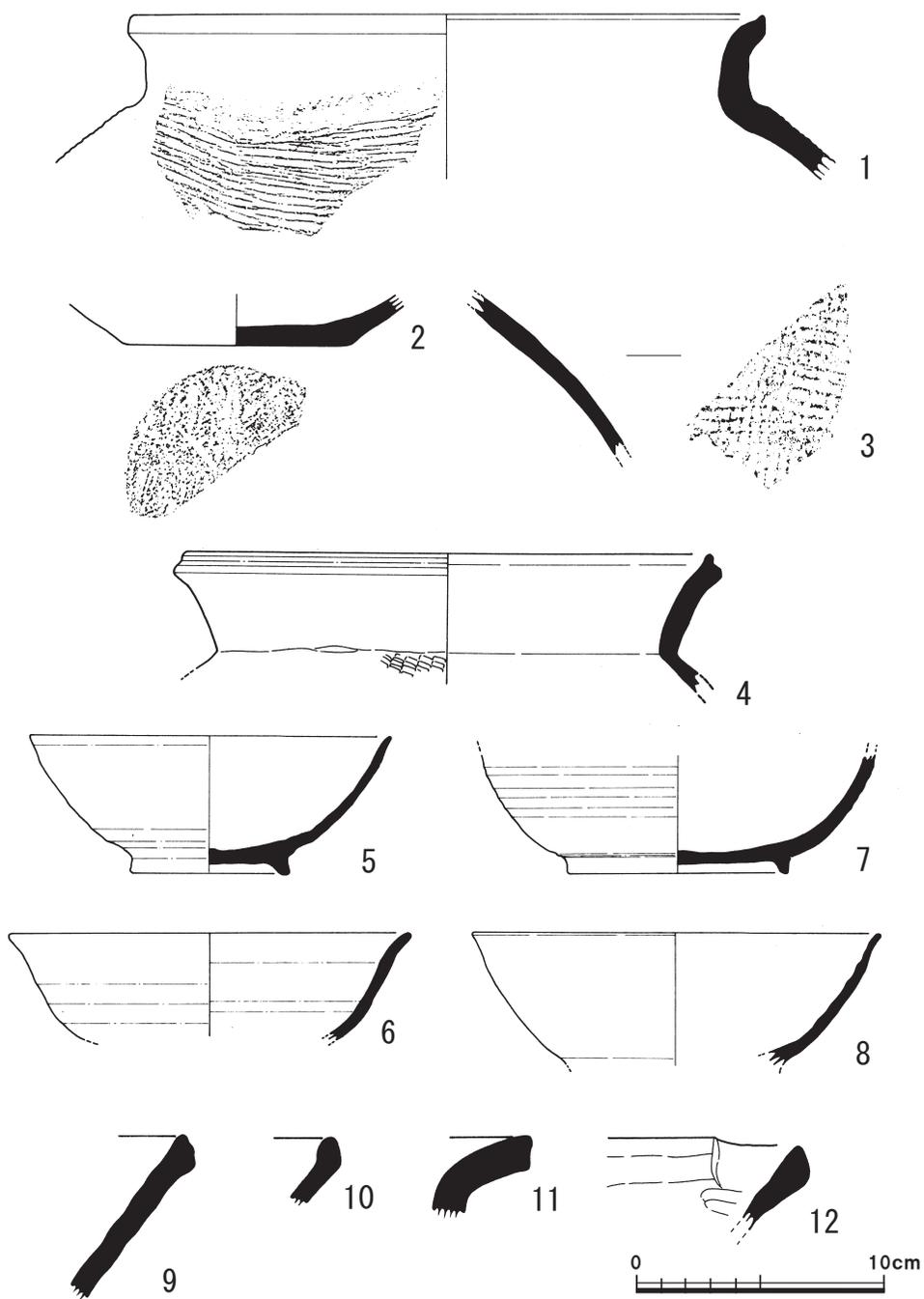
1. 鏡西谷遺跡 2. 鏡東谷遺跡 3. 鏡千人塚遺跡 4. 鏡山城跡 5. 山中池南遺跡第1・2地点 6. 清水奥山遺跡 7. 陣ヶ平山城跡 8. 二神山城跡 9. 西中郷遺跡 10. 黄幡1号遺跡 11. 大楨1号遺跡 12. 八幡山城跡 13. 狐ヶ城遺跡 14. 道照遺跡 15. 寺家城跡 16. 山崎1号遺跡 17. 山崎2号遺跡 18. 諏訪面遺跡 19. 大地面遺跡 20. 安芸国分寺跡 21. 安芸国分寺周辺遺跡 22. 安芸国分尼寺伝承地遺跡 23. 鷺田遺跡 24. 向城跡 25. 石佛遺跡 26. 古慈喜城跡 27. 溝口4号遺跡 28. 溝口1号遺跡 29. 別所古墓群 30. 浄福寺2号遺跡 31. 浄福寺3号遺跡 32. 下上戸遺跡 33. 五反田遺跡 34. 城平山城跡 35. 第1若山城跡 36. 第2若山城跡 37. 福成寺旧境内遺跡 38. 荒谷土居屋敷跡 39. 上弘遺跡 40. 城仏土居屋敷跡

S B 10 出土の亀山焼甕 1 点 (第 23 図 3)、土壘出土の亀山焼甕 1 点 (第 23 図 4) があり、後者は岡田編年第 2 段階に位置づけられる。S B 10 からは和泉型瓦器塚 (Ⅲ - 2 期 (尾上・森島・近江 1995) か、以下同様)、中国産白磁碗が出土している。東播系須恵器の捏鉢は口縁端部をあまり拡張しないものから、上下に大きく拡張するものまで見られ、東播系 I 期～Ⅲ期までの各時期の資料を確認することができる。亀山焼は大半が胴部の破片で、時期は判然としないが、須恵質のものから瓦質のもの、内面の調整がナデ調整やハケ目調整のものなど、様々な個体が見られることから、亀山焼も東播系須恵器と同様に各時期のものが搬入されている可能性が高い。産地不明須恵器塚 (第 23 図 5～8) は口径 15～20cm、器高 6～8cm 程度の法量であり、やや大型である。体部は外側へ開き気味であり、口縁端部は緩やかに外反している。底部は貼付高台で、高台は高くしっかりしている。形態などから、東広島市小越窯跡、同旦原窯跡と同時期、同系統 (以下、小越・旦原系と仮称する) のものである可能性が高い。

東広島市調査区では S D 002 より東播系須恵器甕および東播系須恵器捏鉢と思われる底部が出土している (第 23 図 1・2)。胎土が灰色の備前焼も出土しており、中世前期段階から備前焼が搬入されているようである。また、須恵器の皿が 2 点確認され、胎土や焼成から見て東播系須恵器の皿の可能性もある。東広島市調査区では、溝状遺構 (S D 002) から東播系須恵器甕が出土している。この甕は口縁端部を上方にわずかに拡張するもので、水口分類甕 A 類に相当すると思われる。東広島市調査区出土資料については、現状では全資料を実見していないが、中世須恵器は相当数存在するものと思われる。

鷺田遺跡 (東広島市西条町大字土与丸) 鷺田遺跡は安芸国分寺の西方約 200 m に位置する。1979 年の安芸国分尼寺伝承地にかかる第 3 次調査の際に遺構・遺物が確認された地区の一つで、1986 年に本調査がなされた (沢元 1989)。古代～中世前期を主体の一つとする遺跡で、古代～中世前期にかけてある程度継続的に遺構が形成されたと推定される。中世では掘立柱建物跡 12 棟、井戸状遺構 2 基以上、土坑など多数の遺構が検出されている。中世須恵器は、東播系捏鉢 24 点、東播系甕 14 点、亀山焼甕 57 点を確認している。東播系須恵器は森田編年 I～Ⅱ期に位置づけられるものである。出土遺物には、同安窯系青磁、龍泉窯系青磁碗 I 類、白磁Ⅳ類、瓦器碗 (Ⅲ - 2 期) などが出土しており、12 世紀後半～13 世紀前葉を中心とするものと思われる。

安芸国分尼寺伝承地遺跡 (東広島市西条町吉行) 安芸国分尼寺跡の所在地を確認



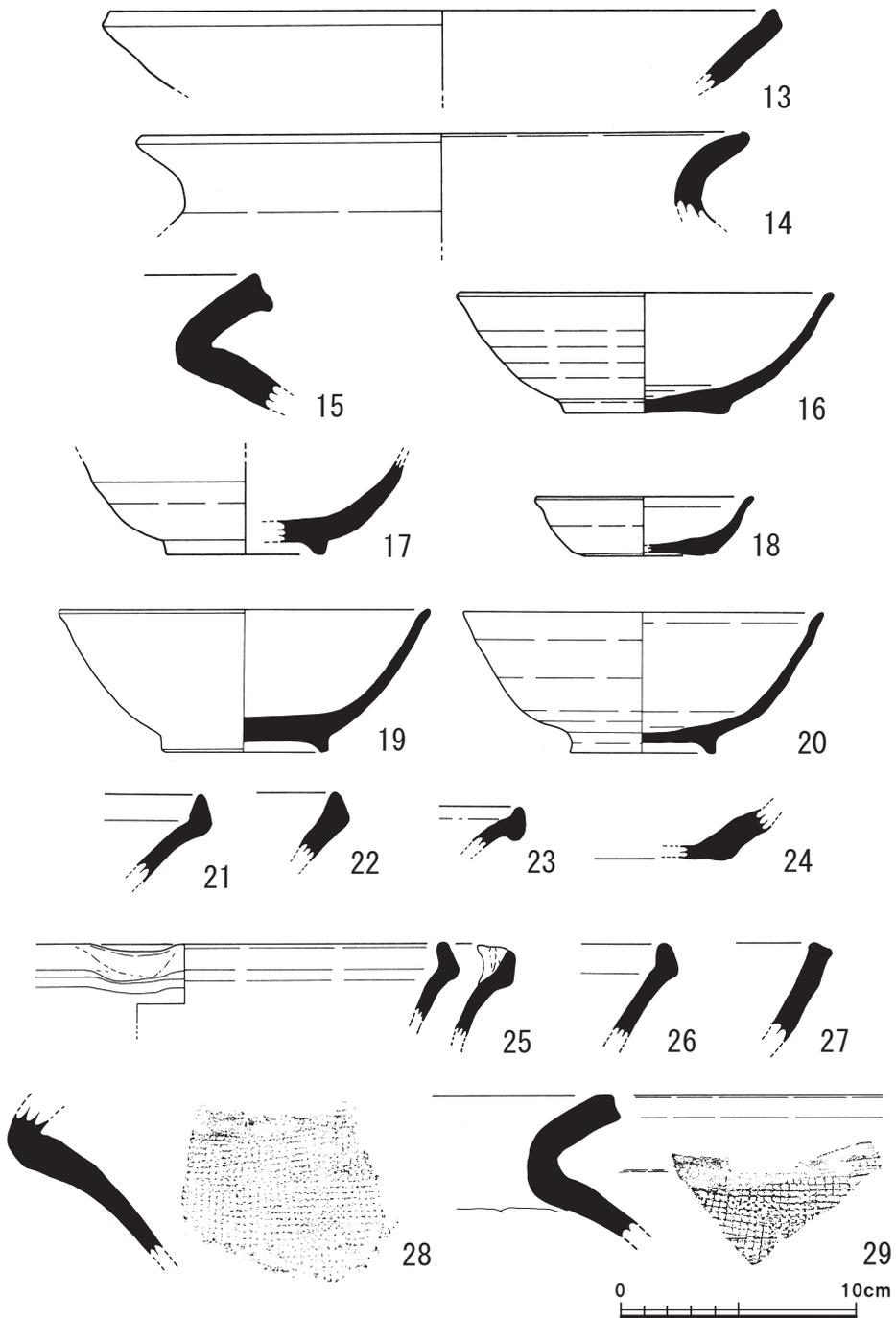
第 23 図 西条盆地地域出土の中世須恵器 (1)

1～8：道照遺跡 9～11：安芸国分尼寺伝承地遺跡 12：安芸国分寺周辺遺跡

するため、1977年～1980年に安芸国分寺跡の東方約200mに位置する安芸国分尼寺伝承地一帯が調査された(是光編1978、松村編1979、松村編1980)。第2次調査地区(納力地区)は安芸国分寺の西側に隣接し、安芸国分尼寺跡に関連する遺構などは検出されなかったが、調査区北側では中世の遺物が広い範囲で出土した。龍泉窯系青磁碗Ⅰ-Ⅱ類、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類、Ⅲ期の和泉型瓦器塚などとともに、中世須恵器が出土しており、東播系捏鉢、亀山焼甕を確認できる。東播系捏鉢(第23図9・10)は須恵質土器、瓦質土器の鉢として報告されているもので、森田編年Ⅱ-1～2期と思われる。亀山焼甕(第23図11)は口縁部端面がわずかに窪み、器形は不明であるが、岡田編年第1段階～第2段階のものと思われる。

安芸国分寺周辺遺跡(東広島市西条町吉行) 安芸国分寺周辺遺跡は、史跡安芸国分寺の周囲約700mの範囲に広がる遺跡で、古代の関連遺構が存在している。このうち、史跡安芸国分寺西隣に位置する地域が、2006年～2008年に吉行泉線街路整備事業に伴って継続的に発掘調査が実施された(植田ほか2009)。中世の遺構としてはSR1があり、人工的な流路と考えられている。SR1内からは土師質土器などともに東播系須恵器1点(第23図12)が出土している。包含層からの出土であり、森田編年Ⅱ期に属するものと思われる。SR1では土師質土器の坏がまとまって出土しており、およそ13世紀～14世紀にかけての遺構と考えられている。

大地面遺跡 大地面遺跡は安芸国分寺跡の北西500mに位置する。中世の井戸状遺構2基、テラス状遺構(SX5)、土坑、通路状遺構などが検出されている(吉野編2008)。中世の建物跡などは未検出のため遺構の性格は明らかではないが、屋敷地の一部であった可能性が高いと考えられている。同安窯系青磁碗や500点を超える瓦器(和泉型、Ⅲ-2期を中心とする)などとともに、中世須恵器が出土している。中世須恵器は、東播系捏鉢11点、東播系甕4点、亀山焼甕5点、産地不明須恵器塚・皿坏が確認できたが、遺構に伴うものはない。また、亀山焼甕の可能性のある瓦質の甕も出土している。東播系須恵器捏鉢(第24図13)は、森田編年第Ⅱ期1・2段階に属するものが認められる。第24図14は東播系と思われる甕の口縁部である。瓦質であるが、水口分類の甕A類に該当するものと考えられる。亀山焼甕(第24図15)は口頸部が「く」の字状に大きく屈曲しており、岡田編年第3段階に属するものと考えられる。産地不明須恵器塚(第24図16・17)は口径16cm前後、器高5cm程度の法量で、平高台気味のもの(16)と貼付高台(17)がある。道照遺跡例に比べてやや小振りで、体部が直線的な印象を受ける。皿は口径10cm程度で、深さが深い。小越窯跡、



第24図 西条盆地地域出土の中世須恵器(2)

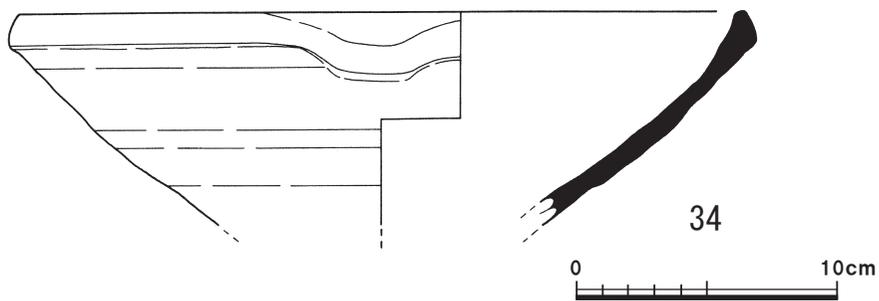
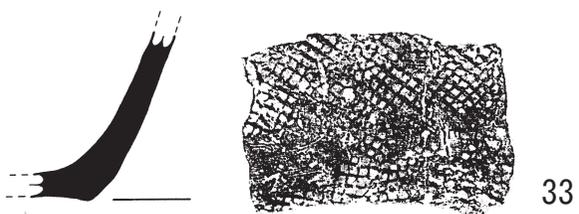
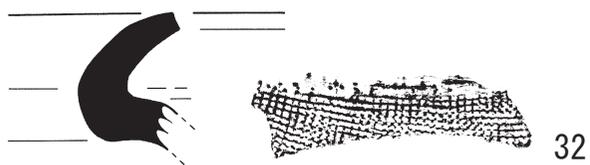
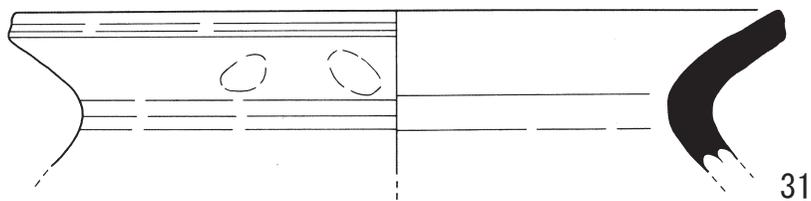
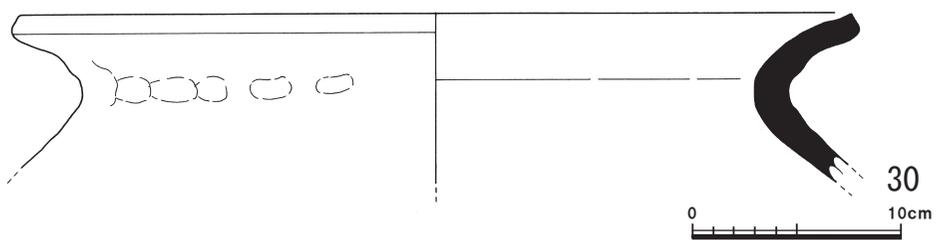
13～18：大地面遺跡 19～24：下上戸遺跡 25～28：小谷黄幡遺跡 29：溝口1号遺跡

且原窯跡の系譜に連なる可能性があるが、法量がやや小さく、体部のカーブがやや直線的であり、時期差をもつものかもしれない。

下上戸遺跡（東広島市西条町御菌宇） 標高約 250 m の円城寺山山頂から北西に緩やかに下った標高 220 ～ 227 m の丘陵鞍部付近を中心に、南北の谷部に立地している。1993 年度（吉野 1996）と 1999 年度（吉野 2000）に発掘調査が行われ、両調査区で室町期を中心とする中世の遺構・遺物が確認されている。1999 年度調査区では、掘立柱建物跡、井戸跡、池状遺構など屋敷を構成する遺構が検出されている。中世前期の遺構は明確でなく、須恵器も遺構に伴うものはない。中世須恵器は、1993 年度調査区で産地不明須恵器壺（第 24 図 19・20）、1999 年度調査区では東播系須恵器捏鉢 4 点（第 24 図 21 ～ 24）が、白磁碗Ⅳ類、瓦器壺（和泉型Ⅲ - 2・3 期）などとともに出土している。産地不明須恵器壺は口径 15・16cm 程度で、内湾気味の深い体部をもち、底部は比較的高い貼付高台である。小越・且原系統と思われ、高台などはさらに古い時期の様相を示している。東播系須恵器捏鉢は森田編年第Ⅱ期～第Ⅲ期第 1 段階におさまるものである。12 世紀後半～13 世紀前半にかけての活動痕跡を窺うことができる。

小谷黄幡遺跡（東広島市高屋町大字小谷） 東西に連なる標高 450 m ～ 520 m の山塊から北に延びる丘陵地帯に位置し、谷に面した丘陵斜面に立地する。1987 年に山陽自動車道建設に伴って発掘調査が行われた（鍛治 1992）。古墳時代～近世の遺跡で、遺跡西側の A・B 調査区において中世の平坦面、溝、土坑などが検出されているが、遺跡の性格については詳細に語る事ができる状況ではない。中世須恵器はいずれも調査区西端部の A 調査区から出土した。S D 9 から森田編年第Ⅱ期第 2 段階～第Ⅲ期第 1 段階の東播系須恵器捏鉢 2 点（第 24 図 25・26）、産地不明須恵器捏鉢（第 24 図 27）、亀山焼甕（第 24 図 28）が出土している。産地不明の捏鉢は口縁部が肥厚せず、断面方形状を呈する。口縁端部が肥厚せず、口頸部が「く」の字状に屈曲するものなど、岡田編年第 1 段階のものを含んでいる。このほか、S D 2・3、包含層から亀山焼甕が出土している。S D 2・9 は近世に使用されていたと考えられる溝であり、中世須恵器は近世陶磁器や古墳時代須恵器などとともに出土している。

溝口 1 号遺跡（東広島市高屋町大字溝口） 白鳥山の東側を北流する溝口川の右岸、標高 237 ～ 241 m の丘陵縁辺部に立地している。山陽自動車道建設に伴って 1989 年に発掘調査された（藤原 1994）。検出された遺構・遺物は近世～近現代のものであるが、中世須恵器として包含層から亀山焼甕 1 点（第 24 図 29）出土している。口縁端部は



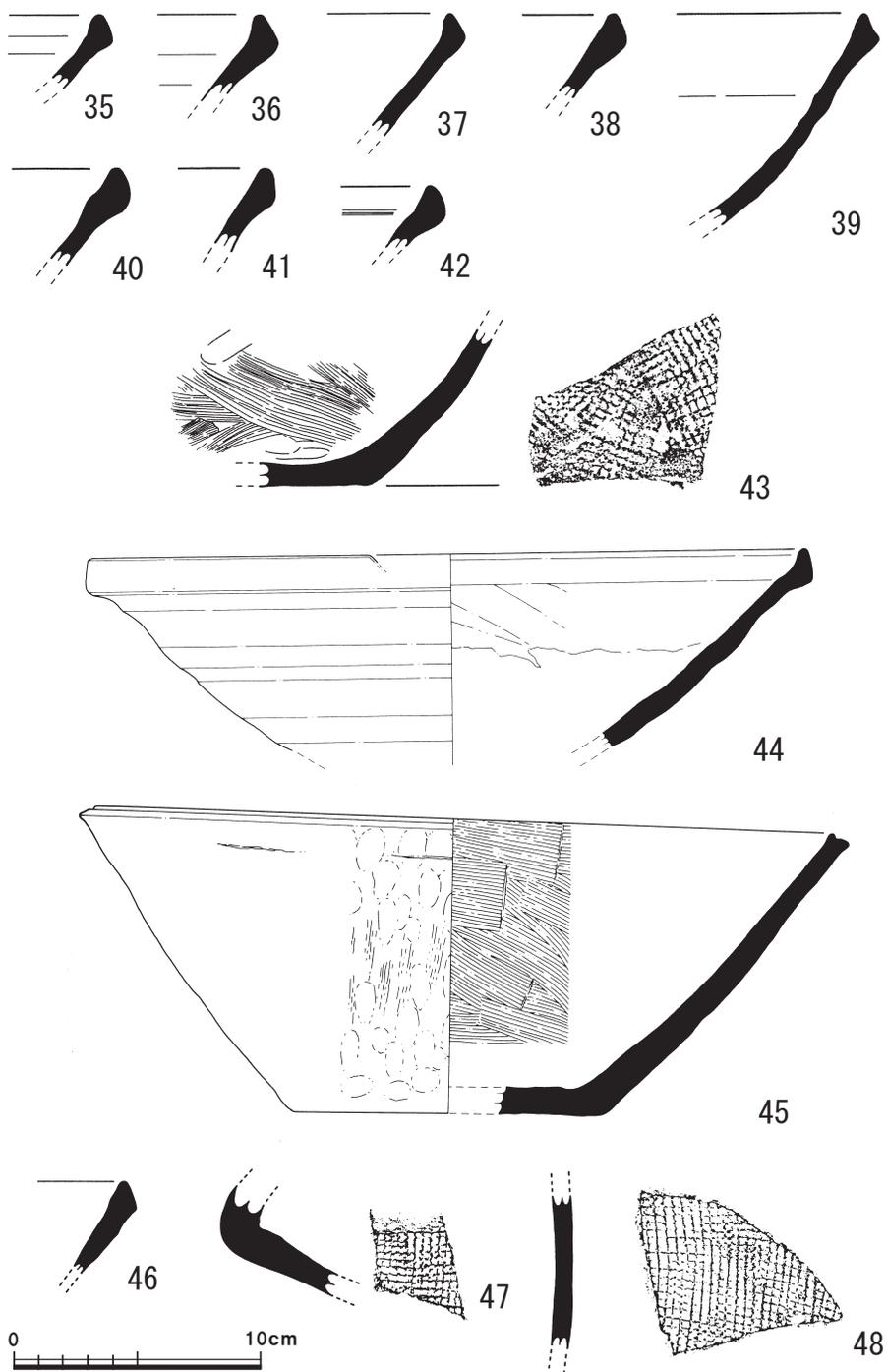
第 25 図 西条盆地地域出土の中世須恵器 (3)

30 ~ 34 : 溝口 4 号遺跡

肥厚しないが、口頸部は「く」の字状に大きく屈し、口縁端部を強くヨコナデ調整している。岡田編年第3段階のものと思われる。

溝口4号遺跡（東広島市高屋町大字溝口） 白鳥山の北側に広がる扇状地の扇尖部に位置し、溝口川の右岸、標高230 m前後の埋没丘陵に立地している。東広島県道路インターチェンジ建設に伴って2007年～2008年に発掘調査が行われた（吉野2010）。鎌倉～室町時代にかけての遺跡であり、中世前期（13世紀後半～14世紀前半）と中世後期（14世紀後半～15世紀半ば）の大きく2時期の遺構群が確認されている。中世前期の遺構群は調査区中央～南半部を中心に営まれ、幅7～10 m、深さ2～3 m、総延長120 mに及ぶNo.1001大溝（堀）が方形に廻らされ、堀内では掘立柱建物跡2棟、屋敷地区画溝、水路などが南北に貫く道路跡を中心に整然と配置された状態で検出されている。堀が土石流で埋没した後、調査区北側の低地部を中心に中世後期の遺構群が形成されており、屋敷跡、庭園と思われる池跡などが検出されている。大溝からは龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5類、瓦器塀（和泉型Ⅲ-2期）、土師質土器皿・坏・鍋などとともに中世須恵器が出土している。中世須恵器は、東播系須恵器捏鉢1点（第25図34）、亀山焼甕4点（第25図30～33）である。東播系須恵器捏鉢は、口縁端部を上方に拡張しており、わずかに内湾気味の体部を有する。森田編年第Ⅱ期第2段階のものと思われる。亀山焼甕は口頸部3点（30～32）、底部1点（33）である。口頸部は口縁端部を肥厚させるものではなく、口縁端を平坦におさめており、上部にわずかに拡張するもの（30）、先細りのもの（32）がある。30・31は比較的薄手で、32はやや厚い。口頸部は「く」の字状に屈曲し、とくに32は屈曲度が大きい。底部はわずかに上げ底状を呈する平底で、全面に格子タタキ目をよく残している。岡田編年第2～第3段階に位置づけられるものであろう。また、このほかにも複数の遺構の埋土中から中世須恵器が出土している。森田編年第Ⅱ期第2段階を中心とする東播系須恵器捏鉢（第26図35～42）が多数出土しており、亀山焼底部（第26図43）なども認められる。遺跡全体としては、東播系捏鉢38点、亀山焼甕58点、亀山焼鉢1点の中世須恵器を確認した。

大槓1号遺跡（東広島市西条町大字下見字大槓） 八幡山北麓の谷部に位置している。中世～近代にかけての遺跡で、中世では掘立柱建物跡3棟、土坑2基、池状遺構ほか、多数のピットを検出した。龍泉窯系青磁碗（Ⅰ類）、同安窯系青磁皿、中国産白磁碗（Ⅴ類）、褐釉壺などとともに、中世須恵器が出土した。中世須恵器は、遺構に伴うものとしては柱穴（P1）内から土師質土器鍋とともに東播系須恵器捏鉢（第



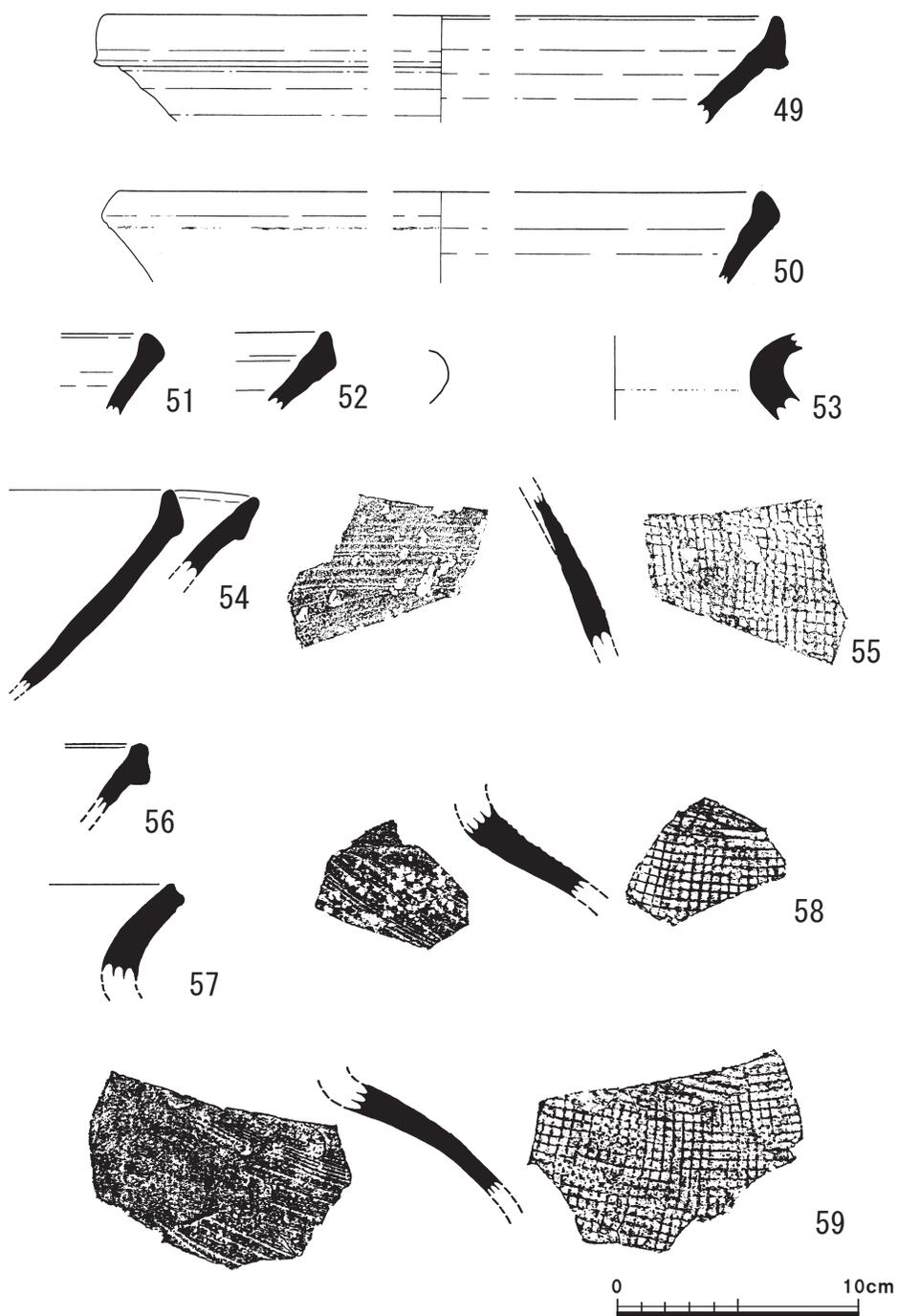
第26図 西条盆地地域出土の中世須恵器(4)

35～43：溝口4号遺跡 44・45：大槓1号遺跡 46～48：城仏土居屋敷跡

26 図 44) が出土している。44 は底部以外のほぼ全形を窺うことのできるもので、口縁端部が屈曲し、上方へ拡張が明瞭である。口縁端部は直立気味で、外面にはかなり明瞭な稜線部が形成されている。体部内湾気味外方へ大きく開いており、底径は小さいものと思われる。森田編年第三期第 1 段階に位置づけられるものであろう。このほか、包含層から森田編年第二期第 2 段階の東播系捏鉢、産地不明須恵器鉢が出土している(第 26 図 45)。産地不明捏鉢は全形を窺える資料で、わずかに内湾気味であるが、底部～口縁部は直線的であり、器壁は口縁部に向かって先細り気味である。口縁部が断面形状で、端部がナデ調整によって凹線文状に大きく窪んでいる。胎土に砂粒を多く含んでいるが、内面は使用によってよく磨滅しており、捏鉢として使用したものと考えられる。東播系須恵器や中国産陶磁器などとともに 12 世紀後半～13 世紀(前半)に位置づけられる。

城仏土居屋敷跡(東広島市八本松町飯田) 2003 年に道路改良工事に伴って発掘調査が行われ、居館の一部と思われる遺構群が検出されている(恵谷・唐津 2005)。調査前は主に水田として利用され、遺跡北側には幅 40～50 m の土塁とみられる高まりが現存している。調査の結果、15 世紀後半(I 期)および 15 世紀後半頃～16 世紀代(II 期)の 2 時期の遺構面が検出されている。I 期の遺構には、掘立柱建物跡 8 棟、土坑 1 基、溝 5 条、堀、杭列などがあり、中国産青磁碗(Ⅲ類・B II 類・C II 類・D 類)、白磁皿(D 群、森田 1982、以下同様)、備前焼(Ⅳ期前半)などが出土しており、中世須恵器がわずかに出土している。中世須恵器は、東播系須恵器捏鉢、亀山焼甕片である。東播系須恵器捏鉢(第 46 図 46)は口縁端部を肥厚させ、上方へ拡張するものであり、森田編年第二期第 2 段階に位置づけられる。II 期の遺構には、掘立柱建物跡 5 棟、土坑 4 基、溝 3 条のほか、段状遺構や土塁、石垣、堀などがあり、中国産青磁碗(C II 類、D 類)・青花皿、備前焼(Ⅳ期前半)などとともに亀山焼甕(第 26 図 47・48)がわずかに出土している。亀山焼の時期は不明であるが、青灰色で比較的焼の良い破片もあり、13 世紀代に相当する可能性もある。鎌倉期には遺跡の利用が始まっていたと考えられる。

中屋遺跡 A 地点(東広島市豊栄町大字安宿) 標高 562 m 観音平山北東山麓裾の標高 365 m～375 m 付近の緩斜面に立地し、前面には沖積地が広がっている。1991 年～1992 年にかけて、豊栄町教育委員会によって試掘調査が行われ、A～C の 3 地点が確認された。A 地点は 1993 年に発掘調査が行われ、中世頃と思われる掘立柱建物跡 13 棟と多数の柱穴、溝状遺構などが検出された(植田 1995)。集落の南を北東か



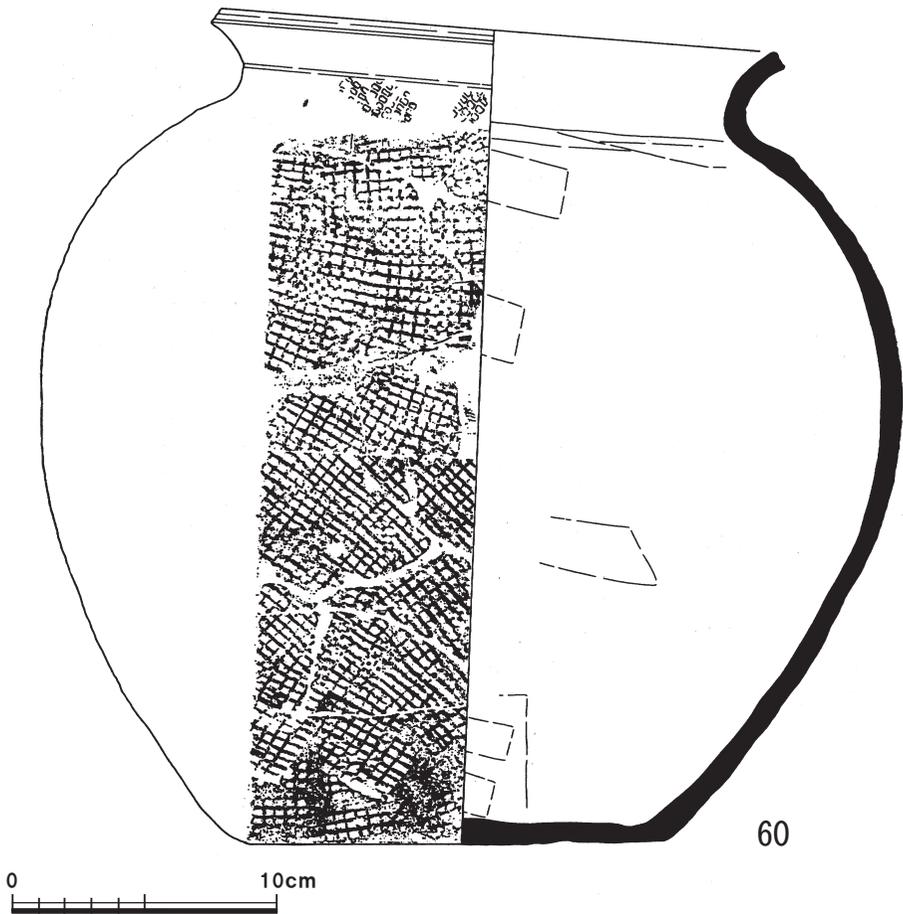
第 27 図 西条盆地地域出土の中世須恵器 (5)

49～53：中屋遺跡 B 地点 54・55：別所古墓群 56～59：福原城跡

ら南西方向に走る溝状遺構（SD1）で輸入陶磁器類、国産陶磁器とともに、亀山焼甕が出土しているが、詳細は不明である。

中屋遺跡B地点（東広島市豊栄町大字安宿）A地点の西南に位置する。1993～1996年に発掘調査が行われ、弥生時代を主体に多数の遺構・遺物が検出された（三枝1999）。中世の遺構としては、掘立柱建物跡、土坑、溝、備前焼埋甕土坑、平坦面（SX2）などが検出されている。SX2は斜面上方を削平して平坦面を造成しているが、削平面は壊されており、現状で南北26m、東西8mの規模である。多数の柱穴の存在から、北東－南西方向の建物が推定されるが、大きく削平されているため復元は困難である。埋甕遺構はSX2に伴うものと捉えられている。また、掘立柱建物跡および土坑などは溝（SD1）に区画され、遺構群を形成している。本遺跡は、立地や規模から名主ないしは国人衆クラスの屋敷等に関連するものと思われ、遺構の年代は14世紀後半頃と想定されている。中国産青磁碗（BⅡ類、D類）、中国産白磁碗、中国産天目碗、褐釉壺、土師質土器などとともに中世須恵器が出土しているが、遺構の伴うものは少ない。遺構に伴うものとしては、SD1から土師質土器皿とともに東播系須恵器捏鉢（第27図52）、瓦質壺（第27図53）が出土している。東播系須恵器捏鉢は口縁端部が肥厚し、上方に拡張している。森田編年第Ⅱ期第2段階のものであろう。瓦質壺は頸部のみであるが、焼成・胎土から亀山焼甕の可能性もある。また、包含層中でも中世須恵器出土しており、東播系捏鉢3点が確認できる（第27図49～51）。いずれも口縁端部を肥厚させ上方に拡張するもので、わずかに上方に拡張しているもの（51）から口縁端部が屈曲し、大きく上下に拡張し縁帯を形成するもの（49）までいくつかの形態が存在する。森田編年第Ⅱ期～第Ⅲ期第2段階に比定され、遺構の主要時期に先行して遺跡が形成されているものと思われる。

別所古墓群（東広島市高屋町大字郷）白鳥山山塊の北側尾根上に位置する。山陽自動車道建設に伴って1989年に発掘調査された（荒木1994）。14世紀後半～15世紀前半頃の古墓群であるが、調査区南端部で石垣を伴う平坦面が検出され、瓦葺きの建物跡が建っていたと考えられている。建物の時期は14世紀後半と考えられ、比較的短期間で建物が廃絶した後に古墓が形成されている。平坦面および古墓周辺で備前焼播鉢や常滑焼甕などとともに中世須恵器が出土しているが、平坦面に伴うものと考えられる。中世須恵器は亀山焼で、甕29点を確認した。また、7号古墓内から東播系須恵器捏鉢が出土している（第27図54）。森田編年第Ⅱ期第2段階に含まれるものと思われるが、これも本来は平坦面に伴っていたものと考えられる。



第 28 図 西条盆地地域出土の中世須恵器 (6)

60：浄福寺 2 号遺跡

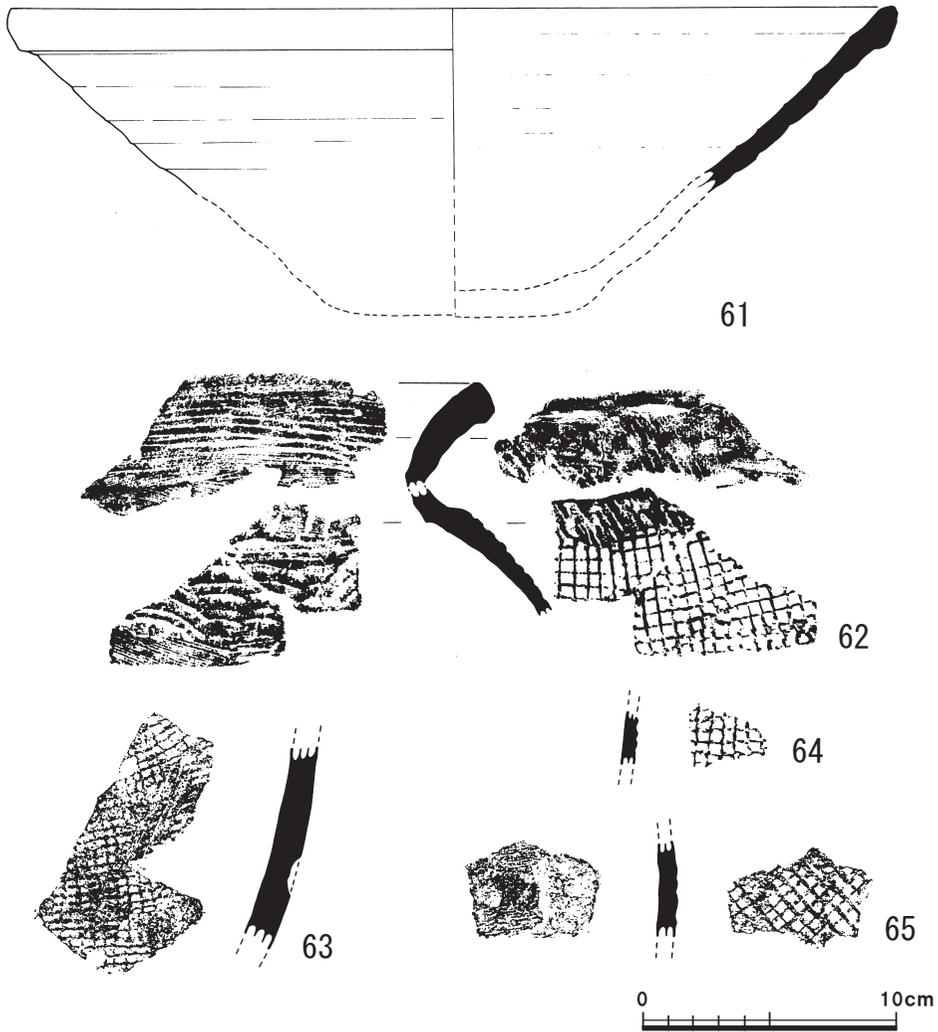
福原城跡（東広島市福富町久芳） 福原城跡は沼田川と谷河内川の合流地点を南側に見下ろす丘陵上に立地している。福富ダム建設に伴って発掘調査が行われ、6つの平坦面と豎堀、堀切、土塁などが検出された（葉杖編 2003）。南北朝および戦国期の 2 時期に利用されたと考えられている。出土遺物は、龍泉窯系青磁碗（I - 5 類、D 類）、備前焼甕（IV 期）、常滑焼甕、古瀬戸灰釉瓶子、土師質土器皿・坏・鍋などとも中世須恵器が出土した。中世須恵器は、東播系捏鉢（第 27 図 56）、亀山焼甕（第 27 図 57 ~ 59）がある。東播系捏鉢は 2 点あり、平坦面 3 などから出土している。56 は口縁端部を肥厚させて拡張している。亀山焼甕は平坦面 1 を中心に 44 点出土しており、口縁部 1 点（57）を含んでいる。57 は口縁端部が先細り気味で、端部を平坦に仕上げ、

強いヨコナデ調整でわずかに窪ませている。比較的薄手で、立ち気味に開いている。そのほかは肩部や胴部の破片（58・59）で、口頸部の様子が不明であるが、第2～3段階に比定されるものと思われる。

浄福寺2号遺跡（東広島市高屋町高屋堀） 杵原川と入野川によって形成された沖積地に位置し、標高240～255mの南北に延びる丘陵上に立地している。新住宅市街地開発に伴い実施された大規模発掘調査のひとつで、東広島ニュータウン遺跡群に属する（佐々木・山田1993）。1986～1988年の3ヶ年にわたって調査が行われ、弥生時代集落跡・墳墓を中心に、古墳時代住居、古墳、中世墳墓が検出されている。中世関係では土壙墓（SK17）より亀山焼の甕が1点出土している（第28図60）。甕はほぼ完形で、口頸部はゆるやかに「く」の字状に屈曲し、口縁部は直立気味である。口縁端部は外方にわずかに拡張している。胴部最大径は中央よりであるが、上半部にあり、なで肩で、底径は広い。器壁は口縁部から底部まであまり変化はなく、大きさの割には薄作りである。外面には大きめの格子タタキ目を施し、内面はあて具痕をナデ消している。岡田編年第2段階のものと考えられる。共伴する遺物はなく、蔵骨器と考えられる。

浄福寺3号遺跡（東広島市高屋町高屋堀） 浄福寺2号遺跡の立地する丘陵の南西斜面に立地し、2つの遺跡は本来同一のものである。1989年に道路改良工事に伴って発掘調査が行われ、（青山編1990）。古墳時代住居跡、中世柱穴群などが検出された。柱穴は建物跡を構成するものと考えられるが、明瞭でない。中世の遺物は、中国産青磁碗（龍泉窯系I類）、中国産白磁壺などとともに、中世須恵器が出土している。中世須恵器は、柱穴から出土したもので、東播系須恵器捏鉢である。体部上半から口縁部にかけての破片である。直線的な体部プロポーションで、口縁端部を上方に拡張している。森田編年第II期第2段階と思われる。

善福寺跡（東広島市志和町大字冠） 善福寺跡は独立丘陵状を呈する台形状の平坦部に立地し、地形的特徴から中世山城、館跡等の存在が推察されていた。1981年に山陽自動車道建設に伴い発掘調査が行われ、方形基壇状遺構、古墓、土坑、一字一石経塚などが検出された（青山1983）。善福寺跡は、古墓を中心とする遺跡であり、古墓には2時期が認められる。基壇造成以前の古墓と、基壇状を呈する高まりに古墓が営まれた時期（形成の中心時期は15世紀）である。前者の時期については、同年の予備調査で古瀬戸瓶子が出土しており、13世紀前半には墓地として成立していた可能性がある。基壇上に掘りこまれた溝（SD20）から亀山焼甕（第29図62）が出土



第29図 西条盆地地域出土の中世須恵器(7)
 61: 浄福寺3号遺跡 62: 善福寺跡 63~65: 戸鼻遺跡

している。破片は8点確認でき、口縁部1点がある。口頸部が大きく「く」の字状に屈曲するもので、古瀬戸香炉(15世紀代)とともに出土した。甕は口縁部外面に縦方向のハケメ調整を施しており、第4段階以降の資料(亀山焼系)と考えられる。蔵骨器の可能性も含め、古墓に伴うものであろう。

戸鼻遺跡(東広島市福富町久芳) 沼田川本流と支流の東丁田川に挟まれた丘陵の平坦面に立地する。2007年に福富ダム建設に伴って調査が行われ、中世に属する竪穴住居状遺構、掘立柱建物跡、集石遺構などが多数の遺構が検出された(唐口・佐武

2009)。14～16世紀に位置づけられる。竪穴住居状遺構S B 2での中国産青磁碗(D類)、中国産白磁皿(D群)、土師質土器鍋などとともに中世須恵器が出土している。中世須恵器は亀山焼甕で、S B 3からも亀山焼甕が出土している(第29図63～65)。いずれも体部の破片であるため詳細な時期は不明であるが、色調が橙褐色などで土師質に近いことや出土陶磁器の年代などからすると、報告書に亀山焼系瓦質土器甕と記載されている通り、中世後期のものであろう。

薬師城跡(東広島市河内町入野) 龍王山から西に派生する丘陵先端部に立地している。圃場整備に伴った発掘調査された(渡邊ほか1996)。丘陵尾根部を堀切によって切断し、丘陵平坦面上で、礎石建物跡3棟、掘立柱建物跡9棟、石組基壇1基、井戸状遺構2基、鍛冶炉2基、土坑、溝状遺構など多数の遺構が検出された。15世紀後半～16世紀末の城館跡で、南北に土塁を造成し、防禦機能を高めている。火災を受けており、その前後で2時期に区分されている。報告によれば、亀山焼甕25点が確認できる。

3) 安芸地方における中世須恵器の出土状況と位置づけ

前節では、西条盆地の中世前期を中心とする中世須恵器の出土状況と年代を遺跡を単位として検討してきたが、安芸地方の様相を検討する前に、西条盆地の中世前期の中世須恵器について、最初にまとめておきたい。

西条盆地地域では、中世須恵器として、東播系須恵器、亀山焼および産地不明須恵器の3種類が認められた。東播系須恵器、産地不明須恵器は中世前半期に位置づけられるものである。亀山焼もおおむね中世前期に位置づけられるものであるが、善福寺跡、戸鼻遺跡例は亀山系に属する資料と考えられ、中世後半期に属するものである。また、薬師城跡例も、ほかの遺物の出土状態、亀山焼の色調、胎土や出土遺物群の年代などから、亀山系の可能性が高い。

出土中世須恵器の年代は、産地不明須恵器を除くと、遺物そのものの型式学的検討からおおよそ導き出すことができるが、中世須恵器の組成や一時期の遺物組成を検討する上では遺構からの出土例が重要視される。現状では、遺構出土資料は、鏡西谷遺跡C地区S B 01以外に14例を数える。出土遺構の内容は建物跡(道照遺跡S B 10、中屋遺跡B地点遺構群)、城館跡(福原城跡平坦面1)、墳墓(浄福寺2号遺跡S K 17、善福寺跡S D 20)、溝・堀など(道照遺跡S D 002、溝口4号遺跡No.1001など)に分類でき、溝・堀などからの出土例が大半である。建物跡出土例についてはある程度組成を検討できるが、中世須恵器に限って見ると、出土量がきわめて少ない。城館

第3表 西条盆地地域出土の中世須恵器一覧表

種類と時期 遺跡名	東播系捏鉢					東播系甕 亀山焼鉢	亀山焼甕				備考
	I期	II・1期	II・2期	III・1期	III・2期		1段階	2段階	3段階	4段階	
1 鏡西谷遺跡 B 地区		△	△			△					
2 鏡西谷遺跡 C 地区 (SB01)		◎	△			○	○	△			須恵器塚あり。
3 鏡西谷遺跡 C 地区		△	△			○	△	△			
4 鏡西谷遺跡 D 地区											須恵器塚あり。
5 鏡西谷遺跡 E 地区		△				◎					
6 鏡西谷遺跡 G 地区						△	△				第1段階の鉢である。
7 鏡東谷遺跡		△				△					鏡遺跡群第4地点の資料を含んでいる。
8 鏡遺跡群	△					△					
9 鏡千人塚遺跡							△				
10 道照遺跡 (県調査区)	△	◎	◎	○	△			△			1点はSB10(瓦器共判)出土。亀山焼には時期幅があり、中世後期の資料が含まれている可能性がある。
11 道照遺跡 (市調査区)						△					須恵器塚あり。
12 鷲田遺跡	△	△	△			◎					
13 安芸国分尼寺跡 (納力地区)			△					△			
14 安芸国分寺周辺遺跡		△									
15 大地面遺跡		△	△			△				△	亀山焼の可能性のある鉢あり。
16 下上戸遺跡		△	△	△							須恵器塚あり。
17 小谷黄幡遺跡			△					△			SD2 および SD9 出土。産地が明確でないが亀山焼の可能性のある鉢あり。
18 溝口1号遺跡									△		
19 溝口4号遺跡		△	○			△	△	△	△		大溝 (No 1001) より東播系捏鉢と亀山焼甕が出土。
20 大楨1号遺跡		△	△								産地不明の捏鉢が1点ある。
21 城仏土居屋敷跡		△									
22 中屋遺跡 A 地点											亀山焼甕の出土状況のみ写真で掲載。SD1 出土。
23 中屋遺跡 B 地点			△	△							亀山焼の可能性のある瓦質の甕もしくは壺あり。
24 別所古墓群			△								東播系捏鉢は古墓に伴うものではない。
25 福原城跡				△					△		中世後期の資料が含まれている可能性あり。
26 浄福寺2号遺跡								△			SK17 出土。蔵骨器。
27 浄福寺3号遺跡			△								ビットから土師質土器皿とともに出土。
28 善福寺跡								△			ほとんどは茶色で瓦質の甕。1点灰色のものがあり、少なくとも2個体分か。SD20 出土。
29 戸鼻遺跡											中世後期の資料。

※△・○・◎は出土量を示し、△は1～5点、○は6～10点、◎=11点以上である。

跡出土例は一括資料を捉えるのが困難な状況である。墳墓出土例は単独資料に近い状況であり、必ずしも遺構の年代と遺物そのものの年代が一致しない場合がある。溝・堀などは、道照遺跡S D 002 など比較的短期間の様相を占めるものもあるが、複数時期の遺物が混在しているものが多く、遺構年代は中世須恵器の編年の位置と必ずしも一致しない。道照遺跡S B 10 では亀山焼甕が中国産白磁碗や瓦器塀（和泉型Ⅲ期）とともに出土している。溝口4号遺跡No.1001 大溝は土石流によって短期間に埋没したことから比較的短い時間の遺物を包含しており、鎌倉時代後期を中心としている。亀山焼甕が、中国産青磁碗（龍泉窯系Ⅰ-5類）、中国産白磁碗（Ⅴ類）、瓦器塀（和泉型Ⅲ-1期）などとともに出土している。また、道照遺跡S D 002 も比較的単純な様相を示しており、東播系須恵器捏鉢、甕や東播系須恵器皿と思われるものが、比較的初期の備前焼などとともに出土している。そのほかの遺構出土例については、前述したように、出土状態から詳細に組成の検討を行うことは困難であろう。

以上のように、出土状態から組成を検討することは困難であることから型式学的な検討を進めてみる。中世須恵器を種類別に見ると、東播系須恵器は捏鉢、甕、亀山焼は（捏）鉢、甕の器種が確認され（第3表）、東播系須恵器はこれに皿が加わる可能性がある。産地不明須恵器は塀を中心としており、皿、鉢が確認される。東播系須恵器は捏鉢を主体としており、森田編年第Ⅰ期～第Ⅲ期第1段階まで認められるが、第Ⅱ期を中心に搬入されている。甕は胴部破片を中心としており、時期を特定できるものがほとんどなく、搬入の様相を十分把握できないが、搬入量は各遺跡で1～数個体程度と推定されることから、捏鉢とともに持ち込まれた可能性が高い。したがって、森田編年第Ⅱ期を主体とすると想定しておきたい。亀山焼は甕を主体としており、現状で鉢が確認できるのは、鏡遺跡群をのぞくと、溝口4号遺跡のみである。甕は岡田編年第1段階～第4段階まで各時期のものが認められるが、鏡遺跡群や道照遺跡のように、第1・2段階を主体とするものが多く、第3段階以降の資料は非常に少ない。産地不明須恵器は、塀を主体としており、小越・旦原系統のものである。出土状態から組成として想定できるのは鏡西谷遺跡C地区S B 01、同D地区、大地面遺跡など少数例であるが、皿、坏などが含まれる可能性がある。現状では編年の位置を確定することは容易ではないが、鏡西谷遺跡C地区S B 01例が型式学的に見てもっとも新しく位置づけられる可能性がある。そうした想定が許されるならば、鏡西谷遺跡C地区S B 01以降に位置づけられる確実な例は現状では確認できないことから、鏡西谷遺跡例を最新として、13世紀前葉以前に位置づけられると想定できよう。小越遺跡、

旦那遺跡の年代は明確には位置づけられていないが、11～12世紀に比定されている(吉野 2012 a)。前節でも紹介したように、壙を中心に見ると、体部のプロポーション、口縁部の形態、高台の形態や口径、底径、器高などの法量に変化が見られ、一定の型式変化を追うことができることから、ある程度の時間幅を想定することが可能であろう。また、鏡遺跡群では、甕、壺、甕または壺の破片が各地区で少量ずつ出土しており、時期は不明であるが、これらもほぼ同じ時期に壙などとともに入搬されているのかもしれない。このほか、産地不明須恵器は大槓1号遺跡で鉢が出土している。捏鉢として利用されたもので、岡田編年第2段階～第3段階の亀山焼捏鉢のプロポーションに類似し、同遺跡では森田編年第Ⅲ期第1段階の東播系須恵器捏鉢が出土している。小越・旦那系統の須恵器より新しい段階のもので、別系統のものであろう。

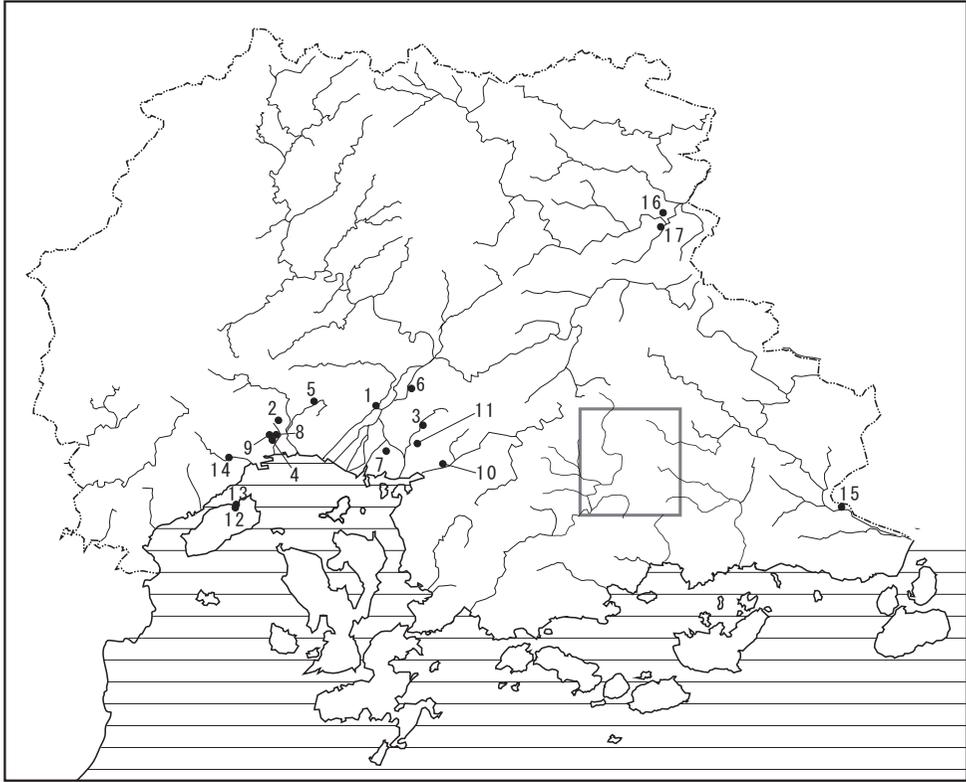
以上のことを踏まえて、西条盆地地域の中世須恵器の様相をまとめて見ると、鏡西谷遺跡C地区を基点に中世前期は大きく二つの様相を見て取ることができる。産地不明須恵器壙を組成に含む遺跡は鏡西谷遺跡C地区SB01のほかに、同D地区、道照遺跡、大地面遺跡、安芸国分尼寺伝承地遺跡、下上戸遺跡などで、量的な問題を別にすれば、先行する12世紀代、あるいはそれ以前の遺物が出土している。また、森田編年第Ⅰ期の東播系須恵器や岡田編年第1段階の亀山焼を出土するケースが多い。産地不明須恵器壙・(坏)、東播系須恵器捏鉢・(甕)、亀山焼甕・(鉢)を基本組成とするものと想定される。一方、これらの産地不明須恵器壙が出土しない遺跡では森田編年第Ⅱ期の東播系須恵器を中心に出土する。東播系須恵器捏鉢を主体とし、亀山焼甕を基本組成とするものと想定される。後者は前者の不明産地須恵器壙・(坏)が欠落し、東播系須恵器は捏鉢に、亀山焼は甕に収斂されたような組成ということができるとも考えられる。

しかし、遺跡形成の面から見ると、必ずしもそれほど単純でもない。岡田編年第1段階の亀山焼甕が出土している遺跡は、鏡西谷遺跡B地区、C地区、E地区などの鏡遺跡群のほか、道照遺跡、溝口遺跡などがある。鏡西谷遺跡では、C地区SB01廃絶後しばらく活動痕跡がきわめて希薄で、14世紀前半頃になって再びC地区で遺跡が利用されるようになり、以後B地区を中心にC地区・E地区などで16世紀まで継続的に遺構・遺物が認められるが、少なくとも中世須恵器については、SB01段階までしか持ち込まれていない。一方、道照遺跡では東播系捏鉢は第Ⅰ期から、数は少ないものの第Ⅲ期第2段階のものまで出土しており、亀山焼甕も岡田編年第4段階以降のもの(亀山焼系)と考えられる破片が存在している。そもそもⅢ期の東播系捏鉢

が出土している遺跡は少なく、道照遺跡のほかは中屋遺跡 B 地点、福原城跡のみである。吉野健志は、安芸地方で出土する東播系須恵器は圧倒的に森田編年第Ⅱ期第 2 段階のものが多く、第Ⅲ期第 1 段階のものは少ない。また、第Ⅱ期第 2 段階のものと共伴し、単独で出土する例は稀であることを指摘している（吉野 2012 b）。鏡東谷遺跡では 14 世紀前半頃のものと思われる亀山焼は見られるが、東播系須恵器はやはり第Ⅱ段階までのものしか出土していない。

甕は東播系の出土は少なく、亀山焼が積極的に入手されている。一方、捏鉢は東播系のもを入手しており、亀山焼が早い段階で播鉢の生産を始めるにもかかわらず、備前焼Ⅲ期が普及するまで播鉢を受容した形跡が乏しい。東播系の甕、亀山焼鉢は出土数が少なく、鏡西谷遺跡や道照遺跡、溝口 4 号遺跡など、中世前期の遺構が明確で、中世須恵器をはじめとする出土数自体が多いところで確認できる状況は、搬入のあり方、遺跡の性格を反映しているものと思われる。

次に、西条盆地地域以外の様相を概括し、安芸地方の様相を素描しておこう。広島湾岸地域では現在 13 遺跡を確認している（第 4 表）。ある程度数が出土している遺跡には下沖 2 号遺跡（広島市佐伯区五日市町石内）、幾志山城跡（広島市安佐北区口田南二丁目）、菩提院遺跡（廿日市市宮島町中西町）がある。下沖 2 号遺跡は古代の官衙と推定される遺跡で、中世の遺構としては掘立柱建物跡 4 棟、柱穴群が検出されている（高下 1994）。遺物は主に包含層からの出土で、同安窯系青磁皿、龍泉窯系青磁碗Ⅰ - 2 類・Ⅰ - 5 類、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類、白磁皿、和泉型瓦器塀・皿などとともに東播系須恵器鉢・甕、亀山焼甕が出土している。東播系捏鉢は主にⅡ期のものであるが、口縁部が平らなものもみられた。亀山焼甕には時期幅があるようで、一部中世後期の資料を含んでいる可能性がある。幾志山城跡は中世後期の山城で、古墳時代の須恵器高坏や器台などが出土しており、もともとは古墳があったものと思われる。3 つの郭や溝、階段状遺構などが検出されている（濱岡 2009）。幾志山城跡では階段状遺構 S X 1 よりⅡ期の東播系捏鉢が出土している。また廃棄土坑と考えられる土坑 S K 1 より、ほぼ 1 個体分の第 1 ～ 2 段階と思われる亀山焼甕が備前焼の甕などとともに出土している。また第 2 郭を東西に分けるように走る溝 S D 4 では、龍泉窯系青磁碗などとともに亀山焼甕が出土しており、青磁碗の年代が 15 世紀頃なのに対し、第 3 段階と考えられる甕が出土しており、S K 1・S D 4 では遺構の年代より古い亀山焼が出土している。菩提院遺跡は大聖院の塔頭（寺院敷地内に建てられた小院・子院）の一つ菩提院と推定される位置にあるが、寺院と決定づけられるような瓦などの遺物は出



第30図 安芸国における中世須恵器出土遺跡分布図

(図中の番号は第4表に一致する。図中の枠は第22図の範囲を示す。)

1. 太田川放水路遺跡 2. 池田城跡 3. 永町山城跡 4. 中垣内遺跡 5. 下沖2号遺跡 6. 幾志山城跡 7. 比治山貝塚 8. 月見城遺跡 9. 円明寺遺跡 10. 畝観音免第1号古墳 11. 水分神社遺跡 12. 巖島菩提院遺跡 13. 宮島玉御池 14. 高砂第1号墳墓 15. 三太刀遺跡 16. 郡山大通院谷遺跡 17. 内長見遺跡

土していない。中世前期を中心とする5枚の遺構面が確認されており、最下層の第V面が12世紀後半、第IV面が12世紀末～13世紀前葉、第III面が13世紀末～14世紀中葉、第II面が14世紀後半に位置づけられている(是光・妹尾2005)。中世須恵器は第III遺構面から出土している。第III遺構面ではテラス状遺構(SX2)、土坑が検出され、SX2には礎石建物跡SB2が作られている。SX2(SB2)上には焼土面が広がっており、その中から土師質土器杯・皿・鍋、吉備型土師質土器碗、中国産黄釉盤・褐釉壺などとともに東播系須恵器碗1点、捏鉢3点、亀山焼甕1点が出土している。第III遺構面出土の東播系捏鉢は時期がわかるものはII-2期のものであり、亀山焼もほぼ同時期のものと考えられる。SX2(SB2)の年代より古い時期のものが出土している。また、第IV遺構面のテラス状遺構(SX3)からも、III期の和泉

第4表 広島湾沿岸地域・沼田川下流域・芸北地域出土の中世須恵器一覧表

種類と時期 遺跡名	東播系捏鉢					東播系甕 亀山焼鉢	亀山焼甕				備考
	I期	II・1期	II・2期	III・1期	III・2期		1段階	2段階	3段階	4段階	
1 太田川放水路遺跡			△			△					壺と思われる破片あり。
2 池田城跡											備前焼碗あり。
3 永町山城跡											東播系鉢？
4 中垣内遺跡											タタキが深いものがある。
5 下沖2号遺跡	△	△	△			△					亀山焼には時期幅があり、中世後期の資料も含まれている可能性がある。
6 幾志山城跡		△	○			△		△	△		産地不明の須恵器甕あり。亀山焼には時期幅があり、中世後期の資料も含まれている。
7 比治山貝塚											
8 月見城遺跡									△		蔵骨器。
9 円明寺遺跡										△	
10 畝観音免第1号古墳			△								
11 水分神社遺跡						△		△			須恵器壺あり。産地不明。
12 菩提院遺跡			△			○					東播系須恵器壺が出土。
13 玉御池遺跡											亀山焼出土。
14 高砂第1号墳墓									△		蔵骨器。
15 三太刀遺跡	△	△	△			△	△				須恵器壺あり。産地不明の瓦質甕あり。
16 郡山大通院谷遺跡		△	◎	△				△			
17 内長見遺跡											

※△・○・◎は出土量を示し、△は1～5点、○は6～10点、◎=11点以上である

型瓦器壺などとともにII-2期の東播系捏鉢が1点出土している。こちらは、ほぼ遺構の年代を示しているものと思われる。ほかの遺跡は出土数が少なく、太田川放水路遺跡で東播系捏鉢・甕、亀山焼甕が少量出土している以外は、極めて少量の出土である。畝観音免第1号古墳でII期の東播系捏鉢が1点みられ、比治山貝塚で捏鉢の破片が、永町山城跡でも東播系捏鉢の可能性のある破片が出土している。亀山焼が出土している遺跡には中垣内遺跡、月見城遺跡、円明寺遺跡、高砂第1号墳墓がある。月見城遺跡は蔵骨器で、第3段階のものと思われる。ほかの遺跡は時期が確定できないが、円明寺遺跡、高砂第1号墳墓は第3～第4段階のものである可能性がある。いずれも実見できておらず、詳細は不明である。水分神社遺跡では第2段階と思われる亀山焼甕と東播系甕が出土している。水分神社遺跡ではほかに焼成がやや軟質の須恵器長頸壺が出土しており、胎土の雰囲気などが東播系に似ていたが、断定は出来ない。池田城跡では東播系須恵器、亀山焼ともに確認できていないが、備前焼の壺が出土してい

る。備前焼Ⅱ期の頃のもので、須恵質の埴である。安芸地域では、今のところ池田城跡以外では確認されていない。

沼田川流域では、三太刀遺跡で中世須恵器が出土している。Ⅰ～Ⅱ期の東播系須恵器捏鉢、東播系甕、亀山焼捏鉢、亀山焼甕が、数は多くないものの出土している。また、産地不明の須恵器埴も出土している。

芸北地域では郡山大通院谷遺跡、内長見遺跡で中世須恵器が確認できた。郡山大通院谷遺跡では和泉型瓦器埴など、中世前期の遺物が出土しているが、東播系須恵器捏鉢は多く出土しており、100点を超えている。Ⅱ～Ⅲ期の捏鉢が出土しているが、大半はⅡ期のものである。亀山焼甕は時期が分かるものは第2段階のものであるが、大半は時期不明である。内長見遺跡では亀山焼甕が1点確認できたが、体部の破片であり、時期は不明である。

西条盆地と比較すると、消費地となる集落遺跡が少ないこともあってか、東播系須恵器、亀山焼がともに出土している遺跡は多くないが、下沖2号遺跡、幾志山城跡、菩提院遺跡および三太刀遺跡では東播系須恵器捏鉢・甕、亀山焼甕が出土している。下沖2号遺跡・菩提院遺跡については、陶磁器や瓦器埴といった中世前期の遺物が豊富に出土しており、物流の経路・拠点となっている遺跡とも考えられるが、幾志山城跡については中世須恵器以外に中世前期の様相を示す遺物が見当たらず、性格が不明である。郡山大通院谷遺跡では東播系須恵器捏鉢は139点と多く出土しているのにもかかわらず、甕が出土しておらず、甕が必ずしも捏鉢とともに搬入されていないことを示している。西条盆地の例をみても、東播系須恵器の甕のみが出土している遺跡は見られず、選択的に東播系の甕を入手しているのではないのかもしれない。ほかの遺跡は東播系捏鉢のみ、もしくは亀山焼甕のみといった状況である。東播系須恵器捏鉢はほとんどがⅡ期のもので、Ⅲ期のものは郡山大通院谷遺跡で確認できたのみである。第1段階の亀山焼甕は西条盆地以外では確認できず、また亀山焼捏鉢もほとんど見当たらない。産地不明須恵器については収集作業が足りていないこともあって、分析を行える状況ではない。

5. おわりに

本稿では、安芸地方における中世前期の中世須恵器について集成を行い、西条盆地地域を中心に考察を試みた。西条盆地地域で29例、西条盆地以外の地域で17例を確認した。これまで修正作業を行った陶磁器、瓦器について見ると、陶磁器は、西条盆

地地域で 37 例、広島湾岸地域で 25 例であり、瓦器は西条盆地地域で 33 例、広島湾岸地域で 17 例であった。西条盆地については数の上では陶磁器や瓦器の出土例と遜色のない発見例があることを改めて確認できたが、西条盆地以外の地域をすべて含めても 20 例足らずとかなり少ない印象である。陶磁器は中世の全時期を対象とし、今回の中世須恵器は中世前期に限定しているとは言え、中世遺跡の調査例が蓄積されている広島湾岸地域での出土例が少ないことが全体の数字に影響している。研究抄史の中でも触れたように、中世須恵器に対する認識は、亀山焼については比較的早くから注意されていたものの、陶磁器に比べると調査・研究の場面で多くの研究者から意識されるようになったのが比較的最近であることが背景にあるのであろう。調査年代が 1990 年以前の遺跡については、別の資料収集の際に中世須恵器の報告がない遺跡で新たに出土を確認した例も少なからずあったことがそのことを傍証している。

安芸地方の中世須恵器の現状における分布を見ると、西条盆地地域と広島湾岸地域の二つの地域に集中しており、陶磁器や瓦器の分布状況と基本的には同様である。数の上では西条盆地に最も集中しているが、陶磁器や瓦器から見ると、広島湾岸地域では多くの資料が未だに未報告の状態で眠っている可能性が高い。両地域以外については、芸北地域の大通院谷遺跡、沼田川下流域の三太刀遺跡など拠点的な遺跡において出土が確認できる程度で、陶磁器や瓦器同様、出土数が非常に少ないのが現状である。これらの地域では中世遺跡の調査研究が十分行われていないことが主たる原因であり、遺跡への搬入状況や組成の相違はあるにせよ、西条盆地地域、広島湾岸地域と同様に、今後調査が進展すれば、多くの遺跡が発見されるものと想定される。今後、西条盆地地域も含め、意識的に資料の掘り起こしをする必要があろう。

中世須恵器の内容を見ると、西条盆地地域では、東播系須恵器、亀山焼、産地不明須恵器が確認された。東播系須恵器は捏鉢を主体に甕など、亀山焼は甕を主体に（捏）鉢が搬入されている。東播系須恵器は森田編年第Ⅱ期を中心とし、その前後の時期の資料も確認できるが、第Ⅲ期第 1 段階の資料は極端に少ない。瓦器が和泉型Ⅲ－2 期を中心にその前後の時期に搬入されているが、第Ⅳ期以降はほとんど搬入されない状況と背景的には通底しているように思われる。亀山焼は岡田編年第 1 段階から搬入されており、第 2 段階以降も一定量が搬入されているが、（捏）鉢については、第 2 段階以降基本的に認められなくなるようである。中世前期前葉の様子は現状ではほとんど不明の状況であるが、中世前期中葉（12 世紀後半～13 世紀前半）では東播系須恵器捏鉢・甕、亀山焼甕が中世須恵器の組成をなすものと思われるが、これらの組成が

認められるのは鏡西谷遺跡 C 地区 (S B 01)、道照遺跡、溝口 4 号遺跡など拠点的な遺跡にほぼ限られ、そのほかの遺跡では東播系捏鉢を中心とするようである。産地不明須恵器は埴を中心として、坏、壺、甕などがあり、拠点的な遺跡を中心に出土している。中世前期後葉 (13 世紀後半～14 世紀) では、東播系須恵器捏鉢、亀山焼甕が組成をなしているが、出土量は大幅に減少し、拠点的な遺跡を中心に出土している。備前焼播鉢は 14 世紀代から点々と確認できるようになるが、東播系須恵器捏鉢と急速に後退する状況ではなく、本格的な搬入は 14 世紀末～15 世紀初頭以降のようである。

広島湾岸地域においても基本的な様相は西条盆地地域に共通すると思われるが、現状では、東播系須恵器は森田編年第Ⅲ期第 1 段階以降に属する資料をほとんど確認することができない。亀山焼は (捏) 鉢がほとんど出土しておらず、岡田編年第 1 段階の甕も確認できない。おそらく、未公表資料の中に存在する可能性が高いが、様相解明は今後の課題である。また、池田城跡では間壁編年第Ⅱ期の備前焼埴が出土している。内陸とは異なる様相として注目しておきたい。

ところで、本稿では平行タタキ目が施された甕を基本的に東播系須恵器として扱ってきたが、岡田編年第 1 段階に位置づけられる亀山遺跡灰原 1 では平行タタキ目と格子タタキ目の甕が約半数ずつあり、鏡千人塚遺跡 S S 01 出土亀山焼甕も平行タタキ目施文である。鏡西谷遺跡はじめ拠点的な遺跡には第 1 段階の亀山焼甕が搬入されている蓋然性は極めて高いと言える。しかし、口縁部の形状がわかる資料は少なく、焼質、胎土、タタキ目の状態などからある程度区分は可能であろうが、現状では、体部の破片のみでの産地断定は不確定要素が多い。また、出土資料には十瓶山焼の可能性のあるものもあり、今回は果たせなかったが、12～13 世紀の中世須恵器については今後十分な検討をしていく必要がある。

これに関連して、今回は産地不明須恵器を積極的に中世須恵器の一つとして集積の対象とした。西条盆地地域以外では十分に収集できなかったが、13 世紀前葉以前の重要な構成器種と想定されるに至った。本稿では、時期や編年、産地などについて十分な分析をすることができなかったが、西日本では 13 世紀以降、東播系須恵器、亀山焼、備前焼などの広域流通品へ収斂されていく以前の地域的な中世須恵器の解明のための糸口が見えてきたように思われる。今後、この点についても、資料蓄積を通じて、改めて論じてみたい。

本稿を作成するにあたり、鈴木康之、妹尾周三、吉野健志の各氏から有益な教示を頂き、鈴木氏には鏡遺跡群の中世須恵器全般についてご意見を賜った。産地不明須恵器を集成する動機については妹尾氏との議論によるところが多い。また、安芸地方の中世須恵器実見にあたり、広島大学考古学研究室、兵庫県立考古博物館、岡山県古代吉備文化財センター、笠岡市教育委員会、広島県教育委員会、広島県立歴史博物館、(財)広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室、(財)広島市未来都市創造財団文化科学部文化財課、東広島市教育委員会、(財)東広島教育文化振興事業団文化財センター、(財)安芸高田市地域振興事業団、府中町教育委員会、海田町教育委員会の各機関、安東康宏、荒川美緒、植田千佳穂、上柁武、沖田健太郎、後藤研一、楳木敬太、杉山一雄、末廣久敬、古瀬清秀、三宅正浩、森内秀造、山路進朗、山本誠、吉野健志の各氏に大変お世話になった。記して感謝の意を表したい。

注

- (1) 本稿では、平安時代後期(院政期)～鎌倉時代初期をさす。
- (2) 本稿では、平安時代後期(院政期)～鎌倉時代をさす。
- (3) 点数は基本的に破片数であるが、接合したものは接合個体全体で1点と数えて集計している。したがって、小破片1点も欠けない完形品1点も100点接合した個体もすべて1点として集計している。
- (4) 鏡千人塚遺跡は広島県教育委員会と広島大学統合地埋蔵文化財調査員会による発掘調査があり、それぞれに遺構番号が付されている。両者の調査は隣接地であり、広島大学の調査が広島県の調査区を拡張するような形で実施されたため、広島県教育委員会の遺構番号に付け足す形で改めて遺構番号を再整理した(藤野2012)。ただし、遺構ごとに1から付け直している。本稿報告の亀山焼甕が出土した1号積石塚SS01は、原報告では積石基壇状遺構ST01とされている。
- (5) これまで報告した陶磁器・瓦器についても、鏡遺跡群出土資料については改めて報告する機会をつくりたい。
- (6) 十瓶山焼の可能性もあるものもあるが、資料数が少ないことから、今回は言及しない。
- (7) 太田川下流域、八幡川下流域、瀬野川下流域および厳島(宮島)をはじめとする広島湾の島部をさす。
- (8) 高屋盆地、志和盆地などを含む広義の西条盆地とその周辺の旧賀茂郡福富町、同豊栄町、黒瀬町をさす。
- (9) 点数の集計は鏡遺跡群と同様の方法である。

引用・参考文献

- 飯田米秋・青山 透 1990『浄福寺遺跡群発掘調査報告書 浄福寺3号遺跡・浄福寺古墓群』浄福寺遺跡群発掘調査団。
- 青山 透 1983 「3.小越窯跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査報告(Ⅰ)』、広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター、40～59頁。
- 青山 透 1983 「4.善福寺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅰ)』広島県教育委員会、(財)広島県埋蔵文化財調査センター、60～69頁。
- 阿部 滋編 1987『広島市佐伯区五日市町所在 中垣内遺跡第2次発掘調査概報』広島市の文化財第38集、広島市教育委員会。
- 荒木清二 1994「別所古墓群」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査報告(X)』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第129集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。

- 井沢洋一 1987「福岡地方の須恵質・瓦質土器について」『中近世土器の基礎研究』Ⅲ、中世土器研究会、97～115頁。
- 伊藤晃 1987「窯業」『岡山県の考古学』吉川弘文館、531～627頁。
- 伊藤健司 1983「旦原窯跡発掘調査報告」『埋蔵文化財調査報告書』東広島市教育委員会、1～28頁。
- 伊藤公一 1993『上滝川1号遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第112集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 植田千佳穂・伊藤実・佐々木直彦 1982「3 鏡千人塚遺跡」『広島大学統合移転地内埋蔵文化財発掘調査報告 清水奥山遺跡 東ガガラ窯跡 鏡千人塚遺跡』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター・広島大学、21～57頁。
- 今村忠彦・岡野将士 1996「熊ヶ迫第1～3号窯跡 県営かんがい排水事業(三河地区)に係る発掘調査」広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第139集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2、日本貿易陶磁研究会、55～70頁。
- 植田千佳穂編 1982『広島大学統合移転地内埋蔵文化財発掘調査報告 清水奥山遺跡 東ガガラ窯跡 鏡千人塚遺跡』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター・広島大学。
- 植田 広 1995『中屋遺跡A地点発掘調査報告書-土地改良総合整備事業(中屋地区)に伴う発掘調査報告書-』広島県賀茂郡豊栄町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書第5集、豊栄町教育委員会。
- 植田 広・増田晴美・和田崇志 2009『西条町吉行 安芸国分寺周辺遺跡発掘調査報告書-吉行泉線街路整備事業に係る発掘調査-』文化財センター調査報告書第62冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。
- 梅本健治 1986『郷貝塚発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第48集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 梅本健治編 2003『三太刀遺跡(Ⅰ) 東本通土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第206集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 梅本健治編 2004『三太刀遺跡(Ⅱ) 東本通土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(3)』(財)広島県教育事業団発掘調査報告書第3集、(財)広島県教育事業団。
- 梅本健治編 2005『三太刀遺跡(Ⅲ) 東本通土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(4)』(財)広島県教育事業団発掘調査報告書第10集、(財)広島県教育事業団。
- 恵谷泰典・唐津彰治 2005『八本松飯田8丁目 城仏土居屋敷跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第45冊、(財)東広島市教育文化事業団。
- 大上裕士 1992『内長見遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第100集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 大村敬通・水口富夫編 1983『魚住古窯跡群』兵庫県文化財調査報告第19冊、兵庫県教育委員会。
- 岡田 博 1988「亀山遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告69、建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会、11～349頁。
- 岡田 博 1988「総括」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査報告3 亀山遺跡・西光坊遺跡・寺沢遺跡・道口遺跡・唐津池北遺跡・上竹西の坊遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告69、岡山県教育委員会、229～240頁。
- 荻野繁春 1985「西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年」『福井考古学会会誌』第3号、福井考古学会、1～82頁。
- 荻野繁春 1986「播鉢から見た中世の生産と流通について-西日本を中心に」国立福井工業高等専門学校。
- 荻野繁春 1993「中世西日本における貯蔵容器の生産」『考古学雑誌』第78巻 第3号、日本考古学会、31～73頁。
- 奥田泰将・中村眞哉編 1986『広島市佐伯区五日市町所在 池田城跡発掘調査報告書』広島市の文化財第35集、広島市教育委員会。
- 小倉豊文編 1963『府中町下岡田古代建築群遺跡調査報告』第一集 第一次発掘概報、府中町教育委員会・府中町重要文化財保護協会。
- 小倉豊文編 1964『府中町下岡田古代建築群遺跡調査報告』第二集 第二次発掘概報、府中町教育委員会・府

- 中町重要文化財保護協会。
- 尾上 実 1983「南河内の瓦器碗」『藤澤一夫先生古希記念 古文化論叢 藤澤一夫先生古希記念論集刊行会、689～705頁。
- 尾上 実・森嶋康雄・近江俊秀 1995「瓦器碗」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、315～337頁。
- 鍛治益生編 1982『道照遺跡 西条バイパス建設予定地埋蔵文化財発掘調査報告書』広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財センター。
- 鍛治益生 1992「1. 小谷黄幡遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査（Ⅷ）』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第98集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター、9～64頁
- 唐口勉三・佐武壯太編 2009『福富町久芳 戸鼻遺跡発掘調査報告書-沼田川河川総合開発事業（福富ダム）に係る発掘調査-』文化財センター調査報告書第63冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。
- 河瀬正利編 1971『円明寺（延命寺）遺跡発掘調査報告』広島県教育委員会。
- 河瀬正利 1979『畝観音免古墳群-広島県安芸郡海田町所在-』広島県安芸郡海田町教育委員会。
- 河瀬正利 1986『高砂遺跡群発掘調査報告書-広島県佐伯郡廿日市町所在-』高砂遺跡群発掘調査団。
- 木戸雅寿 1995「石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、511～521頁。
- 高下洋一編 1994『広島市佐伯区五日市所在 下沖2号遺跡発掘調査報告』(財)広島歴史科学教育事業団調査報告書第11集、(財)広島歴史科学教育事業団。
- 是光吉基編 1978『安芸国分尼寺跡-第1次調査概報-』広島県教育委員会。
- 是光吉基・妹尾周三編 2005『特別史跡および特別名勝 厳島 菩提院遺跡発掘調査報告-宮島町立歴史民俗資料館収蔵庫建設に伴う発掘調査の記録-』宮島町教育委員会。
- 三枝健二 1999『中屋遺跡B地点発掘調査報告書Ⅱ』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第181集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 佐々木直彦・山田繁樹編 1993『東広島ニュータウン遺跡群Ⅱ』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第97集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 佐藤竜馬 1998「十瓶山焼と亀山焼」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要Ⅵ』(財)香川県埋蔵文化財調査センター、81～111頁。
- 沢元保夫 1989「鷺田遺跡」『奥田・是石・鷺田・藤田-一般国道375号道路改良工事に伴う発掘調査-』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第81集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター、57～123頁。
- 潮見 浩編 1967『下岡田遺跡発掘調査概報 古代・中世建築遺構群 1966年度』広島県安芸郡府中町教育委員会。
- 潮見 浩・藤田 等編 1966『下岡田遺跡発掘調査概報 古代・中世建築遺構群 1965年度』広島県安芸郡府中町教育委員会・広島県安芸郡府中町文化財保護協会。
- 潮見 浩・小沢 毅・鈴木康之ほか 1983『下岡田遺跡発掘調査概要 1982年度』広島県安芸郡府中町教育委員会。
- 潮見 浩・入倉徳裕・小沢 毅・鈴木康之ほか 1984『下岡田遺跡発掘調査概要 1983年度』広島県安芸郡府中町教育委員会。
- 潮見 浩・入倉徳裕・鈴木康之ほか 1985『下岡田遺跡発掘調査概要 1984年度』広島県安芸郡府中町教育委員会。
- 篠原芳秀 1987「草戸千軒町遺跡出土の亀山焼甕」『中近世土器の基礎研究』Ⅲ、日本中世土器研究会、93～96頁。
- 新川 隆・重森正樹・沖田健太郎編 2002『郡山大通院谷遺跡（中世編 本文）』吉田町地域振興事業団調査報告書第7集、(財)吉田町地域振興事業団。
- 新川 隆・重森正樹・沖田健太郎編 2003 a『郡山大通院谷遺跡（古代編 本文）』吉田町地域振興事業団調査報告書第8集、(財)吉田町地域振興事業団。
- 新川 隆・重森正樹・沖田健太郎編 2003 b『郡山大通院谷遺跡（西地点編）』吉田町地域振興事業団調査報告書第9集、(財)吉田町地域振興事業団。
- 鋤柄俊夫 1985「第3章 遺物 第1節土器類」『魚住古窯跡群発掘調査報告書-中尾土地区画整理事業に伴う

- う-』明石市教育委員会・平安博物館、16～44頁。
- 妹尾周三 1993「Ⅲ. 大槓1号遺跡の調査」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅱ)』(財)広島県埋蔵文化財調査センター、
- 田河禎昭 1977「府中町の埋蔵文化財」『安芸府中町史』第二巻、広島県安芸郡府中町、79～151頁。
- 丹治康明 1985「東播系須恵器について」『中近世土器の基礎研究』、中世土器研究会、55～61頁。
- 寺島孝一編 1985『魚住古窯跡群発掘調査報告書-中尾土地区画整理事業に伴う-』明石市教育委員会・平安博物館。
- 永田千織・藤野次史 2009「安芸地方における中世陶磁器の研究-広島大学東広島キャンパス鏡地区出土資料を中心として-」『広島大学埋蔵文化財調査室研究紀要』第1号、広島大学埋蔵文化財調査室、1～86頁。
- 永田千織・藤野次史・八幡浩二 2011「安芸地方における瓦器の研究-」『広島大学埋蔵文化財調査室研究紀要』第2号、広島大学埋蔵文化財調査室、1～108頁。
- 永田千織 2012「中世前期における広島湾岸地域の様相」『シンポジウム安芸地方の中世を探る-中世前期を中心として-』広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門・東広島市教育委員会、23～30頁。
- 榎崎彰一 1977「中世の社会と陶器生産」『世界陶磁全集3 日本中世』小学館、149～157頁。
- 葉村哲也編 2003『福原城跡』沼田川河川総合開発事業(福富ダム)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1)、広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第207集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 橋本義和 1986「V永町山城跡」『北谷山城跡発掘調査報告書』広島市の文化財第34集、広島市教育委員会、44～48頁。
- 花本哲志 2000「広島県内出土の亀山焼系甕について-城館遺跡出土の未報告資料の紹介とともに-」『研究輯録』X、広島県埋蔵文化財調査センター、1～12頁。
- 濱岡大輔 2009『幾志山城跡発掘調査報告書-広島市安佐北区口田南二丁目所在-』特定非営利活動法人ヒロシマ文化・健康サポートセンター・(財)広島市文化財団。
- 藤岡孝司 1993「Ⅳ 道照遺跡」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』東広島市教育委員会文化財調査報告書第26集、東広島市教育委員会、93～112頁。
- 藤田広幸編著 1987『月見城遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第54集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 藤野次史 2003「調査の成果」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ-農場地区の調査-』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室、248～275頁。
- 藤野次史・増田直人 2003 a「鏡西谷遺跡の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ-農場地区の調査-』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室、248～275頁。
- 藤野次史・増田直人 2003 b「鏡東谷遺跡の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ-農場地区の調査-』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室、191～221頁。
- 藤野次史編 2003『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ-農場地区の調査-』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室、248～275頁。
- 藤野次史 2012「広島大学東広島キャンパスの中世遺跡」『シンポジウム安芸地方の中世を探る-中世前期を中心として-』広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門・東広島市教育委員会、1～12頁。
- 藤原彰子 1994「溝口1号遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査報告(X)』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第129集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 真壁忠彦 1991『備前焼』考古学ライブラリー60、ニューサイエンス社。
- 松崎寿和・潮見浩 1961「先史時代の広島地方」『新修広島市史』第1巻、広島市、114～224頁。
- 松村昌彦編 1979『安芸国分尼寺跡-第2次調査概報-』広島県教育委員会。
- 松村昌彦編 1980『安芸国分尼寺跡-伝承地にかかる第3次調査概報-』広島県教育委員会。
- 松村昌彦編 1981『道照館跡発掘調査概報』東広島市教育委員会。
- 水口富夫 1983「第3章 遺構と遺物 第2節 遺物」『魚住古窯跡群』兵庫県文化財調査報告第19冊、兵庫県教育委員会、39～65頁。

- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2、日本貿易陶磁研究会、47～54頁。
- 森田 稔 1987 「東播系中世須恵器の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』Ⅲ、中世土器研究会、5～26頁。
- 森田 稔 1995 「8.中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会、真陽社、356～366頁。
- 吉野健志編 2008 『大地面遺跡発掘調査報告書－都市計画道路吉行飯田線街路事業に係る発掘調査－』文化財センター調査報告書第59冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。
- 吉野健志 1996 『下上戸遺跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第10冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。
- 吉野健志 1998 「安芸国中世の土師質土器」『文化財論究』第1集、(財)東広島市教育文化振興事業団、53～76頁。
- 吉野健志 2000 『下上戸遺跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第29冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。
- 吉野健志 2012 a 「西条盆地の中世遺跡－道照遺跡・溝口4号遺跡を中心として－」『シンポジウム安芸地方の中世を探る－中世前期を中心として－』広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門・東広島市教育委員会、13～22頁。
- 吉野健志 2012 b 「出土土器から見た安芸地方の様相」『シンポジウム安芸地方の中世を探る－中世前期を中心として－』広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門・東広島市教育委員会、37～44頁。
- 吉野健志編 2010 『溝口4号遺跡発掘調査報告書－東広島県自動車道建設事業に係る発掘調査－』文化財センター調査報告書第70－1冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。
- 横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』4、九州歴史資料館、1～26頁。
- 渡邊昭人・松井和幸・久下 実 1996 『薬師城跡』広島県埋蔵文化財調査センター報告書第142集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。

広島大学東広島キャンパス鏡地区出土中世須恵器観察表

例 言

- ここに収録する資料は、1981～1982年に広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会が発掘調査を行った鏡西谷遺跡、1982～1983年に広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会が発掘調査を行った鏡東谷遺跡、1980年に広島県教育委員会が発掘調査を行った鏡千人塚遺跡および1979年に広島県教育委員会が実施した鏡地区の予備調査において出土した中世須恵器類である。
- 収録した須恵器は、東播系須恵器、亀山焼などが認められる。破片が多く、産地を特定できないものも多いが、可能な限り詳細に表記した。
- 東播系須恵器鉢鉢の口縁形態については、本文中で行った分類を表記した。
- 資料の各遺跡における出土地区および調査区は、広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室刊行の『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－農場地区の調査－』（2002年）、広島県教育委員会ほか刊行の『広島大学統合移転地内埋蔵文化財発掘調査報告 清水奥池遺跡 東ガガラ窯跡 鏡千人塚遺跡』（1982年）に依拠している。
- 鏡西谷遺跡および鏡東谷遺跡では発掘対象地全域に一辺5mのグリッドが設定されており、出土位置を記録した遺物以外は、各グリッドごと、あるいは近接した複数のグリッドをまとめる形で取り上げられている。したがって、遺物出土区の表記法ならびにその示す内容については以下のごとくである。
A5：A5区出土
A5・6：A5区、A6区出土
A・B5区：A5区、B5区出土
A・B－5・6区：A5区、A6区、B5区、B6区出土
A～C3区：A3区、B3区、C3区出土
A～C－3～5区：A3区、A4区、A5区、B3区、B4区、B5区、C3区、C4区、C5区出土
- 接合個体資料を基本として資料番号を付している。各資料には破片数を示した。

第5表 鏡遺跡群出土中世須恵器一覽表(1)

	挿図番号	写真番号	遺跡名	地区	小区	出土地点	破片数	種類	器種	残存部位	口縁形態	復元口径(cm)
1	第4図1	図1-1-1	鏡 西 谷 遺 跡	B 地 区	F 6		1	東播系	捏鉢	口縁部	C	30.0
2	第4図2	図1-1-2			C 5		2	東播系	捏鉢	口縁部	D	30.0
3	第4図3	図1-1-3			西半		1	東播系	捏鉢	体部～底部		
4	第4図4	図1-1-4			H 2		1	東播系	捏鉢	口縁部	A	
5	第4図5	図1-1-5			H 6		1	亀山焼	甕	体部		
6	第4図6	図1-1-6			G 6		1	亀山焼	甕	体部		
7		図1-2-9			B・C-1・2		1	亀山焼	甕	体部		
8		図1-2-10			B・C-1・2		1	亀山焼	甕	体部		
9		図1-2-11			B・C-1・2		1	亀山焼	甕	体部		
10		図1-2-12			B 2		1	亀山焼	甕	体部		
11		図1-2-1			C 2		2	東播系	捏鉢	体部		
12		図1-2-13			C 3		1	亀山焼	甕	体部		
13		図1-2-2			C 5		1	東播系	捏鉢	体部		
14		図1-2-3			C 5		1	東播系	捏鉢	体部		
15		図1-2-4			C 5		1	東播系	捏鉢	体部		
16		図1-2-5			H 6		1	東播系	捏鉢	体部		
17		図1-2-6・7			西半		3	亀山焼	捏鉢	体部		
18		図1-2-8			西半		1	亀山焼	捏鉢	体部		

復元 底径 (cm)	器高 (cm)	色 調		調 整		備 考
		内面	外面	内面	外面	
		灰褐色	灰白色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	片口の鉢で、口縁端部は上方に拡張している。端面は丸みをもち、なだらかに体部へと続いている。内面口縁直下は稜をもつ。
		灰褐色	暗灰色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	外反する口縁部で、口縁端部は上方に拡張させ、口唇部は面をもつ。口縁端面には拡張させた際の粘土の接合痕が残る。内面口縁直下は稜をもつ。
9.4		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	回転ナデ ナデ	平底で、底部から体部にかけては比較的直線的である。底面は糸切りかと思われるが現状ではわからない。底部周縁は縦横にナデ調整が施されている。内面は使用により摩滅している。
		暗灰色	暗灰色	回転ナデ ナデ	回転ナデ	口縁端部は上方に拡張し、先端は丸みを帯びている。端面は平坦である。口縁下端は直線的に体部へと続いている。
		灰褐色	灰褐色	ナデ	格子タタキ目 ナデ	外面には幅3～6mmほどの格子タタキ目がみられる。器壁の厚さは約1.1cmである。当て具痕はナデ消されている。
		暗灰色	暗灰色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅3～4mmほどの浅い格子タタキ目がみられる。器壁は約0.5cmと薄手である。内面には当て具痕がわずかに残る。
		黒褐色	橙褐色	ナデ	格子タタキ目	非常に瓦質で、内面は器壁が一部剥落している。外面には幅5mmほどの格子タタキ目がみられるが不明瞭である。器壁の厚さは約0.7cmである。
		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅5～6mmほどの格子目がみられる。内面の当て具痕は丁寧にナデ消されている。厚さは約1cmである。
		灰色	灰色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅3mmほどの格子タタキ目がみられるが、非常に浅く、不明瞭である。内面の当て具痕はナデ消されているが、わずかに痕が残る。厚さは約0.5cmである。
		灰色	灰色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅3～4mmほどの正方形に近い格子目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されているが、わずかに痕が残る。厚さは約0.5cmである。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	内面は平滑であるが、外面には回転ナデによる凹凸がみられる。
		暗灰色	暗灰色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅4～6mmほどの格子目がみられる。内面の当て具痕は丁寧にナデ消されている。器壁の厚さは約1.2cmである。
		暗灰色	暗灰色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	内外面ともに不定方向のナデ調整がみられる。
		黄灰色	黄灰色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	捏鉢の小片である。
		暗灰色	暗灰色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	内面は使用により摩滅している。
		黄灰白色	黄灰白色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	捏鉢の小片である。
		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	ナデ 指頭調整	外面には指頭圧痕が顕著にみられる。やや瓦質で、内面は器表が剥落している部分もある。
		黄灰色	灰褐色	ナデ	ナデ 指頭調整	底部付近と思われる瓦質の捏鉢である。外面には指頭圧痕が顕著にみられ、横方向のヘラケズリもみられる。

第6表 鏡遺跡群出土中世須恵器一覽表(2)

挿図番号	写真番号	遺跡名	地区	小区	出土地点	破片数	種類	器種	残存部位	口縁形態	復元口径(cm)
19	図1-2-15	鏡 西 谷 遺 跡	B 地 区	西半		1		壺	体部		
20	図1-2-14			中央部		1	亀山焼	甕	体部		
21	第5図7 図1-3-1		C 地 区	H 2	S B 01	2	東播系	捏鉢	口縁部~体部	B	31.2
22	第5図8 図1-3-3			G 3 H・I-3・4	S B 01	3	東播系	捏鉢	口縁部~体部	A	30
23	第5図9 図1-3-4			G・H 2	S B 01	1	東播系	捏鉢	口縁部~体部	A	29.4
24	第5図10 図1-3-7			G 3	S B 01	5	東播系	捏鉢	口縁部~底部	B	30.0
25	第5図11 図1-3-8			G 3	S B 01	6	東播系	捏鉢	口縁部~体部	B	30.0
26	第5図12 図1-3-5			H 2	S B 01	1	東播系	捏鉢	口縁部~体部	B	30.0
27	第6図13 図1-3-2			G 2	S B 01	1	東播系	捏鉢	口縁部	B	30.0
28	第6図14 図1-3-6			G・H 2	S B 01	2	東播系	捏鉢	口縁部~体部	A	27.6
29	第6図15 図1-4-1			H 2	S B 01	1	東播系	捏鉢	体部~底部		
30	第6図16 図1-4-2			G・H 2	S B 01	1	東播系	捏鉢	底部		
31	第6図17 図1-4-3			G 2	S B 01	1	東播系	捏鉢	体部~底部		
32	第6図18 図1-4-4			F 3	S B 01	1	東播系	捏鉢	底部		
33	第6図19 図1-4-5	G 3	S B 01	1	東播系	甕	体部				
34	第6図20 図1-4-6 図2-4-1	F・G- 3・4	S B 01	1		碗	口縁部		12.2		

復元 底径 (cm)	器高 (cm)	色 調		調 整		備 考
		内面	外面	内面	外面	
		灰色	灰色	回転ナデ		硬質で、外面には二次焼成による火はねのような跡がみられる。
		暗灰褐色	暗灰色	ナデ	ナデ 格子タタキ目	外面には幅4～5mmほどの正方形に近い格子目がみられる。内面には当て具痕がみられる。厚さは約0.5cmである。
		暗灰色	暗灰色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	片口の捏鉢で、口縁端部は上方に拡張し、先端は尖り気味で、端面は窪んでいる。口縁下端はナデ調整によって外側へわずかに突出する。内面口縁直下は稜をもつ。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	口縁端部は上方へ拡張し、先端は丸く、端面はわずかに窪んでいる。内面口縁直下はわずかに窪むが、外面は直線的である。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	口縁端部は上方に拡張し、先端は丸みを帯びている。端面はわずかに窪んでいる。内面口縁直下は稜をもつ。
11.8		暗灰褐色	暗灰褐色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	片口の鉢で、口縁端部は上方へ拡張し、口縁下端はナデ調整によって外側へわずかに突出する。先端は丸みを帯び、端面は平坦である。内面口縁直下は稜をもち、比較的直線的な体部をもつ。底部周縁はナデ調整である。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	口縁端部は上方に拡張し、先端は丸みを帯びている。端面は平坦で、口縁下端から直線的に体部へとつづく。内面口縁直下は稜をもつ。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	口縁端部は上方に拡張し、口縁下端はナデ調整によって外側へわずかに突出する。端面はわずかに窪んでいる。
		暗灰色	暗灰色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	口縁端部は上方に拡張し、先端は尖り気味である。口縁下端はナデ調整によって外側へ突出する。端面はわずかに窪んでいる。
		暗灰色	暗灰色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	口縁端部は上方に拡張し、先端は尖り気味である。内面口縁直下は稜をもち、外面はナデ調整によって大きく窪んでいる。体部外面は比較的平滑であるが、内面には凹凸がみられる。
6.0		暗灰色	暗灰色	ナデ	回転ナデ ナデ 回転糸切り	底部から内湾しながら体部へとつづく。底部周縁は丁寧にナデ調整が施され、底面の糸切り痕もほとんどナデ消されている。内面は使用により摩滅している。
9.6		暗灰色	暗灰色	回転ナデ ナデ	回転ナデ・ナデ 回転糸切り	底部からは比較的直線的に体部へとつづく。底面には糸切り痕が残り、底面周縁はナデ調整が施されている。
7.8		暗灰色	暗灰色	ナデ	回転ナデ ナデ 回転糸切り	底部からやや内湾しながら体部へとつづく。回転糸切り痕が残り、底部周縁は縦横にナデ調整が施されている。内面は使用により摩滅している。
8.8		灰褐色	灰褐色	ナデ	ナデ 回転糸切り	内面は器壁が剥落しており、調整はほとんどわからない。底面は回転糸切りを行ったのち、比較的丁寧にナデしている。周縁もナデ調整が施され、体部との境はわずかに段になっている。
		黄灰色	暗灰色	ナデ	平行タタキ目	瓦質の甕である。外面には幅3～4mmほどの平行タタキ目がみられる。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	直線的な口縁部で、端部はわずかに外反し、先端は丸くおさめている。

第7表 鏡遺跡群出土中世須恵器一覽表 (3)

	挿図番号	写真番号	遺跡名	地区	小区	出土地点	破片数	種類	器種	残存部位	口縁形態	復元口径 (cm)	
35	第6図21	図1-4-7 図2-4-2	鏡 西 谷 遺 跡	C 地 区	F・G- 3・4	S B 01	1		埴	底部			
36	第7図22	図2-1-1			F 3	S B 01	1	亀山焼	捏鉢	口縁部～体部			30.9
37	第7図23	図2-1-2			G・H 2	S B 01	1	亀山焼	捏鉢	体部～底部			
38	第7図24	図2-1-4			G・H 2	S B 01	1	亀山焼	捏鉢	底部			
39	第7図25	図2-1-3			G・H 2	S B 01	1	亀山焼	捏鉢	底部			
40	第7図26	図2-1-6			H 2	S B 01	1	亀山焼	甕	頸部～体部			
41	第7図27	図2-1-7			H 2	S B 01	1	亀山焼	甕	体部			
42	第7図28	図2-1-5			A1・2 H・ I - 3・4	S B 01	2	亀山焼	甕	口縁部			30.0
43	第8図29	図3-1-1			A - 2 C - 1・2	西北部	2	東播系	捏鉢	口縁部		B	28.0
44	第8図30	図3-1-2			B 1・2	西北部	1	東播系	捏鉢	口縁部		C	29.0
45	第8図31	図3-1-3			G 5	東南部	1	東播系	捏鉢	口縁部		A	30.0
46	第8図32	図3-1-4			排土		1	東播系	捏鉢	口縁部		B	23.2
47	第8図33	図3-1-5			E 4・5	東南部	1	東播系	捏鉢	口縁部～体部		A (B?)	
48	第8図34	図3-1-6			C 1・2	西北部	1	東播系	捏鉢	口縁部～体部		A	
49	第8図35	図3-1-7	D 5	西南部	1	東播系	捏鉢	口縁部		B	18.8		

復元底径 (cm)	器高 (cm)	色 調		調 整		備 考
		内面	外面	内面	外面	
4.8		暗灰褐色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ ナデ 回転糸切り	底部は回転糸切りの後に高台を貼り付けている。高台はナデ調整によって外側へと広がる断面三角形形状である。高台周縁は比較的丁寧にナデ調整されている。
		灰白色	暗灰色	ナデ	ナデ 指頭調整	口縁部は肥厚せず、断面方形形状である。端面はわずかに丸みをもつ。内面のナデ調整は丁寧であるが、外面はやや粗い。
9.8		暗灰色	灰白色	回転ナデ ナデ	ナデ ヘラ削り	内面は磨減しており、比較的丁寧に回転ナデが施されているが、見込み付近にはやや強めのヨコナデ調整がみられる。外面には底部から上方にむけて縦方向のナデ調整が、体部には板状工具によるものと思われる横方向のケズリがみられる。底面の調整は不明である。
		灰白色	灰白色	ナデ	ヘラ削り・ナデ・ 指頭調整	底部付近には横方向のヘラケズリがみられる。内面は摩滅している。底面は剥落している。
		灰白色	暗灰色	ナデ	ヘラ削り・ナデ・ 指頭調整	底部付近では横方向のヘラケズリによって段がついている。内面は摩滅している。23と同一個体の可能性がある。
		暗灰褐色	暗灰色	ナデ	ナデ 指頭調整 格子タタキ目	内面は当て具痕が丁寧にナデ消されている。外面は幅4mmほどの正方形に近い格子タタキ目がみられる。器壁の厚さは0.6cm～1.2cmである。
		暗灰色	暗灰色	ナデ 青海波文	格子目タタキ目	外面には幅5mmほどの格子タタキ目が全体にみられるが、タタキは浅い。内面には当て具痕が残るが、一部ナデ消されている部分もある。器壁の厚さは1.3～1.8cmである。
		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	格子タタキ目 回転ナデ	口縁端面はほぼ平坦である。内面口縁直下はわずかに窪む。外面は回転ナデ調整されているが、格子タタキ目がわずかに残っている。
		暗灰褐色	暗灰褐色	回転ナデ ナデ	回転ナデ	口縁端部は上方に拡張し、口縁下端はナデ調整によって外側へわずかに突出する。端面はわずかに窪み、先端は尖り気味である。
		暗灰白色	灰褐色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	口縁端部は上方に拡張し、先端は丸みを帯びている。端面は丸みもち、口縁下は突出せず、なだらかに体部へと続いている。内面口縁直下は稜をもつ。内面には凹凸がみられる。
		灰褐色	暗灰褐色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	口縁端部は上方に拡張し、端面はわずかに窪む。先端はやや尖り気味である。外面口縁直下はナデ調整によってわずかに窪む。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	口縁端部は上方へ拡張し、下端はナデ調整によってわずかに突出する。先端は丸く、端面は平坦である。内面口縁直下はわずかに窪むが、外面は直線的である。
		暗灰褐色	暗灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	口縁部は上方に拡張し、先端は尖り気味である。端面はわずかに窪んでいる。口縁下端はナデ調整によって突出し、丸くふくらむ。内面口縁直下は稜をもつ。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	口縁端部は上方に拡張し、先端は丸みを帯びている。端面は平坦である。内外面ともに口縁直下は平滑である。口縁部から一度屈曲して体部へとつづいている。
		黄灰褐色	黄灰褐色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	やや小型の鉢で、口縁端部は上方に拡張し、先端は丸くおさめている。端面はわずかに丸みをもつ。内面口縁直下は稜をもつ。

第8表 鏡遺跡群出土中世須恵器一覽表(4)

	挿図番号	写真番号	遺跡名	地区	小区	出土地点	破片数	種類	器種	残存部位	口縁形態	復元口径(cm)	
50	第8図36	図3-1-8	鏡 西 谷 遺 跡	C	C1・2	西北部	1	東播系	捏鉢	底部			
51	第8図37	図3-1-9			D1・2	西北部	1	東播系	捏鉢	底部			
52	第8図38	図3-1-11			G5	東南部	1	東播系	甕	体部			
53	第8図39	図3-1-10			A2	西北部	1	東播系	甕	体部			
54	第9図40	図3-2-1			B3	西北部	1	亀山焼	甕	口縁部			30.0
55	第9図41	図3-2-2			A2・3・ 4・5	西北部	1	亀山焼	甕	口縁部			32.6
56	第9図42	図3-2-3			B3	西北部	2	亀山焼	甕	底部			
57	第9図43	図3-2-4			D1・2	西北部	1			甕もしくは壺	体部		
58					A2・3・ 4・5	西北部	1	亀山焼	甕	体部			
59		図3-3-9			A2・3・ 4・5	西北部	1	亀山焼	甕	体部			
60		図3-3-1			B1・2	西北部	1	東播系	捏鉢	口縁部		C	
61		図3-3-2			B1・2	西北部	1	東播系	捏鉢	体部			
62		図3-3-7			B1・2	西北部	1	亀山焼	甕	口縁部			30.0
63		図3-3-10			B1・2	西北部	1	亀山焼	甕	体部			
64		図3-3-12			A2	西北部	1	亀山焼	甕	体部			
65		図3-3-11	B1・2	西北部	1	亀山焼	甕	体部					

復元底径 (cm)	器高 (cm)	色 調		調 整		備 考
		内面	外面	内面	外面	
		暗灰色	暗灰色	ナデ	回転ナデ・ナデ	底部と体部の境は丁寧にナデ調整され、丸みをおびている。内面は使用により摩滅している。
		黄灰褐色	黄灰褐色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	底部から体部へは内湾しながらちあがり、体部周縁付近の調整はあまり丁寧ではない。内面は使用により摩滅している。
		灰白色	灰白色	ナデ	平行タタキ目	軟質で、外面には全体に平行タタキ目がみられるが、一部はナデ調整が施されている。タタキ目の幅は約6mmである。内面は風化しており不明瞭。
		暗灰褐色	暗灰色	ナデ	平行タタキ目	外面には幅5mmほどの平行タタキ目がみられ、一部は縦方向と横方向のタタキが重なって格子状になっている。内面には布でナデたような調整がみられる。
		暗灰色	暗灰色	ナデ	格子タタキ目 ナデ	口縁部は断面方形状で、端面はほぼ平坦である。外面の格子タタキ目はナデ消されているが、わずかに残っている。
		暗灰色	暗灰色	ナデ	ナデ 格子タタキ目	口縁部は断面方形状で、外面の格子タタキ目はナデ消されているが、わずかに残っている。内面の当て具痕は丁寧にナデ消されている。
19.8		暗灰色	暗灰色	ナデ	格子タタキ目 ヘラ削り	底面はナデ調整で、底部周縁には横方向のヘラ削りがみられる。外面には幅5.5mmほどの格子タタキ目がみられるが、タタキは浅い。内面は当て具痕が丁寧にナデ消されている。器壁の厚さは0.7～1.2cmである。
		灰色	灰色	ナデ	平行タタキ目 ナデ	外面には平行タタキ目がみられ、タタキ目内には細かい櫛状の模様が見られる。内面は丁寧にナデ調整されている。非常に焼成が良い。
		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	ナデ 格子タタキ目	外面には幅6mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されている。厚さは約1.2cmである。
		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	ナデ 格子タタキ目	外面には幅6.5mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約0.6cmである。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ ナデ	回転ナデ	口縁端部は上方に拡張し、先端は丸みを帯びている。端面は丸みをもち、口縁下端は突出せずなだらかに体部へと続いている。内面口縁直下は稜をもつ。内面には凹凸がみられる。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	捏鉢の小片である。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	口縁端面はわずかに窪み、外面には格子タタキ目がわずかに残っている。
		暗灰褐色	暗灰褐色		格子タタキ目	外面の格子タタキ目は非常に浅く、不揃いである。やや瓦質で、内面は器表が剥落している。器壁の厚さは約1.2cmである。
		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には格子タタキ目がみられ、幅6mmほどの正方形に近い部分と、5×7mmほどの長方形の部分がある。内面の当て具痕は丁寧にナデ消されている。器壁の厚さは約1.3cmである。
		暗灰褐色	灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅4～5mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約0.7cmである。

第9表 鏡遺跡群出土中世須恵器一覽表(5)

	挿図番号	写真番号	遺跡名	地区	小区	出土地点	破片数	種類	器種	残存部位	口縁形態	復元口径(cm)
66		図3-3-13	鏡 西 谷 遺 跡	C	B 1・2	西北部	1	亀山焼	甕	体部		
67		図3-3-14			B 1・2	西北部	1	亀山焼	甕	体部		
68		図3-3-15			B 1・2	西北部	2	亀山焼	甕	体部		
69		図3-3-16			B 2	西北部	1	亀山焼	甕	体部		
70		図3-4-1			B 3	西北部	2	亀山焼	甕	体部		
71		図3-4-2			B 3・4	西北部	4	亀山焼	甕	体部		
72		図3-3-17			B 4	西北部	1	亀山焼	甕	体部		
73		図3-3-18			B・C - 4・5	西北部	1	亀山焼	甕	体部		
74		図3-4-3			B・C - 4・5	西北部	1	亀山焼	甕	体部		
75		図3-3-5			C 1・2	西北部	1	東播系	捏鉢	底部		
76		図3-4-9			C 1・2	西北部	4	亀山焼	甕	体部		
77		図3-4-4			C 1・2	西北部	1	亀山焼	甕	体部		
78		図3-4-5			C 1・2	西北部	1	亀山焼	甕	体部		
79		図3-4-6			C 1・2	西北部	1	亀山焼	甕	体部		
80		図3-4-7			C 1・2	西北部	1	亀山焼	甕	体部		
81		図3-4-10			C 3	西北部	1	亀山焼	甕	体部		
82		図3-4-11			C 3	西北部	1	亀山焼	甕	体部		

復元底径 (cm)	器高 (cm)	色 調		調 整		備 考
		内面	外面	内面	外面	
		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅6mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約1.1cmである。
		暗灰色	暗灰色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅5mmほどの格子タタキ目がみられる。一部5×8mmほどの長方形の格子目部分のみみられる。内面の当て具痕はナデ消されている。
		灰褐色	灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅5mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されている。
		黒褐色	橙褐色	ナデ	格子タタキ目	非常に瓦質で、外面の格子タタキ目は不明瞭である。内面には同心円状の当て具痕が一部みられる。器壁の厚さは約0.7cmである。
		暗灰褐色	灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅5～6mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約1.2cmである。
		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	格子タタキ目 ナデ	外面には幅3mmほどの格子タタキ目がみられる。一部に強いナデ調整がみられる。内面の当て具痕は丁寧にナデ消されている。器壁の厚さは約0.7cmである。
		灰褐色	灰色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅3mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕は丁寧にナデ消されている。器壁の厚さは約0.7cmである。
		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	ナデ 格子タタキ目	外面には幅6mmほどの格子タタキ目がみられる。器壁の厚さは約1.0cmである。
		暗灰褐色	暗灰色	ナデ	ナデ 格子タタキ目	外面には幅6mmほどの格子タタキ目がみられる。器壁の厚さは約1.4cmである。
		灰褐色	灰褐色	ナデ	回転ナデ ナデ	底部と体部の境には段差が残り、ナデ調整はあまり丁寧にない。
		暗灰色	暗灰色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅3～4mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕は丁寧にナデ消されている。器壁の厚さは約1cmである。
		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅3～4mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕は丁寧にナデ消されている。器壁の厚さは約1cmである。
		暗灰色	暗灰色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅3～4mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕は丁寧にナデ消されている。器壁の厚さは約0.8cmである。
		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅3mmほどの正方形に近い格子タタキ目と、1×4mmほどの長方形の格子タタキ目部分のみみられる。内面の当て具痕は丁寧にナデ消されている。器壁の厚さは約0.8cmである。
		暗灰褐色	暗灰色	ナデ	格子タタキ目	瓦質で、外面には幅3mmほどの格子タタキ目がみられるが不明瞭である。器壁の厚さは約0.8cmである。
		暗灰色	暗灰色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅3～4mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕は丁寧にナデ消されている。器壁の厚さは約1.2cmである。
		暗灰色	暗灰色	ナデ	格子タタキ目 ナデ	外面には幅3～4mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕は丁寧にナデ消されている。器壁の厚さは約1.2cmである。

第 10 表 鏡遺跡群出土中世須恵器一覽表 (6)

	挿図番号	写真番号	遺跡名	地区	小区	出土地点	破片数	種 類	器種	残存部位	口縁形態	復元口径 (cm)
83		図 3 - 3 - 6	鏡 西 谷 遺 跡	C 地 区	C 3	西北部	1		甕もしくは壺	体部		
84		図 3 - 3 - 12			C・D-1・2	西北部	2	亀山焼	甕	体部		
85		図 3 - 4 - 13			C・D-1・2	西北部	1	亀山焼	甕	体部		
86		図 3 - 4 - 8			C・D-1・2	西北部	1	亀山焼	捏鉢	体部		
87		図 3 - 4 - 14			C・D-3・4	西北部	2	亀山焼	甕	体部		
88		図 3 - 4 - 19			C・D-3・4	西北部	1	亀山焼	甕	体部		
89		図 3 - 4 - 15			D 3	西北部	1	亀山焼	甕	体部		
90		図 3 - 4 - 16			C 3	西北部	1	亀山焼	甕	体部		
91		図 3 - 4 - 21			D 3	西北部	1	亀山焼	甕	体部		
92		図 3 - 4 - 17			D 3	西北部	1	亀山焼	甕	体部		
93		図 3 - 3 - 3			E 4・5	東南部	1	東播系か	鉢?	体部		
94		図 3 - 4 - 18			C・D・E・F-3・4	中央部	1	亀山焼	甕	体部		
95		図 3 - 3 - 4			E・F-3	中央部	1	東播系	捏鉢	体部		
96		図 3 - 4 - 20			F 3	S B 01	1	亀山焼	甕	体部		
97		図 2 - 2 - 9			F・G-1・2	S B 01	2	東播系	捏鉢	体部		
98		図 2 - 2 - 8			F・G-2	S B 01	1	東播系	捏鉢	体部		
99		図 2 - 2 - 10			F・G-3・4	S B 01	1	東播系	捏鉢	体部		
100		図 2 - 3 - 6			F・G-3・4	S B 01	1	亀山焼	甕	体部		
101		図 2 - 2 - 11			G 2	S B 01	1	東播系	捏鉢	体部		
102		図 2 - 2 - 3			G 2	S B 01	1	東播系	捏鉢	口縁部	不明	
103		図 2 - 2 - 7	G 2	S B 01	1	東播系	捏鉢	底部				
104		図 2 - 2 - 12	G 2	S B 01	1	東播系	捏鉢	体部				

復元 底径 (cm)	器高 (cm)	色 調		調 整		備 考
		内面	外面	内面	外面	
		灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	硬質で、内面には二次焼成による火はねのような跡がみられる。
		灰色	灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅2～3mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されているが、わずかに痕が残る。器壁の厚さは約0.5cmである。格子目タタキは浅い。
		灰色	灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅2～3mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されているが、わずかに痕が残る。器壁の厚さは約0.5cmである。格子目タタキは浅い。
		灰白色	暗灰色	ナデ	ナデ	非常に瓦質である。
		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	ナデ 格子タタキ目	外面には幅6mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約0.8cmである。
		暗灰色	暗灰色	ナデ	ナデ 格子タタキ目	外面には幅6mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約1.0cmである。
		黄灰褐色	暗灰褐色	ナデ	格子タタキ目 ナデ	やや軟質の破片で、わずかにタタキ目が確認できるが非常に薄い。
		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅5mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約0.6cmである。
		暗灰色	暗灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には格子タタキ目がみられ、幅3mmほどの正方形に近い部分と、2×4mmほどの長方形の部分がある。内面の当て具痕は丁寧にナデ消されている。器壁の厚さは約1.1cmである。
		黄灰色	黒褐色	ナデ	格子タタキ目	非常に瓦質で、外面には幅3mmほどの格子タタキ目がみられる。器壁の厚さは約0.7cmである。
		黄灰褐色	黄灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	内面には摩滅した部分が見られる。
		暗灰褐色	暗灰褐色		ナデ 格子タタキ目	外面には幅6mmほどの格子タタキ目がみられる。内面は剥落している。
		暗灰褐色	暗灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	内面は摩滅している。
		暗灰色	暗灰色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅6mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約1.0cmである。
		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	回転ナデ・ナデ	内面は使用により摩滅している。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	捏鉢の小片である。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	内外面ともに凹凸はほとんどない。
		灰色	灰色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅5mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約0.5cmである。
		暗灰色	暗灰色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	器壁の厚さは約0.5cmで、薄手のつくりである。
		暗灰色	暗灰色	回転ナデ ナデ	回転ナデ・ナデ・ 指頭調整	片口部分の破片である。口縁部は上方に拡張し、端部はとがり気味である。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ・ナデ	回転糸切り・ナデ	底面は平坦である。
		暗灰色	暗灰色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	捏鉢の小片である。

第 11 表 鏡遺跡群出土中世須恵器一覽表 (7)

挿図番号	写真番号	遺跡名	地区	小区	出土地点	破片数	種 類	器種	残存部位	口縁形態	復元口径 (cm)
105	図 2 - 2 - 2	鏡 西 谷 遺 跡	C 地 区	G 2	S B 01	1	東播系	捏鉢	口縁部	A	
106	図 2 - 2 - 13			G 2	S B 01	1	東播系	捏鉢	体部		
107	図 2 - 2 - 14			G 2	S B 01	1	東播系	捏鉢	体部		
108	図 2 - 2 - 15			G 2	S B 01	1	東播系	捏鉢	体部		
109	図 2 - 3 - 1			G 2	S B 01	1	亀山焼	捏鉢	口縁部		
110	図 2 - 3 - 7			G 2	S B 01	1	亀山焼	甕	体部		
111	図 2 - 3 - 5			G 2	S B 01	1	亀山焼	甕	体部		
112	図 2 - 3 - 8			G 2	S B 01	1	亀山焼	甕	体部		
113	図 2 - 3 - 9			G 2	S B 01	1	亀山焼	甕	体部		
114	図 2 - 4 - 3			G 2	S B 01	1		塊もしくは坏	体部		
115	図 2 - 3 - 10			G - 2 - 3	S B 01	1	亀山焼	甕	体部		
116	図 2 - 4 - 4			G - 2 - 3 - 4	S B 01	2		坏	底部		
117	図 2 - 2 - 16			G 3	S B 01	1	東播系	捏鉢	体部		
118	図 2 - 2 - 17			G 3	S B 01	1	東播系	捏鉢	体部		
119	図 2 - 2 - 18			G 3	S B 01	1	東播系	捏鉢	体部		
120	図 2 - 3 - 11			G 3	S B 01	1	亀山焼	甕	体部		
121	図 2 - 2 - 22			G · H 2	S B 01	1	東播系	甕	体部		
122	図 2 - 2 - 23			G · H 2	S B 01	1	東播系	甕	口縁部		
123	図 2 - 3 - 12			G · H 2	S B 01	1	亀山焼	甕	体部		
124	図 2 - 2 - 19			H 2	S B 01	1	東播系	捏鉢	体部		
125	図 2 - 2 - 1			H 2	S B 01	1	東播系	捏鉢	口縁部～体部	B	
126	図 2 - 2 - 4			H 2	S B 01	2	東播系	捏鉢	口縁部	B	

復元底径 (cm)	器高 (cm)	色 調		調 整		備 考
		内面	外面	内面	外面	
		暗灰褐色	暗灰褐色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	片口部分の破片である。口縁部は上方に拡張し、先端は丸く納めている。
		灰白色	灰白色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	東轡系の鉢の破片と思われる。
		灰白色	灰白色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	東轡系の鉢の破片と思われる。
		暗灰色	暗灰色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	外面には縦横方向にナデ調整がみられ、内面は摩滅している。
		灰白色	灰白色	ナデ	ナデ・指頭調整	外反する口縁部で、断面方形状を呈している。
		灰褐色	灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅4～5mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されているが、わずかに痕が残る。器壁の厚さは約0.4cmである。
		灰褐色	灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅5mmほどの格子タタキ目がみられるが、非常に瓦質で器表が剥落しており、不明瞭である。器壁の厚さは約0.9cmである。
		暗灰色	暗灰色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅7mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約1.0cmである。
		黄灰褐色	黒褐色		格子タタキ目	外面には幅6.5mmほどの格子タタキ目がみられる。内面は器表が剥落しており、調整等は不明。瓦質である。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	底部付近の破片で、焼成がよい。
		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	ナデ 格子タタキ目	外面には幅6mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約1.0cmである。
8		灰褐色	灰褐色	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	底面は比較的丁寧にナデ調整されているが、粘土紐を巻いた痕跡が残る。軟質で焼成はあまい。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ・指頭調整	内面は摩滅している。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	内面は摩滅している。
		黄灰褐色	黄灰褐色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	内面は摩滅している。
		灰色	灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅4mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約0.3cmである。
		暗灰色	暗灰色	ナデ	平行タタキ目	瓦質の甕である。外面には幅3mmほどの平行タタキ目がみられる。
		灰褐色	灰白色			非常に瓦質で、内外面ともに器表が剥落しており、詳細は不明。121と一緒に出土しており、東轡系の甕と考えられる。
		灰褐色	灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅6mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約1.0cmである。
		暗灰色	暗灰色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	捏鉢の小片である。
		灰褐色	暗灰色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	瓦質の捏鉢で、口縁部は上方に拡張しており、端部は面を持つ。口縁下端はナデ調整によって突出している。体部は凹凸がほとんどなく、直線的である。
		暗灰褐色	暗灰褐色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	口縁部は上方に拡張し、口縁下端はナデ調整によって突出する。先端は丸みをおび、端面は窪んでいる。内面口縁直下は稜をもつ。

第 12 表 鏡遺跡群出土中世須恵器一覽表 (8)

	挿図番号	写真番号	遺跡名	地区	小区	出土地点	破片数	種類	器種	残存部位	口縁形態	復元口径 (cm)	
127		図 2 - 2 - 5	鏡 西 谷 遺 跡	C 地 区	H 2	S B 01	1	東播系	捏鉢	口縁部	A		
128		図 2 - 2 - 24			H 2	S B 01	1	東播系	甕	体部			
129		図 2 - 2 - 25			H 2	S B 01	1	東播系	甕	体部			
130		図 2 - 2 - 28			H 2	S B 01	2	東播系	甕	体部			
131		図 2 - 2 - 29			H 2	S B 01	1	東播系	甕	体部			
132		図 2 - 3 - 2			H 2	S B 01	1	亀山焼	捏鉢	体部			
133		図 2 - 3 - 3			H 2	S B 01	2	亀山焼	捏鉢	体部			
134		図 2 - 3 - 13			H 2	S B 01	1	亀山焼	甕	体部			
135		図 2 - 3 - 14			H 2	S B 01	1	亀山焼	甕	体部			
136		図 2 - 3 - 15			H 2	S B 01	2	亀山焼	甕	体部			
137		図 2 - 3 - 16			H 2	S B 01	1	亀山焼	甕	体部			
138		図 2 - 3 - 17			H 2	S B 01	1	亀山焼	甕	体部			
139					H 2	S B 01	1			体部			
140					H 2	S B 01	1			体部			
141					H 2	S B 01	1			体部			
142					H 2	S B 01	1			体部			
143		図 2 - 2 - 26			H 3	S B 01	1	東播系	甕	体部			
144		図 2 - 2 - 27			H 3	S B 01	1	東播系	甕	体部			
145					H 3	S B 01	1			体部			
146		図 2 - 2 - 6			H・1-3・4	S B 01	1	東播系	捏鉢	口縁部		B	
147		図 2 - 3 - 4	H・1-3・4	S B 01	1	亀山焼	甕	頸部					
148			F 3	S B 01	1			体部					

復元 底径 (cm)	器高 (cm)	色 調		調 整		備 考
		内面	外面	内面	外面	
		灰褐色	暗灰色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	捏鉢の小片で、口縁端部はとがり気味である。口縁下端は突出し、丸くふくらみをもつ。
		暗灰色	暗灰色	ナデ	平行タタキ目	瓦質で、外面には幅5mmほどの平行タタキ目がみられる。
		灰褐色	暗灰色	ナデ	平行タタキ目	小片。瓦質で器表が剥落している。
		灰褐色	暗灰色	ナデ	平行タタキ目	瓦質で外面には幅4mmほどの平行タタキ目がみられる。内面は器表が剥落し、外面も不明瞭である。
		灰白色	暗灰色	ナデ	格子タタキ目	外面にはわずかに格子タタキ目のようなのがみられるが、非常に瓦質で摩滅しており、詳細は不明。
		灰白色	灰白色	ナデ	ナデ・指頭調整	瓦質で、内面は摩滅している。
		灰白色	灰白色	ナデ	ナデ	瓦質で、内外ともに器表が剥落している。
		灰色	灰色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅5mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されているが、わずかに痕が残る。器壁の厚さは薄いところで約0.5cm、厚いところで約1.1cmである。
		灰色	灰色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅4mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されているが、わずかに痕が残る。器壁の厚さは薄いところで約0.7cm、厚いところで約1.2cmである。
		灰色	灰色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅4mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されているが、わずかに痕が残る。器壁の厚さは約0.7cmである。
		暗灰色	暗灰色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅6mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約1.0cmである。
		橙褐色	暗褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅4mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約0.5cmである。
		灰褐色	灰褐色			瓦質土器の小片である。詳細は不明。
		灰褐色	灰褐色			瓦質土器の小片である。詳細は不明。
		灰褐色	灰褐色			瓦質土器の小片である。詳細は不明。
		暗灰色	暗灰色			瓦質土器の小片である。詳細は不明。
		灰褐色	灰色	ナデ		東幡系の甕と思われるが、瓦質で器表も剥落しており、詳細は不明である。
		灰褐色	灰色	ナデ	平行タタキ目	外面には幅4mmほどの平行タタキ目がみられる。
		灰褐色	灰褐色			瓦質土器の小片である。詳細は不明。
		暗灰色	暗灰色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ ナデ	口縁部は上方に拡張し、上端部は丸みをおびた方形状で、面をもつ。端面は平坦である。口縁下端はナデ調整によって突出し、体部との境は凹線状となっている。
		灰色	暗灰褐色	ナデ	格子タタキ目 ナデ	外面はナデ調整が施されているが、わずかに格子タタキ目が残っている。内面の当て具痕は丁寧にナデ消されている。
		灰褐色	灰褐色			瓦質土器の小片である。詳細は不明。

第13表 鏡遺跡群出土中世須恵器一覽表 (9)

挿図番号	写真番号	遺跡名	地区	小区	出土地点	破片数	種類	器種	残存部位	口縁形態	復元口径 (cm)	
149	図2-3-18	鏡 西 谷 遺 跡	C 地 区	G・H・I3・4	S B 01	1	亀山焼	甕	体部			
150	図2-3-19			G・H・I3・4	S B 01	1	亀山焼	甕	体部			
151				G・H・I3・4	S B 01	1						
152	図2-2-20			G~L 2	S B 01	1	東播系	捏鉢	体部			
153	図2-2-21			G~L 2	S B 01	1	東播系	捏鉢	体部			
154	図4-1-7			G 5	東南部	1	東播系	甕	体部			
155	図4-1-3			G 5	東南部	1	東播系	甕	体部			
156	図4-1-4			G 5	東南部	1	東播系	甕	体部			
157	図4-1-6			G 5	東南部	1	東播系	甕	体部			
158	図4-1-8			G 5	東南部	1	東播系	甕	体部			
159	図4-1-9			G 5	東南部	1	東播系	甕	体部			
160	図4-1-10			G 5	東南部	2	東播系	甕	体部			
161	図4-1-11			G 5	東南部	1	亀山焼	甕	体部			
162	図4-1-12			H・I-5	東南部	1		甕もしくは壺	体部			
163	図4-1-1			排土		1	東播系	捏鉢	口縁部	D		
164	図4-1-2			排土		1	東播系	捏鉢	口縁部	A		
165	図4-1-5			排土		1	東播系	甕	体部			
166	第11図44			図4-2-14	C 3・4		1	亀山焼	甕	体部		
167	第11図45			図4-2-1	B・C-5・6		1		坏	口縁部		
168	第11図46			図4-2-2	A 5・6		1		坏か	口縁部		
169	第11図47	図4-2-3	B・C-5・6		1		坏	口縁部				
170	第11図48	図4-2-4	B・C-5・6		1		坏	口縁部				
171	第11図49	図4-2-6	B・C-5・6		1		坏	口縁部				
172	第11図50	図4-2-7	B・C-5・6		1		坏	口縁部				
173	第11図51	図4-2-5	B・C-5・6		1		坏	口縁部				
174	第11図52	図4-2-11	B 5		1		坏	底部				

復元 底径 (cm)	器高 (cm)	色 調		調 整		備 考
		内面	外面	内面	外面	
		暗灰色	暗灰色	ナデ	ナデ 格子タタキ目	外面には幅5.5mmほどの格子タタキ目がみられる。器壁の厚さは約0.9cmである。
		暗灰色	暗灰色	ナデ	ナデ 格子タタキ目	外面には幅5mmほどの格子タタキ目がみられる。器壁の厚さは約0.7cmである。
		灰褐色	暗灰褐色			瓦質土器の小片である。詳細は不明。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	東轆系捏鉢の小片である。
		暗灰色	暗灰色	ナデ	回転ナデ・ナデ	内面は使用により摩滅している。
		灰褐色	灰色	ナデ	平行タタキ目	外面には幅6mmほどの平行タタキ目がみられる。
		灰褐色	灰色	ナデ	平行タタキ目	外面には幅6mmほどの平行タタキ目がみられる。
		灰褐色	灰色	ナデ	平行タタキ目	外面には幅6mmほどの平行タタキ目がみられる。
		灰褐色	灰色	ナデ	平行タタキ目	外面には幅6mmほどの平行タタキ目がみられる。
		灰褐色	灰色	ナデ	平行タタキ目	外面には幅6mmほどの平行タタキ目がみられる。
		灰褐色	灰色	ナデ	平行タタキ目	外面には幅6mmほどの平行タタキ目がみられる。
		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	平行タタキ目	外面には幅5mmほどの平行タタキ目がみられる。
		暗灰色	暗灰色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅6mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約1.2cmである。
		灰色	灰色	回転ナデ	ナデ	硬質で、外面には二次焼成による火はねのような跡がみられる。
		暗灰褐色	暗灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	口縁端部は上方に大きく拡張し、先端は丸みを帯びている。端面は丸みもち、拡張させた際の粘土の接合痕が残る。内面口縁直下は稜を持つ。
		灰褐色	暗灰褐色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ ナデ	口縁部は上方に拡張し、端部は丸くおさめている。端面はわずかに窪む。口縁下端から直線的に体部へとつづいている。
		灰褐色	灰色		平行タタキ目	外面には幅4mmほどの平行タタキ目がみられる。
		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅3～4mmほどの格子タタキ目がみられる。
		暗灰色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ 指頭調整	口縁部は膨らみもち、端部は丸くおさめている。口縁部と体部の境は強いナデによって屈曲する。内面にはナデ調整による凹凸がみられる。
		暗灰色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	口縁部は膨らみもち、端部は丸くおさめている。口縁部と体部の境はわずかに屈曲する。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	直線的な口縁部で、端部は丸くおさめている。
		暗灰色	灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	直線的な口縁部で、端部は先細り気味であるが丸くおさめている。
		暗灰色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	比較的直線的な口縁部で、端部は丸くおさめている。外面にはナデ調整による凹凸がみられる。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	口縁端部は面を持ち、ナデ調整によってわずかに窪んでいる。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	口縁部はわずかに屈曲しながら体部へとつづく。端部は面を持ち、ナデ調整によってわずかに窪んでいる。
6.4		灰褐色	灰褐色	回転ナデ	ナデ	比較的平坦な底面もち、おそらくヘラ切りと思われるが、丁寧にナデ調整されている。底部周縁も丁寧にナデ調整が施されている。

第 14 表 鏡遺跡群出土中世須恵器一覽表 (10)

挿図番号	写真番号	遺跡名	地区	小区	出土地点	破片数	種 類	器種	残存部位	口縁形態	復元口径 (cm)		
175	第 11 図 53	図 4 - 2 - 13	鏡 西 谷 遺 跡	D 地 区		4		坏	体部～底部				
176		図 4 - 2 - 12					1		坏	底部			
177		図 4 - 2 - 8				A・B-5・6		1		坏	体部		
178		図 4 - 2 - 9				B 2		1		坏	口縁部	A	
179		図 4 - 2 - 10				B 2・3		1		坏	口縁部		
180						B 2・3		1		坏办	体部		
181	第 12 図 54	図 4 - 3 - 1		E 地 区	DE C・D-1・2		2	東播系	捏鉢	口縁部	C	29.4	
182	第 12 図 55	図 4 - 3 - 5			D 3・4		2	東播系	捏鉢	体部～底部			
183	第 12 図 56	図 4 - 3 - 6			C 3・4		1	東播系	甕	体部			
184	第 12 図 57	図 4 - 4 - 1			E 2		3	龟山烧	甕	体部			
185		図 4 - 3 - 2			A・B・C・D-1・2		1	東播系	捏鉢	体部			
186		図 4 - 3 - 7			A・B・C・D-1・2		1	東播系	甕	体部			
187					A・B・C・D-1・2		1			体部			
188		図 4 - 4 - 2			B 3		1	龟山烧	甕	体部			
189		図 4 - 3 - 8			B 3・4		1	東播系	甕	体部			
190		図 4 - 3 - 3			C 1・2		1	東播系	捏鉢	体部			
191		図 4 - 4 - 4			C 2		1			体部			
192		図 4 - 3 - 9			C 3・4		1	東播系	甕	体部			
193		図 4 - 3 - 10			C 3・4		1	東播系	甕	体部			
194		図 4 - 4 - 3			C・D-2		1	龟山烧	甕	体部			
195		図 4 - 3 - 11	C・D-3・4		1	東播系	甕	体部					
196			C・D・ E - 1・ 2		1	龟山烧	甕	体部					

復元底径 (cm)	器高 (cm)	色 調		調 整		備 考
		内面	外面	内面	外面	
6.7		灰褐色	灰褐色	回転ナデ	回転ナデ ナデ ヘラ切り	底面は比較的平坦であるが、成形の際の粘土紐の接合痕が残っている。ヘラ切り後ナデ調整を行っているが、いずれの調整も粗雑である。底部周縁は比較的丁寧にナデられている。
		黄灰褐色	黄灰褐色	回転ナデ	ナデ	底面はほとんど調整されず、紐状の粘土を巻いた痕跡をよく残している。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	小片。回転ナデによる稜がみられる。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	先端は丸くふくらみ、端部は丸くおさめている。
		暗灰色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	先端は丸くふくらみ、端部は丸くおさめている。口縁部外面直下で一度屈曲し、体部へとつづく。
		暗灰褐色	暗灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	小片。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ ナデ	口縁端部は上方に拡張し、先端は丸みを帯びている。端面はわずかに丸く、なだらかに体部へと続いている。内面口縁直下は比較的なだらかで直線的である。
9		灰褐色	灰褐色	ナデ	回転ナデ ナデ	底部から内湾しながら体部へとつづく。底部周縁は丁寧にナデ調整が施され、底面の糸切り痕もナデ消されている。内面は使用により摩滅している。
		灰褐色	暗灰色	ナデ	平行タタキ目	外面には幅2mmほどの平行タタキ目がみられ、タタキ目が一部交差して格子目状となっている。
		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅7mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約0.9cmである。
		暗灰褐色	暗灰褐色	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	内面は摩滅している。
		暗灰褐色	灰色	ナデ	平行タタキ目	平行タタキ目は縦横に交差して格子目状となっている。
		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	ナデ	東轆系の鉢かともおもわれるが、不明。
		暗灰色	暗灰色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅5.5mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約1.1cmである。
		暗灰褐色	灰色	ナデ	平行タタキ目	外面の平行タタキ目は縦横に交差して格子目状となっている。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	壺の可能性あり。
		暗灰褐色	暗灰褐色		ナデ	おそらく東轆系の甕と思われるが、内外ともに器表が剥落しており、詳細は不明である。
		暗灰褐色	灰色	ナデ	平行タタキ目	外面の平行タタキ目は縦横に交差して格子目状となっている。
		灰色	灰色	ナデ	平行タタキ目	外面の平行タタキ目は縦横に交差して格子目状となっている。
		暗灰色	暗灰色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅5.5mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約1.0cmである。
		灰褐色	灰色	ナデ	平行タタキ目	外面には幅6mmほどの平行タタキ目がみられる。
		灰褐色	灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅5mmほどの格子タタキ目がみられるが、器表は剥落している。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約1.1cmである。

第 15 表 鏡遺跡群出土中世須恵器一覽表 (11)

挿図番号	写真番号	遺跡名	地区	小区	出土地点	破片数	種類	器種	残存部位	口縁形態	復元口径 (cm)
197	図 4 - 4 - 5	鏡 西 谷 遺 跡	E 地 区	C・D・ E-1・2		1	亀山焼	甕	体部		
198	図 4 - 4 - 6			C・D・ E-1・2		1	亀山焼	甕	体部		
199				C・D・ E-1・2		1		甕もしくは壺	体部		
200	図 4 - 4 - 7			D 3		1	亀山焼	甕	体部		
201	図 4 - 3 - 12			D 3・4		1	東播系	甕	体部		
202	図 4 - 3 - 13			D 3・4		1	東播系	甕	体部		
203				D 3・4		1		甕	体部		
204				D 4		1	東播系	捏鉢	体部		
205	図 4 - 4 - 8			D 4		1	亀山焼	甕	体部		
206				D 4		1		甕	体部		
207	図 4 - 3 - 14			D・E-3		1	東播系	甕	体部		
208	図 4 - 4 - 9			D・E-3		1	亀山焼	甕	体部		
209				DE畦		1		甕?	体部		
210	図 4 - 3 - 15			E 2		1	東播系	甕	体部		
211	図 4 - 3 - 16			E 2		1	東播系	甕	体部		
212	図 4 - 4 - 10			E 2		1	亀山焼	甕	体部		
213				E 2		2			体部		
214	図 4 - 3 - 17			E 3		1	東播系	甕	体部		
215				E・F-3		1			体部		
216		E・F-4		1			体部				
217	図 4 - 4 - 17	F 5		1	亀山焼か	甕	体部				
218	図 4 - 3 - 4	D 5・6		1	東播系	捏鉢	体部				
219		西南部		1	亀山焼	甕	体部				

復元底径 (cm)	器高 (cm)	色 調		調 整		備 考
		内面	外面	内面	外面	
		灰褐色	灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅5mmほどの格子タタキ目がみられるが、器表は剥落している。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約0.9cmである。
		灰褐色	灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には格子タタキ目と思われる部分が見られるが、器表は剥落しており不明瞭。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約1.2cmである。
		灰色	灰色	ナデ	ナデ・指頭調整	産地不明の須恵器である。焼成がよく、硬質。
		灰褐色	灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅5mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約1.0cmである。
		灰褐色	暗灰色	ナデ	平行タタキ目	外面には平行タタキ目がみられるが、不明瞭である。
		暗灰褐色	灰色	ナデ	平行タタキ目	外面の平行タタキ目は縦横に交差して格子目状となっている。
		暗灰色	暗灰色	ナデ	ナデ	瓦質土器の小片で、詳細は不明である。
		灰褐色	灰褐色	ナデ	ナデ・指頭調整	捏録の小片で、内面は磨滅している。
		暗灰褐色	暗灰色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅5mmほどの格子タタキ目がみられるが、器表は剥落している。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約0.9cmである。
		灰褐色	灰褐色			東幡系の甕と思われるが、瓦質で器表も剥落しており、詳細は不明である。
		暗灰褐色	灰色	ナデ	平行タタキ目	外面の平行タタキ目は縦横に交差して格子目状となっている。
		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅6mmほどの格子タタキ目がみられるが、器表は剥落している。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約1.1cmである。
		暗灰褐色	暗灰色	ナデ	ナデ	瓦質土器片であるが、詳細は不明。
		暗灰褐色	灰色	ナデ	平行タタキ目	外面の平行タタキ目は縦横に交差して格子目状となっている。
		暗灰褐色	灰色	ナデ	平行タタキ目	外面の平行タタキ目は縦横に交差して格子目状となっている。
		暗灰褐色	灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には格子タタキ目がみられるが、器表は剥落しており不明瞭である。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約1.2cmである。
		暗灰色	暗灰色	ナデ	ナデ・指頭調整	瓦質土器片であるが、詳細は不明。
		暗灰褐色	灰色	ナデ	平行タタキ目	外面の平行タタキ目は縦横に交差して格子目状となっている。
		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ?	ナデ?	軟質で、器表も剥落しており詳細は不明。
		暗灰褐色	灰褐色	ナデ	ナデ	内外面ともに粗いナデ調整がみられる。
		黄灰褐色	暗灰褐色	ナデ	ナデ?	器表が剥落しており、詳細は不明。
		暗灰色	暗灰色	ナデ	回転ナデ・ナデ	内面は使用により磨滅している。
		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	格子タタキ目	外面には幅6mmほどの格子タタキ目がみられる。内面の当て具痕はナデ消されている。器壁の厚さは約1.0cmである。

第16表 鏡遺跡群出土中世須恵器一覽表 (12)

	挿図番号	写真番号	遺跡名	地区	小区	出土地点	破片数	種類	器種	残存部位	口縁形態	復元口径 (cm)	
220	第13図58	図5-1-5	鏡 西 谷 遺 跡	G 地 区	B 4		1	東播系	甕	体部			
221	第13図59	図5-1-4			C 5		1	東播系	甕	体部			
222	第13図60	図5-1-1			E 7		1	亀山焼	捏鉢	口縁部		30.0	
223		図5-1-2			C 4・5		1	東播系	甕	体部			
224		図5-1-3			2 F		1	東播系	甕	体部			
225	第15図61	図5-2-8	鏡 東 谷 遺 跡	北地区	C・D-6・7		1		壺	底部			
226	第15図62	図5-2-9		試掘			1		壺	底部			
227	第15図63	図5-2-5		南 地 区		C・D- 2・3		1	亀山焼	甕	肩部		
228	第15図64	図5-2-6				A・B- 2・3		1	亀山焼	甕	肩部		
229	第15図65	図5-2-4				F 4		1	東播系	甕	体部		
230	第15図66	図5-2-11				C・D-2・3		1		壺	底部		
231		図5-2-10				E・F・H・I		1		壺か	底部		
232		図5-2-12		試掘				1		甕もしくは壺	体部		
233		図5-2-1		第 4 地 点		No. 1 2 トレ北半		1	東播系	捏鉢	口縁部	A	
234		図5-2-7				No. 1 2 トレ北半		1	亀山焼	甕	体部		
235						No. 2 トレ北半		1		壺	体部		
236		図5-2-13				No. 3 1 トレ		1	東播系か	鉢か	体部		
237		図5-2-2				No. 5 1 トレ		1	東播系	捏鉢	口縁部	C	
238		図5-2-3			No. 5 1 トレ		1	東播系	捏鉢	体部			
252	第16図67	図5-3-1	鏡千人塚遺跡	広島県調査区		SS01	1	亀山焼	甕	口縁部～底部			
239	第18図68	図6-1-2	鏡 遺 跡 群	第 7 地 点		No. 7 3 トレ		1	東播系	甕	体部		
240	第18図69	図6-1-3				No. 10 2 トレ		1	東播系	甕	体部		
241	第18図70	図6-1-5				No. 10 2 トレ		1	亀山焼	甕	体部		
242	第18図71					No. 7 3 トレ		1		甕	体部		
243						No. 14 2 トレ		1	東播系	捏鉢	体部		
244						No. 6 4 トレ群		1	東播系	捏鉢	体部		

復元底径 (cm)	器高 (cm)	色 調		調 整		備 考
		内面	外面	内面	外面	
		灰褐色	灰褐色	ナデ	平行タタキ目	外面には幅1～2mm程の平行タタキ目がみられ、縦方向と横方向のタタキが重なって格子状になっている。
		灰褐色	暗灰褐色	ナデ	平行タタキ目	外面には幅1～2mm程の平行タタキ目がみられ、縦方向と横方向のタタキが重なって格子状になっている。
		暗灰褐色	黒褐色	ナデ	ナデ・指頭調整	口縁端部は断面方形状で、わずかに上方に肥厚させている。端面はナデ調整委寄って窪んでいる。外面口縁直下はわずかに窪むが、内面は直線的である。瓦質化しており、特に内面は摩滅が著しい。
		黄灰褐色	黄灰褐色	回転ナデ	平行タタキ目	外面には交差した平行タタキ目がみられる。焼成がよく、硬質。
		暗灰褐色	灰色	ナデ	平行タタキ目	平行タタキ目は縦横に交差して格子目状となっている。
7.0		暗灰褐色	暗灰褐色	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	高台は貼付高台であるが非常に低く、丸みをおびている。
6.8		暗灰褐色	灰褐色	ナデ	ナデ	高台は断面方形状で、やや外方へと開いている。
		暗灰褐色	黒褐色	ナデ	格子タタキ目	瓦質の甕である。外面には幅2～3mmほどの格子タタキ目がみられる。
		暗灰褐色	黒褐色	ナデ	格子タタキ目	瓦質の甕である。外面には幅2mmほどの格子目タタキ目がみられる。
		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	平行タタキ目	外面には幅1mmほどの細い平行タタキ目がみられる。
6.4		暗灰褐色	暗灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	高台は低く、内湾しながら体部へとつづく。
6.0		灰褐色	灰褐色	ナデ	へら削り?	壺の底部かと思われるが、詳細は不明である。
		黄灰褐色	黄灰褐色	ナデ	ナデ	産地不明の須恵器で、外面には回転ナデ調整による凹凸がみられる。
		暗灰色	暗灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	口縁部は上方に拡張しているが、先端は欠損している。口縁下端は丸く膨らむ。焼成がよい。
		黒褐色	黒褐色		ナデ 格子タタキ目	外面には幅4mmほどの格子タタキ目がみられる。非常に瓦質化しており、内面は器表が剥落している。
		青灰色	青灰色	ナデ	ナデ	内湾する体部である。
		黄灰褐色	灰褐色	回転ナデ	回転ナデ ナデ	外面にはミズビキ風のナデ調整がみられ、東播系の捏鉢の可能性が有る。
		灰褐色	灰褐色		回転ナデ	口縁部は上方に拡張しているが、端部は欠損している。端面は丸みを帯び、そのまま体部へとつづく。内面は器表が剥落している。
		暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	ナデ	捏鉢の底部付近と思われる。
		灰褐色	灰褐色	ナデ	ナデ 平行タタキ目	口縁部は断面方形状を呈し、端面はナデ調整によって窪んでいる。外面には平行タタキ目がみられる。底面および内面はナデ調整で、全体的に瓦質である。
		灰褐色	暗灰色	ナデ	平行タタキ目	産地不明の甕である。外面には平行タタキ目がみられる。
		暗灰褐色	灰色	ナデ	平行タタキ目	外面には幅4mmほどの平行タタキ目がみられる。
		黄白色	暗灰色	ナデ?	格子タタキ目	外面には格子タタキ目がみられるが、内外ともに風化が著しい。内面は器表が剥落している。
		灰褐色	灰褐色	ナデ	平行タタキ目	産地不明の甕である。平行タタキ目は不明瞭である。
		灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	捏鉢の小片である。
		暗灰色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	捏鉢の小片である。

第 17 表 鏡遺跡群出土中世須恵器一覽表 (13)

	挿図番号	写真番号	遺跡名	地区	小区	出土地点	破片数	種 類	器種	残存部位	口縁形態	復元口径 (cm)
245	第 18 図 72	図 6 - 1 - 1	鏡遺跡群	第 1 地点			1	東播系	甕	体部		
246	第 18 図 73	図 6 - 1 - 4					1	東播系	捏鉢	口縁部	A	
247							1	亀山焼	甕	口縁部		
248							1	東播系	捏鉢	体部		
249	第 18 図 74	図 6 - 1 - 6		第 5 地点	6 トレ中央		1	亀山焼	甕	体部		
250	第 18 図 75				5 トレ東半		1		甕	体部		
251	第 18 図 76	図 6 - 1 - 7			第 6 地点	表 採		1	亀山焼	甕	体部	

復元 底径 (cm)	器高 (cm)	色 調		調 整		備 考
		内面	外面	内面	外面	
		暗灰褐色	灰色	ナデ	平行タタキ目	外面には平行タタキ目がみられ、一部は交差して格子目状となっている。
		灰褐色	暗灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	口縁部は断面方形状で、上方に肥厚させている。内外面とも直線的に体部へとつづいている。
		暗灰色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	口縁部は断面方形状で、ほとんど肥厚しない。
		灰褐色	灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	捏録の小片である。
		暗灰色	暗灰色	ナデ	ナデ 格子タタキ目	外面には幅6mmほどの格子タタキ目がみられる。器壁の厚さは約0.7cmである。
		灰色	灰色	ナデ	ナデ 格子タタキ目	外面にはタタキ目がみられる。焼成がよく硬質。外面には透明釉がみられる。十瓶山焼の可能性がある。
		灰色	灰色	ナデ	ナデ 格子タタキ目	外面には幅3.5mmほどの格子タタキ目がみられる。器壁の厚さは約0.7cmである。

図版1 鏡西谷遺跡B地区・C地区出土の中世須恵器

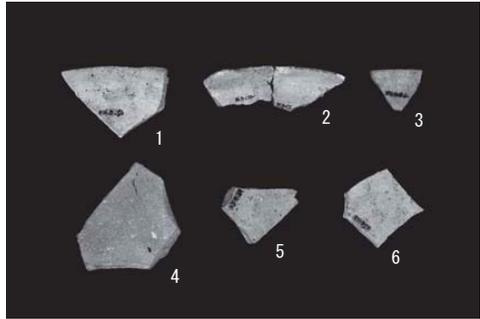
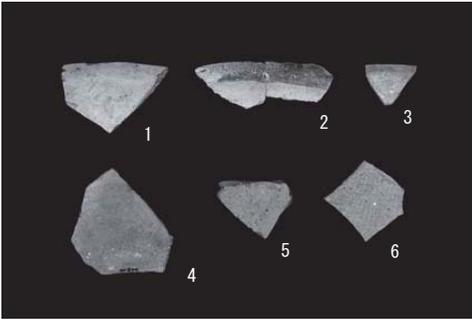


図1-1 B地区出土東播系須恵器捏鉢(1~4)・亀山焼甕(5・6)

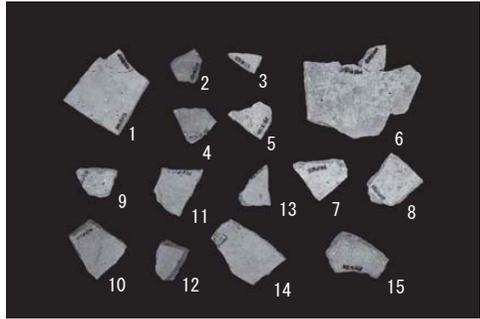
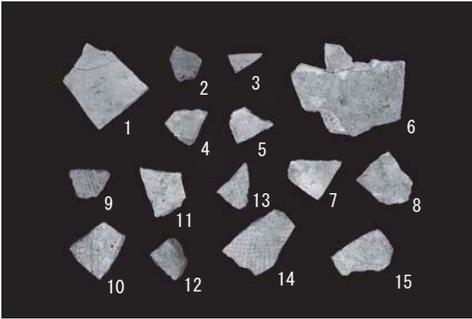


図1-2 B地区出土東播系須恵器捏鉢(1~5)・亀山焼捏鉢(6~8)・甕(9~14)・産地不明須恵器壺(15)

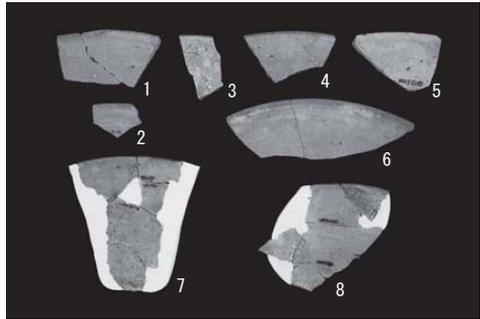
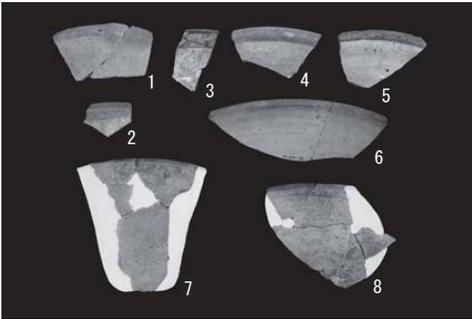


図1-3 C地区SB01出土東播系須恵器捏鉢

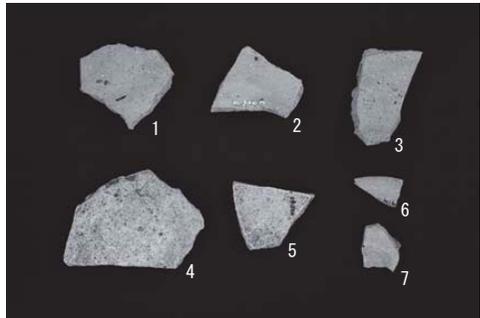
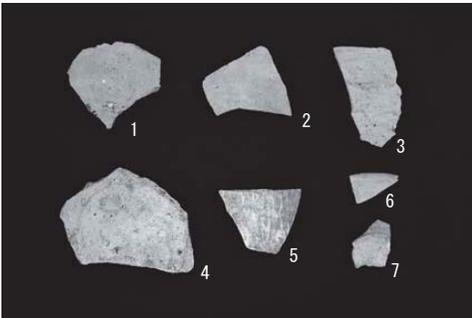


図1-4 C地区SB01出土東播系須恵器捏鉢(1~4)・甕(5)・産地不明須恵器壺(6・7)

※写真内の数字は第2~13表の図版番号に一致する。各図左が外面、右が内面である。

図版2 鏡西谷遺跡C地区（SB01）出土の中世須恵器

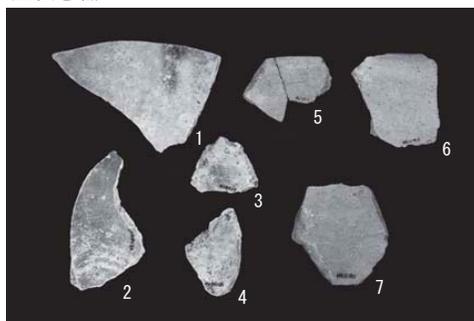
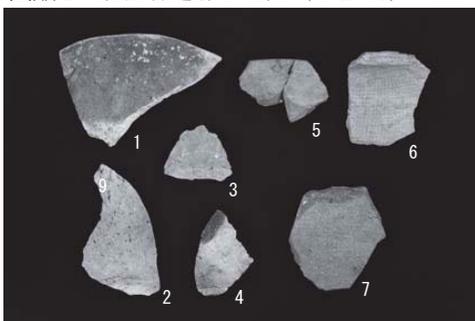


図2-1 C地区SB01出土亀山焼鉢(1~4)・甕(5・6)

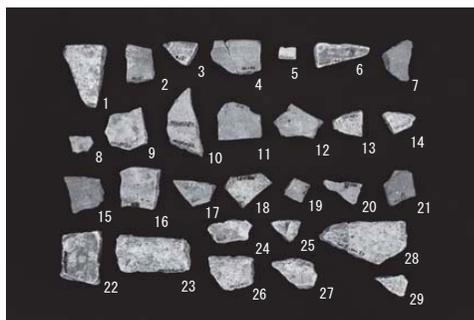
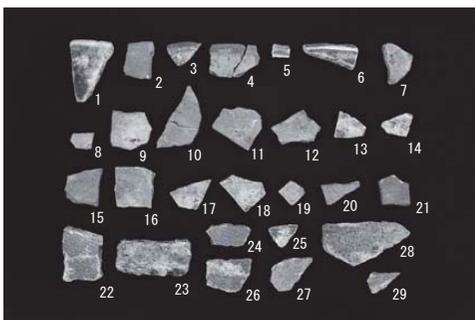


図2-2 C地区SB01出土東播系須恵器捏鉢(1~21)・甕(22~29)

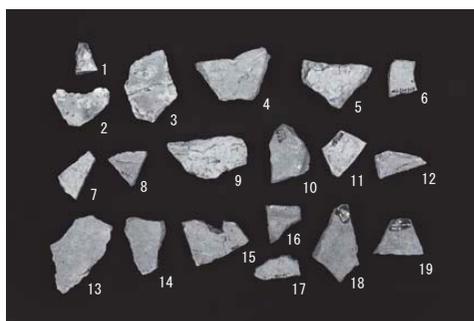
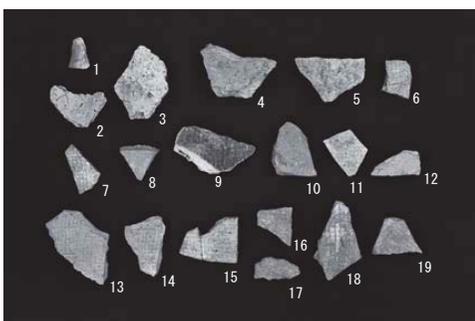


図2-3 C地区SB01出土亀山焼捏鉢(1~3)・甕(4~19)

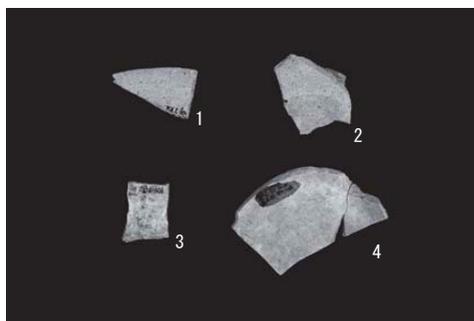
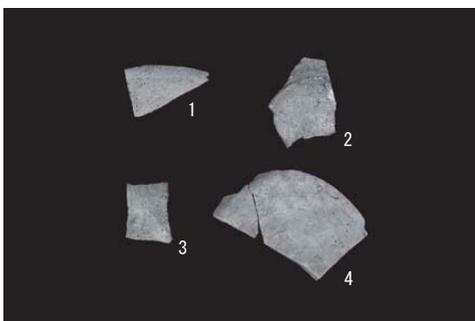


図2-4 C地区SB01出土産地不明須恵器碗(1・2)・碗または坏(3)甕(5)・坏(4)

※写真内の数字は第2～13表の図版番号に一致する。各図左が外面、右が内面である。

図版3 鏡西谷遺跡C地区出土の中世須恵器

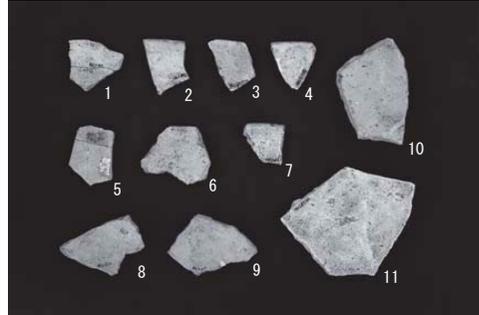
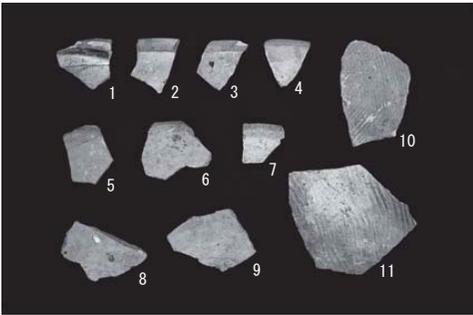


図3-1 C地区北西部ほか出土東播系須恵器捏鉢(1~9)・甕(10・11)

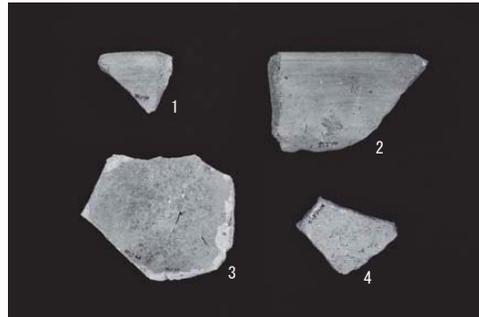
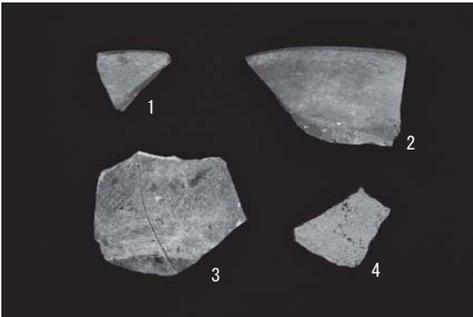


図3-2 C地区北西部出土亀山焼甕(1~3)・産地不明須恵器(4)

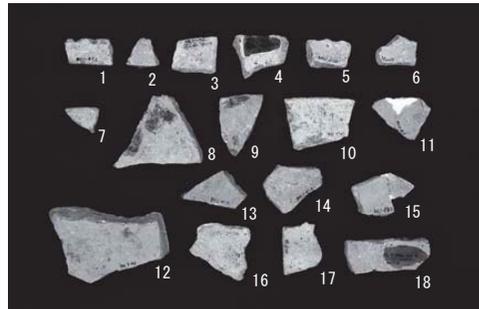
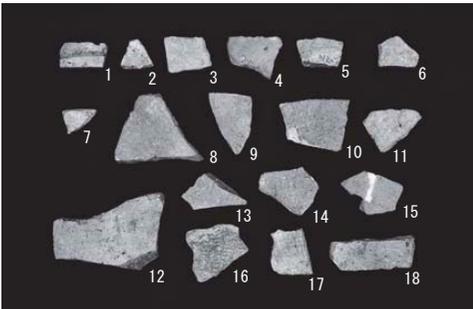


図3-3 C地区北西部ほか出土東播系須恵器捏鉢(1~5)、産地不明須恵器甕または壺(6)、亀山焼甕(7~18)

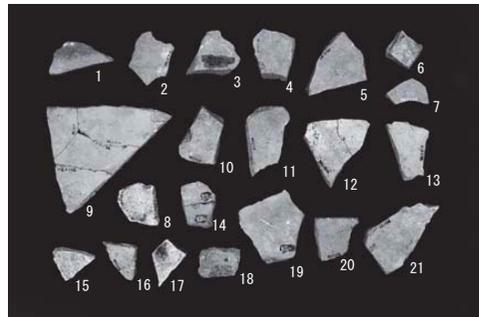
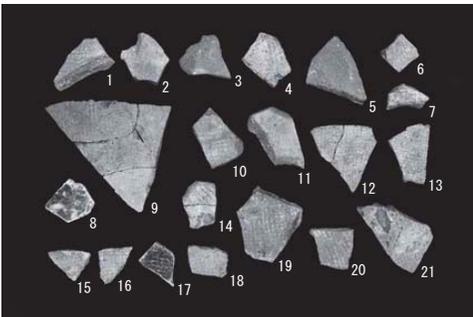


図3-4 C地区北西部ほか出土亀山焼甕

※写真内の数字は第2~13表の図版番号に一致する。各図左が外面、右が内面である。

図版4 鏡西谷遺跡C地区・D地区・E地区出土の中世須恵器

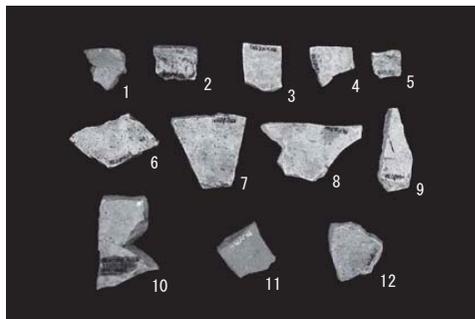
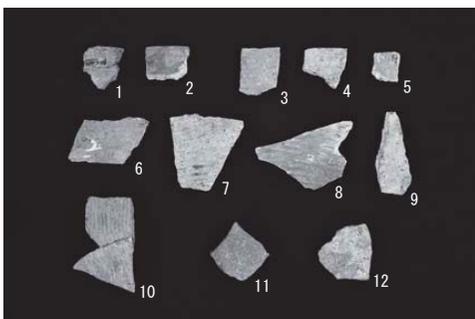


図4-1 C地区東南部ほか出土東播系須恵器捏鉢 (1・2)・甕 (3～10)、亀山焼甕 (11)、産地不明須恵器甕または壺 (12)

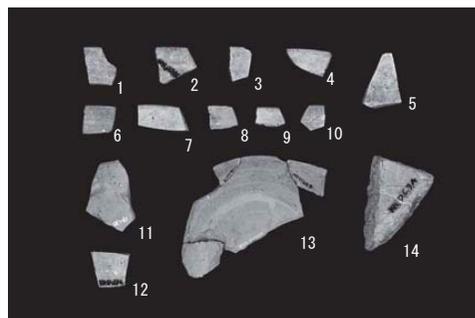
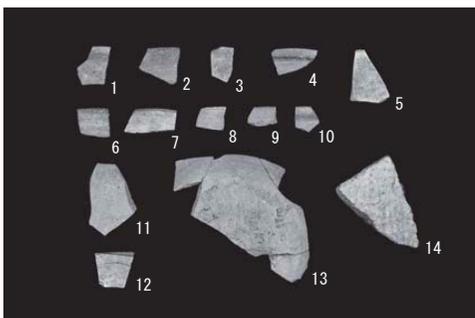


図4-2 D地区出土産地不明須恵器碗または坏 (1～10・12)・碗 (11・13)、亀山焼甕 (14)

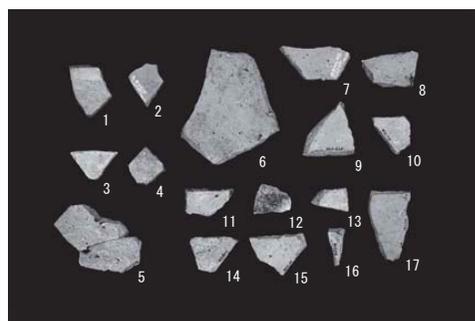
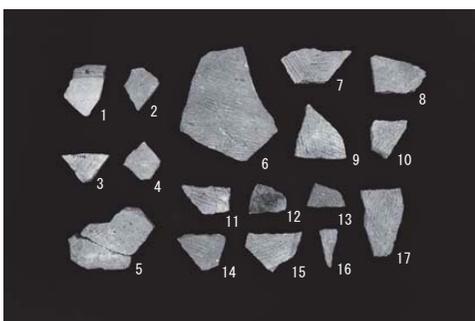


図4-3 E地区出土東播系須恵器焼捏鉢 (1～5)・甕 (6～17)

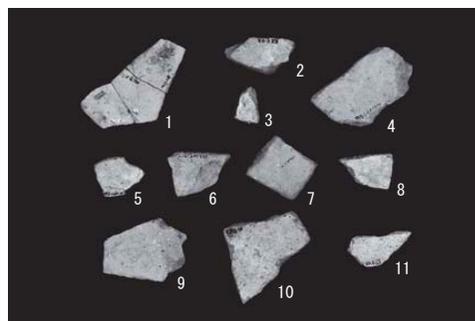
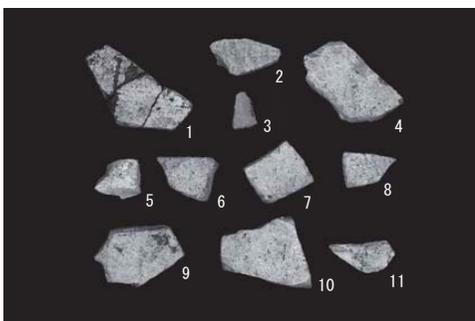


図4-4 E地区出土亀山焼甕

※写真内の数字は第2～13表の図版番号に一致する。各図左が外面、右が内面である。

図版5 鏡西谷遺跡G地区、鏡東谷遺跡、鏡千人塚遺跡出土の中世須恵器

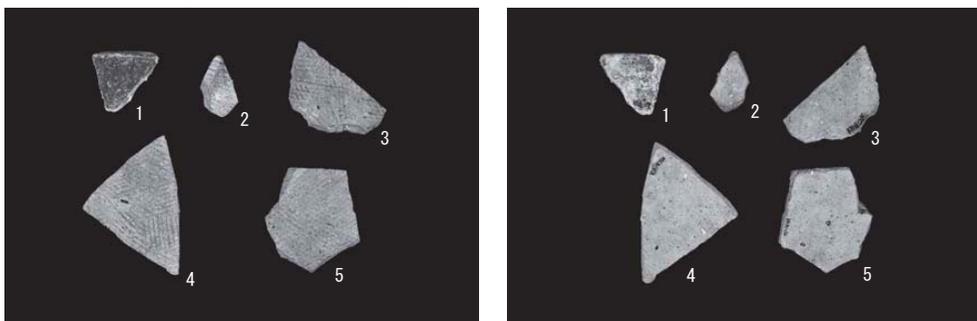


図5-1 鏡西谷遺跡G地区出土亀山焼捏鉢(1)・東播系須恵器甕(2~5)

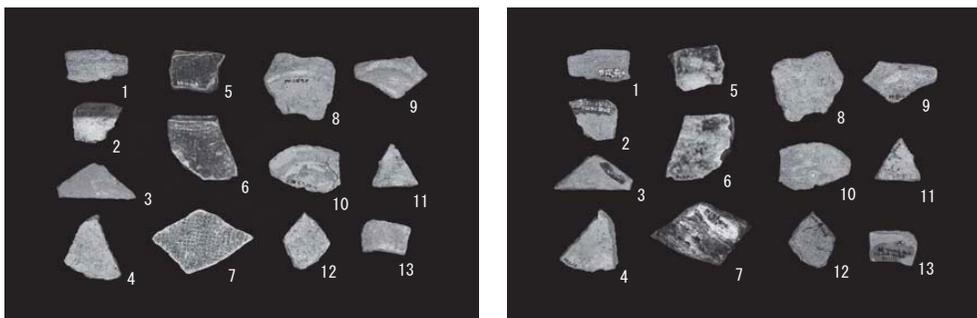


図5-2 鏡東谷遺跡出土東播系捏鉢(1~3)・甕(4)、亀山焼甕(5~7)、産地不明須恵器壺(8~10)、埴(11)、壺または甕(12・13)

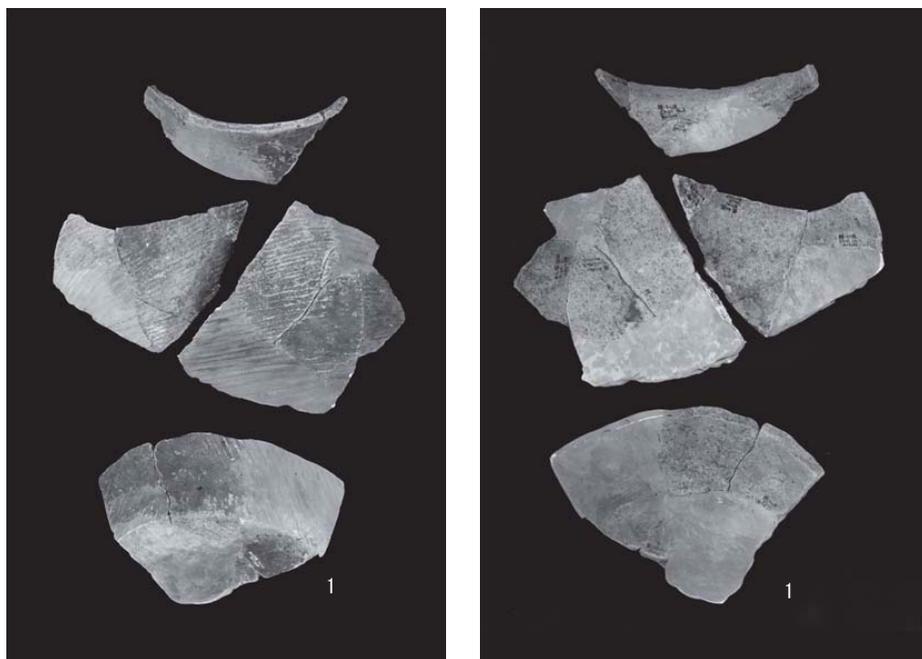


図5-3 鏡千人塚遺跡亀山焼甕

※写真内の数字は第2~13表の図版番号に一致する。各図左が外面、右が内面である。

図版6 鏡地区出土の中世須恵器

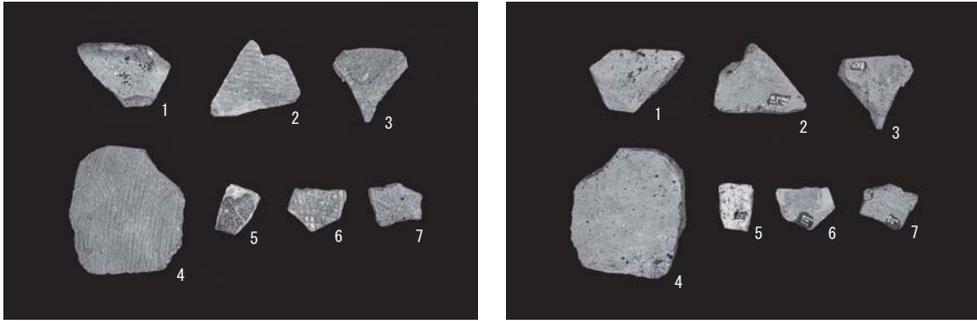


図6-1 鏡地区出土の東播系須恵器捏鉢(1)・甕(2~4)、亀山焼甕(5~7)